

ボーダーは変わり者と人が多い所だから僕を見つけてくれて、友達になってくれそうだという理由で入りました。後悔はしてません。

ガイドライン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボーダー。

そこは様々な人がいて、一癖も二癖もある人達がいる。

そんな風な印象を持っている時崎 ハジメは、目立たない、見つからない自分を見つけてもらうためだけに、そして友達を作るためにボーダー入隊を目指す。が、

「見つからないから、試験が受けられないな」

と、初めから前途多難。

果たしてボーダーに入ることは出来るのか。ハジメを見つけてくれる人は現れるのか。そして友達100人出来るかな??

そんな感じで緩く書いていきますのでよろしくです。

”時崎 一”シリーズです。

人格としては”とある”を参考にしていますので。

基本的に戦闘シーンはありません。

あまり戦闘シーンを書くセンスがないので（笑）

雰囲気で見キャラ書いてるので違和感あるかも。

それでもよければ見てください。

1ヶ月に一回書けたらいいかなー（笑）

あつ。それと能力的にチートですけど、運動神経的なものはオッサムと”どっこいどっこい”です。ここから少しずつ強くなる予定……かな（笑）やることはめっちゃくちゃかもしれませんが（笑）

目次

とりあえず入隊したいです。	1
ストーリーカー被害。勘違いというのは、ない。とは言いきれぬ。	5
手紙とは気持ちが伝わるものでありたい。	10
学校での戦闘	16
時崎一とサイドエフェクト	23
三輪隊	30
入隊条件	37
チームとトリオン体	42
迅と嵐山隊	48
V S 遠征部隊	55
本部と風刃とハジメ	61
加古隊①	67
木虎 藍①	74
お好み焼きと友達	79
遊真とハジメ	85
加古隊②	91
Xmasパーティー	96
風間隊①	102
影浦 雅人①	108
那須隊①	117
1月8日①	124
1月8日②	132
ある日の訓練中のお話（緑川 駿）①	140

ある日の訓練中のお話（緑川 駿）②
大規模侵攻（始まりの前）

とりあえず入隊したいです。

「さて、どうしようかな……」

” ボーダー” とは防衛機関のこと。

近界民の侵攻に対抗し、「こちら側の世界」を守るために設立された民間組織。近界民の技術を独自に研究し、その侵略行為から街を守る事を主な業務としている。

そんなところにまるで初めて入る高級ホテルの前に立ち「ここに入るの!?’’みたいにおどおどしい、ということもなく気楽にボーダー本部の入口前で立ち尽くしている少年がいる。

「なあなあ!ボーダーに入ったらどうする!?’」

「そりゃA級を目指すだろう!」

「んな簡単になれるか!」

「私、嵐山さんに会ってみたい!!!」

「私も!!」

立ち尽くしているのに誰一人その少年を見てない。

ボーダー入口へ進む進路ど真ん中に立っているのにも関わらずにまるでそこに侵入しないように無意識に誰もがハジメを避けているのだ。

その流れに乗ってハジメもボーダー本部の中に入ればいいのだが

「見えないなら、意味ないよね」

と、一向にその場から動かない。

そして数十分間が立ち、ボーダー本部へ入る者達はいなくなりそこにはハジメしかいなくなっていた。

「さて、どうしようかな」

ボーダーに入る。

それは確かに試験などを受けて受からないといけないが、まずその試験さえ受けられないならどうすればいいのか??’

ハジメはまずそれをクリアしないといけないのだ。

「試験を受けられない場合の対策も書いてほしいな」

………書いてあるはずがない。

.....
半年後。

またボーダー入隊試験の日がやってきた。
しかし、未だに誰もハジメを見つけられない。

.....
一年後。

立ち尽くしている。

.....
一年半後。

まるでそこに生えているかのようなようだ。

.....

.....

.....

「もうーなんで本部にいかないといけないのよ!!」

「すみません。まだ荷物が残ってまして」

「それにたまにはいいじゃないか」

「それはいいけど……私が荷物持ちつてのが気に入らないの!」

「でも今日逃すと、俺の荷物、全部質屋に持っていかれるですよ」

「ええ!! そうなの!?!」

「本部に荷物を一週間。同じ場所に置いておくと掃除のおばさんが勝手に質屋に持っていくんです」

「し、知らなかった……えっ! ちょっともう一週間過ぎてない!! 荷物本当にあるの!?!」

「ちゃんとありますよ。嘘ですから」

「……ツツ!!?!?!?! 鳥丸ツツ!!!」

「落ち着け小南」

まるでコントをやっているかのように三人組が本部へ向かって歩

いてきていた。

玉狛第一の木崎レイジ、小南桐絵、烏丸京介。

烏丸が本部から玉狛支部に移動して一週間以上経ったある日のこと。

そしてその日はボーダー入隊試験日でもあった。

「よく見ろ。周りはこれからボーダーに入るかもしれない人がいるんだぞ。ここで良いところを見せたほうがいいだろう」

「確かに……後輩になるかもしれないわね」

レイジの言葉を受けて烏丸への攻撃を止めた小南。

玉狛支部であり訓練に来たわけでもないので私服である三人組は、周りからしたら関係者なのかな？という感じ齒科映っていなかった。

それでも後輩になるかもと言われて身を引き締める小南。

「大丈夫ですよ。こっちは本部に入るんですから。基本的に僕達と関わることはないですよ」

「でも後輩になるんでしょう！ちゃんとしてないと笑われるわよ!!」

「そうかもしれないませんが、いままで直で後輩がいた事あるんですか??」

そう言われてぐうの音もでない小南。

確かに玉狛支部で訓練は出来る。本部にいつて訓練することだつてある。しかし直で誰かを教える。それこそ”後輩”として教えたことはなかったかもしれない。

「い、いいじゃない!!もしかしたら玉狛に入ってくれる人もいるかもしれないし!!!」

「そんな奇特な人いるんですか??」

「ブルーメランになってるぞ烏丸」

「それだとまるで玉狛がおかし……イタツ!!!」

後ろ向きに歩きながらだったために誰かにぶつかってしまった小南。思わず尻もちをついた小南はお尻を擦りながらぶつかった相手の方を見ながら

「ちよつと!!!よそ見なんてしてるんじゃない……あれ??」

そこには誰もいなかった。

確かに誰かに当たったはずなのに、電信柱とかではなく、人と接触

した感触があつたのに。

「何してるんだ小南。一人で倒れて」

「ねえ!!ここに人がいたわよね!!!」

「何言ってるんですか小南先輩」

「いたわよ!!そうじゃなきゃ私が転ぶわけがないでしょう!!!」

「…………なるほど。それほど疲れていたんですね。」

すみません。今日はやめて帰りましょう」

「なんで私が可愛そうな子になってるのよッ!!!??」

しかし本気で小南を心配したのだろう。烏丸と木崎二人では小南を挟んで腕を取り無理矢理本部から離れることにしたのだ。

「今日の当番、変わってやるよ」

「帰ったらマッサージさせていただきますね」

「待って!!私、疲れておかしなことを言ってるわけじゃないのよーッッ!!!」

しかしそんな言葉が二人に届くこともなく玉狛支部に戻ることもなかった。そして小南が誰かに当たったと思われた人物。もちろんそれはハジメであり

「……………見つけた」

誰にも聞こえない声を発してまたハジメは姿を消した。

ストーリーカー被害。勘違いというのは、ない。とは言いきれない。

「それでもう一回言ってもらってもいいか??」

「だから……ストーリーカー被害にあってるって言ってるのよツツツ!!!」

玉狛支部。

そののリビングで寛いでいた木崎と鳥丸。そし手オペレーターの手佐見、実力派エリート迅速がドタバタとリビングに入ってきた小南の言葉をもう一度聞き直していた。

そして聞き直していた言葉について迅が一言。

「気のせいだ。はい、終わり」

「ふざけんじやないわよツツ!!!」

そういつて迅の背後を取り首を締める小南。

迅のサイドエフェクトで未来を読めばいいがこんな風な天然キアラというか素直すぎる子は様々なルートがあるので絞り込むのが難しいらしい。

「か弱い女のコが怖い目にあってるのよー!!!」

(か弱い??)

(か弱いか……??)

(か弱い、ねえ……)

3人とも疑問に思ったが決して言葉にはしなかった。

いまは迅が引き受けてくれている。巻き込まれるのは勘弁である。

「待つて、待つてくれ!!俺には見えないんだよ!!」

「何がよッ!!!」

「小南がストーリーカーにあってる未来がッ!!!」

「はあッ!!!」

その言葉に衝撃を受けたのか揺らしているタイミングで首を締めていた手を緩めた。そのために迅の身体は吹き飛ばされる形になり床に倒れ込んでしまった。それでも大したダメージはないので問題はないのだが

「じゃ本当に私の勘違いって言うのツ!!!?」

「だからそう言ってるだろう……」

「でも明らかに視線を感じるのよ!!」

「ねえ、小南。どんな時に感じるの??」

迅の言葉を受け入れられない小南に疑問を持った宇佐見。

こんなに引き下がらないのはきつと理由がある。

そう感じた宇佐見は本当にヤバいことが起きているかもしれないと感じたのだ。

「始めはボーダー本部からの帰りで、そのあとはここの帰り……そしたら家から出る時とか、学校とか……」

「ちよつ、ちよつとツツ!!!?かなりマズイんじゃないのソレツツ!!!」

思っていた以上の事が起きていた。

一回二回ならともかくこんなにも頻繁に視線を感じるならそれは勘違いではなく事実となる。

「だからそう言ってるじゃない!!!」

「ちよつと迅さん!!本当にストーカーじゃないの!?!」

「い、いや……それは違うんだ……」

なんか曖昧な言葉に引つかかった宇佐見と小南。

こういう時のおんなの子の勘は鋭いのだ。

「ちよつと迅……」

「迅さん……何隠してるの??」

「アハハ……。まあ、かわいい後輩を怖がらせてまで隠すことじゃないな……」

「やつぱり隠してた!!!」と指を指して大声を出す小南を「指を指すな」となだめる木崎。烏丸にいたってはお茶を飲んで未だにリラックスしている感じであるが

「何隠していたんですか迅さん。もしかして玉狛と関係があるんですか??」

「ああ。玉狛だけじゃなくボーダーにとってもな。ただどんな人物なのかは分からない」

「それってまだ迅さんがその人を見ていないから……あれ??」

宇佐見は自分で言葉をいながらある疑問を持った。

「確か迅さんのサイドエフェクトって対象人物を見ないとその先の未来が見えないんじゃないか……」

「ああ。その通りだ。けどある日を堺に未来が大きく変わった。だけどその人物はその未来でもまだ見えていないんだ」

「えっ、ええ……。どういふことなのよ……」

「そのある日の堺ってやつは小南。お前が本部の前で派手に転んだあの日からというわけだ」

「は、はあああツツ!!」

意味が分からなかった。

小南が本部で転んだ日から未来が変わり、そして迅はその未来を変えたと思われる人物が見えないなんて……

「意味が分からないんだけど!!!」

「俺だって詳しくことが分からないから隠していたんだよ。」

とにかくその日、小南が本部から支部に帰ってきたあとだ。

お前らを迎えに外にいたときに未来が変わったんだ……」

「だからあの時、小南先輩の様子を見て驚いた割にはかなり焦っていたんですね……」

烏丸と木崎に引つ張られて玉狛支部に帰ってきたあの日。

事前に木崎から連絡を受けていた迅は小南がどんな目にあつたのか聞くのと、体調不良ならこの先の未来でどのタイミングなどを把握するために外で待っていた。

しかしそんな事が吹っ飛ぶほどの衝撃を迅は受けた。

小南達の姿を見ていきなり未来が大きく変わったのだ。

それも”ある人物”を中心に変わっていく未来。しかしその人物の姿が見えないという未来が見えたのだ。

(おいおい……。一体何が起きてるんだ……)

かなり焦った。というか冷や汗をダラダラ出るほどに焦りまくっている。小南達を見て未来が変わる。それは分かるが……。その未来で全く姿の見えない誰かがいるという、いままでになかったことが起きていることに一種の恐怖を感じるのだ。

「どうしたんですか迅さん。顔色が悪いようですけど……」

「い、いや……小南がそんなに体調が悪かったことが未来で見えなかったからな……ちよつと心配なんだよ……」

「確かに……よし、小南。いまから病院だ」

「はあ!!体調の問題はないって!!」

「万が一がある。つべこべ言わずにいくぞ」

ふざけるなー!!と小南の尊い犠牲のおかげでその時は深く追求されなかったが……

「……これは、とんでもないことになるのか……」

それからしばらく様子を見ていたがその未来は変わることはなかった。しかしその変わった未来は惨劇が起きる。という類ではなく、どちらかというところ……

「はあー!!?ボーダー内の隊員達の関係がより良くなるって……んなわけがないじゃない!!」

「いやいや本当だって、俺のサイドエフェクトがそう言ってる」

この言葉が出たときはほぼ確定事項。

つまり少なくとも蟠りというか、敬遠している隊員同士が仲良くなる。そんな未来があるというのだ。

「といつても合わないのは合わないけど、それでも改善されるかな。それに人によってはその人自体が大きく変わったりとかね」

「まるで宗教のトップみたいな人ですね……」

「姿は見えないけど、どちらかというところと真反対で、好き勝手にやるような人物かな」

「そんな人がボーダーを変える……」

聞いている感じではどうも嘘っぽいけど、こういう時の迅の言葉は外れることはない。

「なら、その謎の人物はいつ会えるのよ?」

「さあ?」

「さあ??って何よ!!隠さずに教えなさいよね!!!」

「あんな小南。見えない人物なんだぞ。会うタイミングなんて教えてみる。どんな影響があるか分からないだろうが」

「うう。で、でも、それとストーカーはどう関係があるのよッ!!!!」
「覚えていたかあ……」「ちよつと迅!!!」

悪い悪い。と謝っていているが全然気持ちが悪もっていない。

「安心しろ。今日の帰りからそのストーカーはいなくなるよ」

「は、はあぁー!!!なに適当な!!!」

「いなくなるよ!!。んなら家まで送っていくけど」

「……………なら、今日はお願ひするわ……………」

……………

翌日。

「えっ。視線を感じなくなったの??」

「う、うん……………」

「言つたろう。もう現れないから安心しろ」

「で、でもなんでいきなりなくなるのよ!!!」

「それはもちろん小南が困っていたからだろう」

「え。なにそれ。そんなのでストーカーってなくなるの!!!??」

「知らなかったんですか小南先輩。」

基本的にストーカーって優しいんですよ。そして人の嫌がることをしないんです」

「そ、そうなの……………意外に人がいいのね……………」

「小南……………そんなわけないかは……………」

「えっ。……………鳥丸ツツツ」

!!!!!!!

手紙とは気持ちしが伝わるものでありたい。

「それじゃもう大丈夫なんだね」

「まあね。でも本当に何だったのかしらアレ……」

「桐絵ちゃんのファンだったりして」

「はああく!?それはないわ。だって私ボーダーと私生活別だもん」

学校の帰り。綾辻 遙と一緒に下校していた小南。

学校の違う二人だがこうして本部までの帰り道を一緒に帰ることがある。

ここ数日、あのストーカーからの視線はなくなりホツとしているが突然なくなったらなくなったらで逆に不気味だと感じていたのを綾辻に話していた。

「でもそのボーダーからってことはないの??」

「うーん……どうなんだろう。私、そんなに本部に顔を出してないしなー」

「そっか。でも桐絵ちゃんが怖い思いしなくてすむんだから良かったわ」

「ありがとう。このまま本部に行くの??」

「うん。今日は嵐山さん達仮想訓練するって言ってたから」

綾辻は嵐山隊のオペレーター。

のほほんとした性格ではあるがこれでも優秀なオペレーターである。

「へえー。ウチの隊はあまりしないけどマメよね〜」

「桐絵ちゃん達はもうちょっとやったほうが……」

「私達は、私は大丈夫!!」

「あはは……」

これ以上言っても……と笑うしかないと思った綾辻だった。

そこでパツと思い出したように小南が

「そういえば木虎ちゃんは元気??色々忙しそうだけど」

「うん元気だよ。ただ……」

「ただ??」

「……………」

「うわぁーまた来たんですねコレ…」

嵐山隊の作戦室のテーブルには大量の手紙があった。

それも一人に宛てた、木虎 藍に向けられたファンレターのような手紙だった。

そんな光景を見て時枝 充もげんなりとしていた。
なぜならコレは木虎だけではないのだ。

向かい側の席には嵐山もおり、その前には木虎と変わらないほどの手紙の量が……………」

「お疲れ様……………」って、またきたんですね」

「無視するわけにはいかないからな。しかしコレは…」

「ストーカーですよ。ストーカー」

そういつて手紙の一つを手を持ち上部の方を

「な、何やってるの木虎ちゃん!!」

「離してください綾辻さん。破けません」

「破いちゃダメだからツ!!!」

強硬手段に出ようとすする木虎を止めた綾辻。

そういま木虎と嵐山が悩んでいるのはこの手紙。

それも普通の手紙ではなく、

「毎回毎回白紙の手紙なんて正気の沙汰ではないです。いつそうお祓いに出しますか?」

「き、緊張して書けなかったり……………」

「ありません」

きっぱり答える木虎にもう苦笑いするしかない綾辻。

しかしそんな様子を見た時枝がフツと手紙を手に取り

「でもおかしいですよね。白紙の手紙なんて……………」

「時枝先輩。ですからさつきからそうだと……………」

「そういう意味じゃなくて。白紙ならなんで嵐山さんと木虎に手紙が届くの?」

「「ツツツ!!!」」

そう。普通なら届くはずの手紙。

しかしその手紙は何も書いていない。手紙の内容から宛先や相手先さえも。

なのに二人とも、いや、誰もその事実をまるで見えなかったように、当たり前のように嵐山と木虎に向けられていたと思っていたのだ。

それに気づいた途端木虎は一気に手紙から離れた。

気持ちの悪い。それが全身で感じたため本能的に身体が動いたのだ。

嵐山は冷汗を書いて苦笑いをしている。

あまりにも受け難い事実だが逃げるわけにもないと踏ん張ったのだろう。

「……鬼怒田さんに、鑑定してもらおうか……」

……

「結論からいうとコイツは特殊なトリオンで纏われた手紙じゃ」

その言葉に声が出ない嵐山隊。

一応危険性がないというのは前もって教えられたがそれでも

「な、なぜ、それが俺達の元に……」

「知るか！むしろワシが聞きたいわい!!!こんな未知のトリオンなんて見たこと、聞いたことないぞツツ!!!」

かなり興奮気味の鬼怒田だが、嵐山達はさらに謎が深まる。

そんな特殊な手紙がどうして嵐山隊の嵐山と木虎に。それもこんなにも大量に……

「それで、この手紙。なんて書いてあったんですか??」

「読めん」

「はい??」

「だから読めんと言っておる!!!」

どうしてお前らに空白の手紙が届いてどう選別されたかも分からん!!!分かつてるのはこれが未知のトリオンで作られた手紙だということだけじゃ!!!」

……

「つて、ことがあったの……」

「それ、ある意味私より酷いわよ……………」

謎の手紙。謎のトリオン。そして大量の手紙。

頭が痛くなるようなものがてんこ盛りである。

「うーん。……………なら、ちよつと迅に聞いてみる??」

「分かるのかな??」

「やってみる価値はあるんじゃない。ちよつと待つてて」

この前も迅のおかげで助かった。

こんなトリツキーな事件は悩んで時間をかけるよりも迅に聞いたほうが早い。

早速携帯を取り出して迅へ

「もしもし。ちよつといいかしら」

『……………おいおい……………見えていたけど、また妙な未来を……………』

どうやらこの電話自体も見えていたようだが、なんか元気がない。

「なに??もしかしてヤバい未来が見えていたの??」

『いや危険性はないんだが……………とにかく手紙のことだよな』

やっぱり歯切れが悪い。

しかしこういうときこれ以上聞いても答えてくれないことは知っているので早速本題に入った。

一通り話を聞いた迅は携帯の向こう側で「はあ……………」聞こえづらいがため息をして

『なら鬼怒田さんにこういって。その手紙の周りにトリオンを充満させたらいいって』

「それどういうこと??」

『悪いけど説明している暇がなくなった。』

これから探さないといけないものがあるんだ。じゃ』

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ迅ツ!!!」

一方的に電話を切った迅。

なんか様子がおかしかったが迅なら大丈夫だろうと頭を切り替えて綾辻に迅から教えてもらった事を伝えた。

「それで、なにが分かるんだろう??」

「さあ?まあ、無意味なこととは言わないでしょう」

「読めたぞ。手紙」

「ほ、本当ですか!!?」

「流石迅といったところか。しかしこっちとしては自分達の手で謎を解析してかつたんだが……まあ、まだトリオンの謎があるからいいでしょう」

そういつて鬼怒田さんは白紙の手紙を一枚手にとり、透明の箱に入れた。その様子を嵐山が見守る。

今回は一人だけで来ている。木虎にこれ以上の精神の疲れを負ってほしくないという配慮である。

「トリオン自体の謎はまだ分からぬが、コイツがどんな性質を持っておるかは分かった」

「性質、ですか?!」

見ておれ。と鬼怒田さんは透明の箱に繋がれたケーブルの先にあるスイッチを押した。するとそこからは箱からトリオンが溢れ出して、手紙にそのトリオンが

「ふ、付着した?!」

「トリオンは生命エネルギーだということは知つとるな。」

そのトリオンを利用してトリガーを使用しとる。つまりだ。トリガーでも生命体でもないこの手紙にトリオンが付着するなんてことは絶対にありえん」

しかし現に目の前で手紙にトリオンが付着している。

それどころかその付着したトリオンがまるで……

「これって……文字ですか!!?」

「そうだ。手紙には謎のトリオンがあった。どうやらその謎のトリオンに箱から出てきたトリオンが付着したんだ。これで手紙に書かれた文字が読める」

「付着って、そんな……」

「ああ、ありえん。トリオン同士がぶつかればそれは一緒になる。しかしこれは付着としか言いようがない。もつと詳しく調べれば何か分かるかもしれんが……とにかくいまは手紙の内容だけは分かる。」

それを読んでさっさと帰らんか」

そういつて鬼怒田さんは別の手紙を手に取り研究へと戻った。

そして残された嵐山は手紙から徐々に浮き出てくる文字をジッと見ていると

.....

「はあ!!?!?入隊志願書!!?!?」

「そうなの。本当にビックリしたわ……」

手紙解明から翌日。

小南は綾辻から事の顛末を聞いていたのだが

「な、なんでそんなものが准と木虎ちゃんに大量に届くのよ!?!」

「嵐山さんの推測だと広報役としてテレビに出てるからじゃないかって。ほら嵐山さんと木虎ちゃん人気あるから」

「それだと時枝先輩と佐鳥先輩が可愛そうね」

「アハハ……」

確かにそれだと二人が可愛そうだ。特に佐鳥が。

あのあと、とりあえず全ての手紙を見るために訓練室で部屋をトリオンで満たして手紙を読むことにした。

すると嵐山と木虎で4：4。そして時枝に2あったのだ。

紛れ込んでいたようだがそれでも時枝はまだ良かった。

問題は一通も書いてない佐鳥だろう。

シヨックでしばらく手紙から手はなれなかったという……

「で、何処の誰よ。そんな非常識な手紙を送ったのは?!?」

「名前は時崎 一。中学3年生みたいだけど……」

「だけど、なによ?!?」

「……いないの……」

「なにがないの?!?」

「学校に問い合わせたけどどの学校もそんな生徒はいませんって。時崎 一は知らないっていうの」

学校での戦闘

バチバチと何かが聞こえたその瞬間に聞こえてくる避難指示。

『緊急警報!!』

そしてグラウンドに真っ暗なゲートが出現した。

『市民の皆様は、直ちに避難してください!!』

「なっ!!?」

そしてそれがある中学校でゲートが開き、ネイバーが現れたのだ。

.....

「戦う気なのかオサム??」

「ここには僕達しかいないんだ。

応援が来るにしてもその間に被害が出る」

「でも、オサム。死ぬぞ」

「ツツ!!!」

偶然出会ったネイバーである空閑遊真。

そしてボーダー隊員である三雲修はいま学校で発生したゲートによりネイバーが侵入した事態をどうにかしようとしていた。

しかし修はC級隊員。

勝手な戦闘行為は最悪ボーダーを首になる可能性がある。

その前に遊真が言ったようにネイバーと戦えば間違いなく修は死ぬだろう。

それだけ修とネイバーの力の差は歴然なのだ。

しかし、それでも修は握った手を強く握り直して

「それで、ここで動かなきゃボーダーに入った意味がない!!

目の前で奪われてしまう命を救えないなんて真似は僕には出来ない!!!」

そう言い切り修は校舎に侵入しようとするネイバーを退治しようと動く。そして残された遊真はニヤリと笑い

「本当に、オサムは面倒の鬼だな」

.....

「ここは僕に任せて皆は逃げろツツ!!!」

「み、三雲ツツ!!!お前ボーダーだったのか!!?」

「そんなことよりも早くツツ!!!」

ギリギリ生徒に、クラスメートに襲いかかろうとしたネイバーは校舎の外へ追い出せた修。しかしネイバーに対しての大したダメージを与えたわけではない。すぐにでもここに戻ってくるかもしれない。仲間を呼ぶかもしれない。

「き、気をつけろよ三雲ツツ!!!」

「ありがとうね三雲君ツツ!!!」

なんとかクラスメートを逃がすことは出来たが、このままだと被害が広がる。なんとかしてネイバーを倒さないと。

しかし、やはり三雲とネイバーの力の差は気合いだけでは埋められなかった。

戻ってきたネイバーに簡単に手を切断されトリオンが漏れ出す。

そして修からネイバーには大したダメージを与えられていない。

このままだとヤバいと思っっているが迫りくる攻撃に修は防御しかできなかった。

レイガストによってなんとか防御は出来ているが長くは持たない。ヒビが入っているシールドもやがて限界を迎えて修ごと攻撃が当たってしまった。

C級隊員である修は緊急脱出ベイルアウトは付いていない。だからトリオン体であった身体が元の生身の身体に変わった。

つまりここで修が攻撃を喰らえば……

無情にも振り下ろされる刃を修は目を瞑るしか出来ずに……

「大丈夫ですか、三雲君??」

「……………えっ??」

修には信じられない光景を見ていた。

振り下ろされたネイバーの刃。

しかしそれを目の前の少年は片手で止めていた。

それも同じ制服で、トリオン体でもなく、武器も何もなく、生身その一つでネイバーの攻撃を受け止めていたのだ。

そしてそれを修を助けようと駆け出して歩みを止めていた遊真も見ていた。

「……………アイツ。面白いね……………」

攻撃を止められたネイバーはすぐさまもう一本の刃を差し向けるが、確実に胴体に当たった攻撃も止められてしまう。

何もしていない。なのにその攻撃全てを無力化している。

一体何が起きているのかと。パニックになっている修に少年が

「あの。またトリオン体になれますか??」

「えっ。い、いや……………しばらくは無理で……………」

「そうですか。じゃこれ、どうしようかな??」

そして振り返った少年はネイバーの胴体に手で触れた。

するとさつきまで動いていたネイバーがまるで緊急停止したかのように動きを止めた。

何をしたのか分からなかった。

だけどその行動だけで間違いなくネイバーが動きを止めたのだ。

「これでコレは動きませんが、他にもいますよね??
それも止めたほうがいいですよね??」

「き、君は一体……」

「やっぱり覚えてない。まあ、仕方ないですけど

改めて自己紹介しますね。同じクラスの時崎一です」

……

「君が三雲修君か!!君のおかげで弟と妹が助かったよ!!!」

遅れてきた嵐山隊。その隊長である嵐山が修の手を取り感謝を告げる。

修がネイバーを倒したと勘違いしているが、実際に倒したのは遊真である。

あの後「そんなことしなくてもオレが倒すよ」といい残りのネイバーを一層した。そして終わったタイミングで現れたのが嵐山隊なのである。

しかしこれに異を唱えてきたのが

「嵐山さん。甘やかしたらダメですよ。」

その隊員はボーダーの規則を破ったんです。これは本部に上げて処罰を与えないといけません」

そう三雲と同じ歳であり嵐山隊の木虎である。

木虎が言うとおりの規則ではC級隊員は勝手に戦闘は禁じられている。そんなこと許せばベイルアウトを持たないC級隊員は死んでしまう可能性があるのだ。……ついさつき修が死にそうになったように……

そしてそんな木虎に反論したのが遊真。

「後から来といてなんで偉そうなの??」

修がいなかったらヤバかったんだぞ」

「だから何??規則は規則よ。きちんと裁かれるべ……」

「何も出来なくて不満だから修に当たってるのか??」

「なっ!!?そんなわけないでしょう!!!」

「へえ……お前、つまらないウソつくね」
「ツツツ!!」

まるで見透かされたように見てくる遊真に不気味さを覚える。

そんなことをしていると校舎の中で倒されたネイバーは確認しに向かっていた時枝が戻ってきた。

「嵐山さん。ほぼネイバーの活動停止を確認しました」

「ほぼ……それってどういうことだ??」

「いや……一体だけうんともすんとも言わないですよ。」

動きは完全に止まっているですけど破壊しようとしてもこっちの攻撃が全く効かないんです」

「なっ!!!」

「そんなことって!!!??」

信じられないが時枝がそんなつまらないウソをつくわけもない。実際に遊真も時枝がウソを言っていないことは分かっていた。いや、それ以前に遊真もその事実を知っていた。

なにせ、遊真自身がそれを確かめたのだから。

「オサム。さっきのこと報告しなくていいのか??」

「ああ。そうだな。でも信じてくれるか……」

「まあ、あんなの見せられたら流石に信じるんじゃないか」

「ちよつと何を話しているの??」

隠し事があるなら素直にいいなさい」

修と遊真の会話で何かを隠していると踏んだ木虎が二人に迫る。しかし遊真はともかく修はどうやら言うか言わないか決めかねている感じであった。

しかし、報告はしないといけないと決心したのか

「じ、実は……と、その前に見えるようにしないといけなくのか」

「何を言っているのよ……??」

「木虎。手を出してもらっていいか??」

「はあ??」

変なことをいう修に戸惑う木虎。

しかし修の目は真剣であり、からかっている訳ではないと分かった

たのでこうして平然としている姿にホツとしているが、それとは別に信じられない光景にかなり驚いている。

「な、な、何なの貴方は……?!」

「やっと会えました。ずっと入隊希望を送って良かったです。

始めまして。時崎一といいます」

時崎一とサイドエフエクト

「で、連れてきちゃったのか……」

「す、すみません……」

「ううん。しょうがないよ。」

特にハジメ君は修君じゃないとどこにいるか分からなくなるんでしょう」

「長く一緒にいないと相手に触れても気づいてくれないので」

「そういうことならね。二人ともよろしくね」

「よろしくおねがいます」

「よろしくシオリちゃん」

あれから嵐山隊が後処理をしてくれるということとで帰されることになった。実際は本部に修とハジメは出向しないといけないのだが、まずは嵐山さんがということに今日は玉狛支部に行くことになった。

困った時に玉狛支部にくるようにと迅から話を聞いていた修。

一応迅に連絡を取ると「やっぱりそうだったか……」とボヤキながらも玉狛支部に来る許可はもらった。

明日は朝早くから本部に出向しないといけないので本部から近い玉狛支部で一泊したらどうかと迅に進められて修達はここにくることになったのだ。

「そういえば3人とも親御さんに連絡入れた??」

「オレは大丈夫!」

「僕は連絡しました…」

「両親は海外ですのぞ」

「じゃ一人暮らしなの??大人だね」

「そうなんですか??」

「じゃオレも大人だな!」

「……空閑……」

なんか呑気にしているけど色々と大変だったということをおぼえていないか??と言いたい修だがそこはグツと堪えた。

「それじゃ小南に買い出しを増やしてもらわないと!!」

「買い出し??」

「そう。ウチわね当番制で料理してるの。で、今日は小南 桐絵って子が当番なの」

そういつて携帯を取り出して小南に電話をかける。

「あつ。小南。食材なんだけあと二人分追加ね」

『はあー!!!もう買って支部に着くんだけどッ!!!』

「ごめくん!!どうしても二人分いるのよー!!!+!!!」

『……………もう!!!買ってくれればいいんでしょう!!!』

文句をいいながら電話を切る小南。

!!!!!!

それでもやってくれる小南に感謝しながら宇佐見は
「それじゃボスに挨拶にいきましょうか」

……………

「初めまして。俺がこの玉狛支部の林道だ」

「み、三雲修です……………」

「空閑遊真といます」

「時崎一です」

玉狛支部の支部長である林道。

そこで3人の面通しを行うことに。

「しかし……………優吾さんが亡くなっていたとは…」

「親父からこつちで世話になれって言われていたからな。だから来た」

そしてますま遊真のことについて話になった。

さつき両親に連絡はで大丈夫と言っていたがそういう意味だった知った修の表情は少し暗くなる。

「そうか。ならウチは歓迎するぞ。まあ早速やらかしてくれようだがな」

「ふむ。それはすまん。でもやらないとやられるからな」

「そうだな。そこについては任せろ。悪いようにはしないよ」

「じゃお願いしようかな」

随分と簡単に方針が決まったようだが問題は

「さて……君が”時崎一”かあ……」

「知っていたんですか?？」

「上層部でちよつとね……あんな入隊志願書初めて見たよ」
「どうも」

「時崎はボーダーに入りたかったのか?？」

まさかのボーダー志望に驚く修。

しかしよく考えればあの不思議な力はきつとボーダーに入る理由
なんだろうと思いついた。

しかしハジメからの言葉にビックリすることになる。

「ボーダー隊員は変わり者が多いから僕を見つけてくれるかなーと、
あと友達が欲しかったので」

「……………えっ?？」

まさかのボーダーの理由が友達がほしかったって……

それも変わり者が多いって、そんなこと言わないほうが……

と、冷汗をかく修をよそに林道支部長は突然笑いだし

「なっはははは!!!まさかそんな理由であんな大量の手紙を出したの
かツツ!!!」

「僕を見てくれる人は僕と長くいること、僕のことをよく知る人、僕に
触れた人のいずれか2つが揃わないと見られないようなのでなかなか
か見つけてくれる人がいないんです」

つまり修はずっとクラスメートとしていたのでハジメが修に触れ
ただけで見えた。木虎も手紙でハジメを知ったので触れて見れた。

で、見れている人の近くにいれば周りもハジメを認識出来る。

「なんていうサイドエフェクトなんだ……つたく……」

「”サイドエフェクト”?？」

「サイドエフェクトそう副作用。詳しいことは後で迅に聞いてくれ。それでそのサイ
ドエフェクトはこれまで知っているものとはちよつと違うみたいで
な……」

するとそのタイミングで支部長室の扉が開いてそこから迅が

「遅れてすみません林道さん」

「いいタイミングできた迅。この子が時崎一だ」

「その子が………ツツツツ!!!??」

ハジメを見るやいなや衝撃を受けたような表情をする迅。
一体どうしたのかと驚く一同に、迅は冷汗を書きながら

「あ、あはは………コイツは、スゴいや……」

「どうなったんだ、迅??」

「大丈夫。悪い方向にはいかない。」

むしろいい方向に流れるけど……その手段というか行動が恐ろしい……」

「どういうことだ??」

するとまたハジメを見る迅。

なにか言いたそうだがそれをグツと堪えて

「それは、ここで言わないほうがいい。言ったらもつと酷くなる」

「おいおい……悪い方向にはいかないんだらう??」

「いかないけどそこまでのルートがね……詳しいことは後で」

どうやらハジメの前では話せないようだ。

それを知るともつとヒドイことになる。

なんとなくだが修にはそれに覚えがあった。

木虎にハジメを見てもらうためとはいえ、あんなにも驚いたあとに
まさか殴るなんて真似をするなんて……

その行動に木虎も凹んでいたようだ。

こんど正式に謝りにいこうとは思っていた。

そしてその行動が、ハジメの存在がこれからこれ以上のことが起き
る。……それを聞いてなんとなく納得してしまう修だった。

「で、そのサイドエフェクトというのが時崎は特殊なんですよね??」

とにかくいまは話を元に戻そうと話しかける修に林道も迅も乗り

「そうだ。サイドエフェクトはあくまでも人間が持っている能力の延
長線での超人的な能力みたいなものなんだ」

「俺が持っているサイドエフェクトは、未来視」。相手を見てその人
の未来を見る。って感じてね」

「だけど時崎のサイドエフェクトは自分の姿を見せないようにするど
ころじゃなくトリオンにも影響を及ぼしているみたいでな。それはま

「だ見たことのないサイドエフェクトの種類と言っている」

新種のサイドエフェクト。

それに驚く修と遊真だがハジメ本人は無表情である。

「いわば”超能力”ということだろうね。まさに”能力者”だね」

「そんなSFみたいな……」

「だけどメガネ君も覚えはあるはずだよ。」

初めてボーダーの隊員をみてまるで能力者みたいだって」

それは確かにそうだった。

ネイバーを倒すあの姿は、普段では絶対に見られない光景。

それをみて普通の感覚でいられるわけがない。

「とにかくハジメには本部でサイドエフェクトを調べてもらおう。つ

いでにボーダーにも入ってみるかいい??」

「それが目的だったので、よろしくお願いします」

「なんだかあっさりと決まったようだがなんか不安になった修は迅に

「だ、大丈夫なんですか……」

「不安かいメガネ君??」

「連れてきておいてなんですが……ボーダー希望がアレだったんで……」

「まあ、そこはね……それでもボーダーには欠かせない人物になるのは間違いないよ。僕のサイドエフェクトでも見つけられなかったハジメを見つけてくれて助かったよ」

「迅さんでも見つけられなかったんですか!!?」

「それだけハジメのサイドエフェクトは強いってことだ。」

遊真もそこは分かっていただろう??」

「問いかける迅に遊真は腕組みをしたまま考え込んだあと、ハジメの方へ向かい

「なあハジメ。ちよつといいか??」

「なんですか??」

「なんでもいいから”嘘”を言ってくれ」

「僕は宇宙人です」

またバレバレな嘘を……と思っていた修だが、どうもそれを聞いた遊真の表情が怪しい。

「……あと何個かいいか?」

「遊真??」

「アメリカ生まれで、ギャングに育てられて、一国のお姫様と婚約します」

よくもそんなに嘘がつけるなーと思っていると「マジか…」と冷汗をかいている遊真を見て驚く修。

「ど、どうしたんだ遊真!」

「……………オレのサイドエフェクトが全く効かない……………」

「なっ!!?」

「こんな堂々とした嘘なのに”嘘”だって見抜けないって……………本当にハジメは面白い奴だな……………ツ!!」

「それはどうも」

感謝の言葉をいうがほとんど表情を変えないハジメ。

しかし遊真のサイドエフェクトでも見抜けないほどに強いハジメのサイドエフェクト。

「まだ俺のサイドエフェクトでもハジメの姿は映ってない。あるのはその周りの人や景色だけだしな。……………んとうに、なんてサイドエフェクトだよ……………」

……………

「じゃアンタがああ時のストーカーだっていうのツツツ……………?」

「ストーカーじゃないです」

!!!!??

話も終わりリビングにいくと小南の特製カレーが出来ており皆で食事しながら自己紹介をしていたら判明したのだ。

「僕に触れた人ならあと僕を知ってもらおうか、ずっと一緒にないと僕が見えないので」

「だからって学校の登下校とか家までくる必要性はないでしょうが!!!!」

「?? 僕、この支部から本部までしかついて行ってませんが」

「言い訳なんて見苦しいわよ!!!」

「いえ。本当に」

「……………えっ?」

それを見ていた修や宇佐見、迅、林道は遊真を見るが首を横に振るう。そう遊真のサイドエフェクトじゃ嘘は見抜けない。でもこれが本当に本当なら……

「じ、じゃ……まだストーカーがいるのツツ!!!!」

「ですかね。頑張ってください」

パニックになっている小南の横でノンキにカレーを食べるハジメを見て皆はこう思った。

(確かに間違いなく、ボーダーに何かをやらかすな……)

三輪隊

「つまり、今から会うのは三雲君の彼女なんですね」

「全く違う。ちゃんと話聞いていたか……」

「聞いてました」

「嘘かどうか分からないけど、これは嘘だね」

「それは僕にも分かるよ空閑……」

翌日、本部に行く。という話だったのに急に延期に。

止められたのは迅さんだったので何かあると考える修だったが、それでも空いた時間に紹介したい相手がいた為に遊真とハジメにはその人に会ってもらうことにしたのだ。

「でもなんでその彼女を僕達に?」

「だから……はあ、いや、その子雨取千佳っていうんだけど、どうも昔からネイバーに狙われやすいんだ……」

「うむ。それって……」

『間違いなくトリオン量が関係するだろう』

遊真の背後に浮いているのがレプリカ。遊真のお目付け役である。そんな遊真とレプリカにならもしかしたらどうして千佳がネイバーに狙われやすいのかというのが分かると判断したのだ。

「あつ。修君」

「千佳」

人気の無い廃棄された電車のホーム。

小さく頃からネイバーに狙われていた千佳はこうして人気の無い場所を選んでいた。そして今日もこうして待ちあわせで周りの人に迷惑をかけないようにと……

「その2人が……」

「ああ。こつちが空閑遊真。近界民^{ネイバー}だけど話した通りにイイヤつなんだ」

「どうもどうもイイヤツな空閑遊真です」

フレンドリーに話しかけてくる遊真に初めはキョトンとしていたがすぐに危ない人ではないと判断した千佳は遊真から差し出された

手をにこやかな表情で手を握った。

「もう一人が時崎一。一人にすると色々危ないからって言われてるから一緒に付いてきてもらったんだ」

「何も危なくないですよ」

「じゃ今日、何するつもりだった??」

「もっと自分を知ってもらうために適当な隊員と一緒に行動を……」

「それをやめろって言われたらどう!!!」

「な、なんだか、個性的な人だね……!!」

ハッキリと変わっていると一言もなかった千佳。

無表情なのにトンチンカンなことをいうハジメに会って数分で危険な人ではないけど、あまり関わらないほうがいいと直感した千佳だった。

……

「こ、これが千佳のトリオン……」

「なるほど。これは狙われるはずだ」

レプリカのススメで千佳にどれだけのトリオン量があるか可視化することにした。まずは修のトリオン量を見たあとに千佳のトリオンを見ることにしてレプリカから表示されるトリオン量を確認したのだが

「じゃ次は僕も調べてください」

「いや、ハジメはしなくてもいいだろう」

「差別、よくないです」

「……レプリカ」

『構わない。私もハジメの特殊なトリオンには興味があった』

千佳との接続を外し今度はハジメに接続を繋げる。

そしてハジメのトリオン量を調べようとするが

『……なるほど。私でもトリオン量を調べられない……』

「ツ!!?レプリカでもダメなのか……」

『まず接続時点で受け付けられない。ハジメのトリオンが妨害しているとしたか考えられない』

「ふむ。……なあハジメ。そのトリオンって自分じゃコントロール出来ないのか?」

「さあ?やったことないので」

『では自らのトリオンを私と接続するイメージをしてみてください。もしかしたらそれでいけるかもしれない』

言われた通りにするために目を瞑り、自分の中にあるトリオンがレプリカの接続と繋がるイメージを……

するとまるで歯車が噛み合ったかのように接続が繋がりハジメのトリオン量が形となって現れた。

「おおお」

「千佳より少し小さいけど、それでも大きい……」

「これだけデカイのにネイバーに狙われないとなると……」

『間違いなくハジメのトリオンだろう。通常ではあらゆるものを止めたりする性質を持っている。そしてそれはハジメの存在自体も……。しかしハジメがトリオンをコントロール出来るようになればそれも改善するかもしれない』

ここでまさかのハジメの症状が改善されるかもしれないという希望が見えた。これにはハジメも無表情なその顔も驚いたように見えた。

「……まさか、こんなに簡単に……」

「いや、ハジメの場合はまず人と関われなかったんだ。簡単じゃなかった。」

一人じゃ出来なかったことでも、こうして人と繋がりが出来たから見えてきたんだ。」

「オサムの言うとおりだな」

「良かったねハジメ君」

そんな優しい言葉をかけてくれる3人にハジメは無表情ではあるが、それでも目から涙を流しだした。

「えっ!?だ、大丈夫ハジメ君ッ!!!」

「何がですか?」

「き、気づいてないのか?いま涙流してるぞ……」

「おお。これが涙か。初めてなので驚いている」

「本当に変わってるなハジメは」

千佳からハンカチを借りて涙を拭う。

なんとも爽やかな雰囲気の中、それをぶち壊す者達が現れた。

「動くな。ボーダーだ」

「「「ツツ!!」「」」

「間違いない。現場を押さえた。

ボーダーの管理下にならないトリガーだ。

そしてネイバーとの接触を確認した」

二人組がこちらに迫ってくる。

「処理を開始する」

そう言つて二人はトリガーを手に取り

「トリガー、起動^{オン}」

.....

三輪隊

三輪秀次 / 米屋陽介 / 奈良坂透 / 古寺章平 のメンバーに

オペレーターの見蓮の5人の隊。

そしてその三輪と米屋が修達の目の前に、奈良坂と古寺が離れた所から狙撃態勢を取っている。

「さて、ネイバーは誰かな」

「一つ前まで使っていたのはその女で、いまはその男だな」

「マジか。男ならともかく女の子はやりにくいな」

「油断するな。どんな姿形をしていてもネイバーは人類の敵だ」

すでに敵だと認識して近づいてくる二人に

「ちがうちがう。ネイバーは俺だよ」

(遊真??)

言わなくていいことをサラツと言い出した遊真に戸惑う修。

「貴様がネイバーだと」

「そうそう」

「間違いないだろうな」

「間違いないよ」

その瞬間に遊真に向けて銃弾を打ち込んだ三輪。

突然のことで誰も反応出来なかった。

「な、何してるんですかッッ!!!」

「ネイバーは敵だ。ネイバーは全て殺す。それがボーダーの務めだ」

「おいおい。俺がうっかり一般人だったらどうするつもりなんだ??」

そんなこといいながらシールドでしつかりと防御していた遊真。

それをみてホッとしている修だったが

「はい」

いきなり手を上げたハジメ。

その時点でとても嫌な予感がする修は

「まて!!ハジメ!!!余計なことをい…」

「僕もネイバーだっ……」バン!!!バン!!!バン!!!

容赦なく引き金を引いた三輪。

確かにハジメの言葉に”ネイバー”と言っていたが

「……なるほど。”ネイバー”が許せないみたいですけど…」

銃弾は全てハジメに当たっているが一切のダメージがない。身体に当たった時点で全て銃弾が止まっている。

「人の話を聞かないダメダメな人ですね」

「なんだと……ッッ!!!」

もう一度銃口を向ける三輪だが

「言っておきますけど僕、本当に一般人ですよ」

「いやいや。そんなの見せられて納得するわけ……」

「本当です!!!これについては本部にも報告が上がっているはずですよ!!!」

『………三輪君。言っていることは本当よ。確認が取れたわ』

「ッッ!!!??」

「どうやら確認取れたみたいですね。」

つまり貴方はボーダーという権力を悪用して一般人を殺そうとしたんですね

「ち、違うッッ!!!」

「違わないですよ。僕はまだ言いかけだったんです。」

それを”ネイバー”という単語だけで撃つちゃう人なんて……
ダメダメですよ」

ぐうの音も言えない三輪。

何事もなかったから良かったもの下手したら本当にヤバかったのだ。間違いなく三輪がやりすぎた。それは誰の目にも明らかだった。

「……………ワリイけどここで引いていいか??」

「米屋!!」

「これ以上はダメだ。ネイバーならともかく一般人に手を出した。もうこれは違法もんだぞ、下手したらA級から落とされる」

「だがそこにネイバーがツツ!!!」

「そのネイバーに執着するから!!こんな自体になったんだろうが。ネイバーを許せとは言わないけどよ、話を聞くだけでもすればこんな自体にはならなかっただろうが」

「ツツ!!!」

仲間の声を聞いてやつと銃口を反らした。

それを見てホツとする修。こんな状況でも無表情なハジメ。

「悪かったな。通報するならしてくれや」

「いいえ。引いてくれるなら何も見てなかった、何も起きなかったという事でいいですよ」

「マジか!!そいつは助かる!!」

「本部の人達にもそう伝えてください。」

このダメダメな人が少しでも変わるなら処罰は軽くしてくれるように。そのためなら僕は本部へ出向きますので」

「……………そこまで考えての行動か??」

「出来たらいいですね。そんな頭はありませんよ」

無表情なハジメにジツと見る米屋。

しかし嘘をつくような感じではないと判断したのだろう。

米屋はトリガーの換装を解いた。続けて三輪も渋々と。

「じゃ俺達は帰るけど報告はさせてもらうぜ。俺達以外にもそのネイバーを狙うからな」

「なら、迎え撃つだけだね」

遊真の言葉にニヤリとして帰りだした米屋。

しかし三輪まだその場にとどまり、そしてハジメを見て

「……………悪かった……………」

頭を下げるわけではなかったが確かに誤り米屋を追いかけて去っていった。これで驚異が去ったかと思われたが

「なんであんな無茶をしたんだ時崎ツツ!!!」

「あれ??」

「怒られないと思っていたのか…!!」

「いやいや、流石に無理だろう……………」

「アハハ……………」

そのあと修にみっちり怒られたハジメだった。

入隊条件

「空閑……空閑 有吾、か……!!?」

三輪隊との戦闘??後、本部から呼び出しをくらった迅と修。そしてハジメは上層部の人達の前でこれまでの経緯を話していた。

そして遊真のこれからの扱いをどうするか?なにより三輪の攻撃を凌いだあの力、”ブラックトリガー”の扱いをどうするかについて話があった。

城戸司令はブラックトリガーの回収。

しかしそれは遊真にとって父親の形見だと知っている修はどうかしてブラックトリガーの回収を止めようとしていた。

そしてもしかしたら交渉の余地があるかもしれないと話題になり遊真の目的はなんだと聞かれた所で、遊真の父親からボーダーに知り合いがいるから頼れと言われたという話が上がリ、そして遊真の父親の名前はなんだということ。で遊真の名字が出てきた所で一気に話の流れが変わったのだ。

そして城戸、忍田、林道から”空閑 有吾”との関係を聞いたところ。

「しかし、そういうことなら有吾さんの子なら争う理由がない」

「いや、空閑の子と確認できたわけではない。

名を騙っている可能性もある」

「それはあとで調べればわかることだ。

迅、三雲くん、つなぎをよろしく頼むぞ」

こうして遊真の話は終わった。

だがある意味ここからが本題ではあった。

「それでは次に時崎一。君の話をしよう」

現在は近くに修がいることで周りの人にも見えている。

その有無は遊真の話が出る前に確認したのでその話題を置いておいて忍田から

「君はボーダーに入りたいというが、どうしてだ??」

「ボーダーは変わり者と人が多い所だから僕を見つけてくれて、友達

になつてくれそうだという理由です」

「……………」

一応、ハジメの性質というかこれまでの事はすでに城戸達に連絡は届いている。届いているからこそ何を言っているんだという疑問しか浮かばなかった。

「き、君はそのトリオンをどうにかしたい。ということでボーダーに入りたいのではないのか??」

「いえ。これも僕の一部なので。」

確かに友達や知り合い、誰一人僕を見てくれませんが、それでもこのトリオンは色々役立つので」

「そ、そうか……………」

無表情で淡々と話すハジメに戸惑う忍田。

これだけの経験をしてトリオンが自分の一部とハッキリと言えるその精神が正直凄いと感じた。

するとここで鬼怒田が

「ならワシの所でそのトリオンを調べさせる!!」

そしたらそのトリオンをコントロール出来るぞ!!」

「おお。それはよろしくお願いします」

「なら時崎一は本部で……」

「いえ。玉狛支部に所属したいんですけど」

そこで全員がハジメを見る。

ここは明らかに本部に入る流れ。それをハッキリと断ったのだ。

「どうしてそうなる!!?調べてほしいなら本部に入れ!!!」

「いやです。いまは玉狛支部に知り合いが多いので」

「ふぎけるな!!そんな理由で断れるとでも!!」

「じゃボーダーはいいです。こっちはオッサムと友達になれたのであると学校でゆっくり友達増やしまするので」

(オッサムって、僕のことか……………)

いきなりあだ名を言われて戸惑うが、いまそれを問いたただすのは止めておいた。そして「それじゃ」と頭を下げて部屋から出ようとするハジメを城戸が

「待て。……いいだろう。玉狛支部の入隊を認める」
「いいんですか??」

「その代わりに一週間に一度本部に顔を出すように」

「一度では足りん!!週2、いや、週3じゃ!!」

「じゃ週2で」「3と言っておろうが!!」

「2です」

一切引かないハジメに「絶対に来い!!いいな!!」と鬼怒田が引いたことにより決定した。

「そして時崎一の戦闘データは逐一本部に送ること」

「城戸さん……それが目当てだったんですね……」

「なんのことだ」

城戸としては本部だろうが玉狛支部だろうがどちらでも良かった。欲しいのは特殊なトリオンでの戦闘データ。

どちらにしろハジメを手懐けるには現在玉狛支部がいいのは明白。そしてハジメの目的は友達づくり。

その友達づくりの過程で本部に異動する可能性がある限り、いま無理やりに本部に入れる必要性はなかったのだ。

「では、解散とする。進展があれば報告するように」

……………

「なんとかいったな」

「……これも、見えていたんですか??」

「正直、ハジメに関しては今全くだよ」

玉狛支部への帰り道。修は気になっていたことを正直に迅に聞いてみた。あの会議は迅のサイドエフェクトで見えていたのか。そしてたら予想通りの答えがかえってきた。

「やっぱり時崎の……」

「ハジメです」

「………時崎の……」

「ハジメです」

「……ハジメのサイドエフェクトの影響ですか??」

さっきのあだ名といい、いきなり一気に距離を縮めてきたハジメに

戸惑うがいまは聞きたいことがあったのでスルーすることにした。

「他の人よりも見えづらいんだ。大きな分岐点は見えるんだけどね」

「大きな、分岐点って……」

「それはまだ気にしなくていいよ。」

「それより今はこの事を遊真に話してあげよう」

「そうですね」

……

「なるほど。それはそれはどうもありがとう」

「まあ、気にするな」

「それで空閑は、これからどうするんだ??」

問題は解決したがそれでもボーダー本部が空閑に目をつけたのは間違いない。それにこのまま黙ったままだと修も思っていなかった。それは遊真も分かっているだろう。

「うーん、親父の世界も見れたしな……」

だから遊真はこの世界から出ていこうとしているんじゃないかと予想はしていた。そしてそれが現実に……

「UMAは友達です」

「……ハジメ??」

突然何かを言い出したハジメ。

そして何故か遊真の発音がおかしかった気がした……

「友達が遠くに行くのは寂しいです」

「そうか……寂しいか……」

「オツサムとUMA、チカリンと……」

「待て待て待て!!」

流石にもう止めないとダメだと思った修。

さつきからスゴい勢いであだ名が出来上がっている……

「さつきからなんだそのあだ名は……」

「友達、知り合いになった人に付けるんですよねあだ名」

「いや、そうかもしれないけど、いきなりすぎ……」

「友達が出来たらずっとやりたかったんです」

その言葉を聞くと……止めろとは言えない。
ハジメの境遇を知っているからこそ言えない。
だから次の言葉はいうのは仕方ないのだ。

「……本当に、良かったな……」

「はい」

(言えないよな……)

(言えないな……)

これは仕方ない。誰もが思った。

「ということでも3人でまだ遊べてません。

それに本部に行くときに3人がいないと誰も見てくれません。

なので遊真はここにいてるべきです」

「……そうか。いるべきか……」

その言葉になんだか穏やかな表情をしたように見えた。

「なら、ハジメや修と同じようにボーダーに入るか」

「空閑！」

「良かったです」

迅のサイドエフェクトでは別の道が見えていた。

それはレプリカが修に何かを話して、それがきっかけで遊真がボーダーに入る所を。

なのにボーダーに入るきっかけが変わった。

それがこれから先の未来を大きく変えることはないが、何故かそれが良い結果になりそうだと予感した。

(……本当に、ハジメがボーダーに入って良かったよ……)

チームとトリオン体

「チーム??」

「ああ。僕と空閑、そして千佳。そこに時崎を入れたチームを作りたいんだ」

「どうやら千佳もボーダーに入るようだ。」

「お兄さんと友達がネイバーに攫われた、そしてまだ生きている可能性がある」と遊真達から教えてもらい、自分の手で何かしたいという強い意志でボーダー入隊を決めたようだ。

そしてハジメの前にいる修と遊真と千佳。

そこにハジメを含めた玉狛第2というチームを作るといふ。

「ですけど僕、マトモにトリガーが使えるかどうか分かりませんよ」

そんなハジメの意見にレプリカと修が

『そうだな。ハジメのトリオンは特殊すぎる。』

「下手したらトリオン体になれるかどうかとも怪しい」

「確かにそうだな……よし、試しに出来るかやってみよう」

……………

「ほほう。ハジメ君がトリガーを使ったらどうなるか試したいとな
！」

「迅さんが見た未来ではボーダーに入っていたのよね。」

「なら使えるんじゃないの??」

「それでも確かめたほうがいいだろうな」

時崎のトリオンは未知数。どこでどんな作用があるか、把握しておいたほうがいい」

玉狛支部にいた宇佐見、小南、迅に相談したところ、なら早速訓練室でやってみようとなった。

「正式にボーダーに入っていないのに使っているんですか??」

「あくまでも訓練用トリガーだからね。ここから出て使おうとしても使えないんだよ」

「なら安心ですね。それでまずはトリオン体になれるんですか??」

「大丈夫だとは思いますが、まあ、やってみよう」

渡されたトリガーを手に取り

「トリガー起動^{オン}」

するとハジメの全身がトリオン体へと代わり、玉狛支部のマークがついた服へと換装した。

「良かった〜！とりあえずトリオン体にはなれたね!!」

「コレがトリオン体……」

「なんか違和感はあるか??」

身体のあちこちを触るハジメ。

特に違和感はないが確認したいこともあった。

小南に向かって手招きするハジメ。それに対してちよつと不機嫌
そうな小南は

「なによ。先輩に対して手招きって……」

「殴ってください」

「はい!!?」

「ですなら殴ってください」

聞き間違えではない。

ハッキリと殴ってくださいというハジメに流石に動揺する小南。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ!!いくら失礼な態度だったかもしれないけど体罰までする気はないわよ!!!」

(いや……よくやつてるような……)!!

すぐに騙される小南はいつも手を出している。なんていまは言わないほうがいいと心にしまおう宇佐見だった。

「トリオン体って痛覚はないんですよね??」

「それを試したかったの??一応切られた殴られたという感覚での痛覚はあるけど」

「それを試してみたいんです」

「それならそうといたいなさいよ……」

ホツとした小南は軽く頭にチョップをかました。

痛みは、ない。どうやら痛みを感じる器官が止まっているのだらう。

「痛くないですね」

「あれ??でも痛覚はオンにしてるけど……」

『早速ハジメのトリオンが異常を出してきたな』

「なるほど。ならトリオンでの攻撃はどうなるんだろうな……」

すると持たされていたトリガーを起動する遊真。

そして装備されていたスコープピオンでハジメに攻撃を仕掛ける。

「空閑ッ!!」

修の声が届く前に遊真の刃はハジメの首に当たっていた。

しかしそれだけ。当たってその先が止まったのだ。

首をはねようとしたその運動エネルギーさえも全て止められたのだ。

「おいおい。マジか……」

「な、なによ、これ……」

驚いて声が出ている迅と小南。修達は声すら上げられないほどに驚いている。

そして間近にいた遊真は一気にハジメから離れてたあと、試しに自分の手首を切り落とした。キチンと刃は届いているから遊真のトリガーに問題はない。

「本当にハジメは面白いな」

「じ、迅さん……これって……」

「ああ……こりやトンデモナイことになりそうだ……」

……

「なんですかそれ……」

「マトモじゃないとは思っていたが……」

「これはまだココだけにしておこうと思っただけな。」

林道支部長には連絡してある。あとは……」

そういいながらオペレーター室で訓練室で行っている訓練を見ていた。そこでは遊真や千佳や修の訓練よりも前にハジメのトリオンがどんな作用があるかを確かめることにしたのだ。

いまはバックワームを使っているが

「葉ちゃん。ハジメの居場所、バックワーム使わなくても分からないんだけど……」

『そうみたいだね。まさかバックワーム無しでリーダーから消えるなんて……』

「つて、言ってるそばからハジメ君がいなくなってるよツツ!!!」

「ハジメツツ!!!どこにおるんだあ!!!」

「もしかして、姿も消えてる………」

『これって……カメレオンツ?!』

「なんでセット無しで使えるのよツツ!!!」

と、まるで鬼ごっこをやってる状況になっている。

トリオン体になつても修達から離れれば存在感が消えてハジメを見つけれない。

リーダーにも映らないから本当にどこにいるか分からない。

修、遊真、千佳が周りを見渡すが何処にもいない。

「これは……ハジメには隠密行動させたらピカイチですね……」

「うん……背後に回られてもコレ気づかないよ………」

鳥丸がボヤキ、宇佐見が肯定する。

木崎は頭を抱えており迅は苦笑いをしている。

そして小南はというと

「いい加減にしないよハジメ!!!ここら一帯ぶち壊すわよ!!!」

修達と一緒にハジメを探しているが全く見つからない!

完全に遊ばれているこの状況で小南のストレスはすでに限界値を超えており

「……………いい、一度胸ね……ツツ!!!」

メテオラツツ!!!」

炸裂弾で周りの建物ごと破壊して回る小南。

修達はそれに巻き込まれないように走り回るしか出来なかった。

「……………おい、止めなくていいのか宇佐見??」

「止められると思いますか??」

「まあ、無理でしょうね」

「落ち着くまで待つか、ハジメが出てくるまで待つかだな……」

その後、小南のトリオンが尽き周りの建物がほとんど破壊された夕イミングでやっとハジメが出てきて

「何度か当たりましたけど、ダメージないですね」

「当たったなら出てきなさいよツツ!!!」

「何度か小南先輩やオッサム達の後ろも通りましたよ」

「近くにいたのかツツ!!」

「どうやらトリオン体だと存在感のオンオフがしやすいですね。なのでいまはオンにしますけど」

すると突然に、いや、まるで霧が晴れて見えなくなるようにフワツとハジメが姿を消した。

「な、何よソレツツ!!!」

「と、いう感じでこのトリオンの扱い方が分かってきました」

小南が驚いているタイミングでまた姿を表すハジメ。

自由に姿を消すことが出来ればバックワームよりも強力な隠密行動が可能となる。

「ただ弧月は使えませんね。なんかずっと持つてるものはトリオンが作用されているみたいで」

取り出した弧月を抜き近くの壁を切ろうとしたが斬れることなく棒で叩いたかのように反応になった。

「これじゃただの棒切れですね」

「じゃスコープオンも使えないな」

「練習すればもしかしたら使えるかもしれませんが、まあ叩き潰すというのも面白いのでいいかもですね」

「…………いや、刃があったほうがいいと思うが…………」

修のツツコミは聞いていないのかすぐに換装を解いたあとに、もう一つのトリガーを起動させた。

「逆に狙撃は出来ます。僕から離れたものなら関係ないみたいなので」

「ならガンナーかスナイパーになるのか…………」

「いえ。ここはアタッカーでいきましょう」

「斬れないのにアタッカーになる気かあ!!!」

「面白くなる方がいいと思います」

これには修も頭が痛くなったようで諦めムードになってる。

千佳は笑っているが目が疲れており、遊真はなるほどなるほどとちよつと楽しみだなーと感じている。そして小南は

「なんでそうなるのよ!!! 隠密行動が出来るならスナイパー1択でしょう!!!」

「いやいや。背後からズバズバ。あつ、斬れないからドカドカと殴つて倒す。うん、面白いじゃないですか」

「面白さで決めるなツ!!!」

いつも騙されている小南もハジメの前では完全なツツコミ役。

しかし、ここまでコケにされてきた小南も堪忍袋の尾が切れたよう

で
「……………本当に…本当にいい度胸ねツツ!!!」

一回私が徹底的に締めてあげるわツツ!!!」

「こ、小南先輩ツツ!!!」

「何よ!!! このまま馬鹿にされたままで!!!」

「……………あ、あの……………すみません……………ハジメ…もう、いません……………」

修の方を一瞬見たタイミングで姿を消したハジメ。

もうこれは完全に遊ばれている。と感じた修達はゆっくりとそこから離れることにした。間違いなく小南はブチギレるぞ!!!

「ハ、ハ、ハジメエエエエエエエツツツツツ!!!」

……………

「小南先輩は短気でいけませんね」

「やり過ぎだ」

先に戻ったハジメにチョップを入れる木崎。もちろんダメージはない。

「でも鳥丸先輩がよくやってましたのでいいのかと」

「いやいや。俺でもあそこまで酷くないぞ」

「やっぱり自覚はあったんだね鳥丸君……………」

「それはそうですよ」

それはそれで問題じゃ…と言いたかったがこの二人に何言ってもムダだと感じた宇佐見は黙ることにしたようだ。

迅と嵐山隊

「はあー!!?」

私達がこの子らの師匠になれって言うの!!?」

その後戻ってきた小南に散々叩かれたハジメ(ダメージ無し)。やっと落ち着いたところでこれからの方針を話していたのだが、個人レッスンをするというと小南が噛み付いてきたのだ。

「いやよ!!私が教えるの苦手なの知ってるでしよう!!!」

「でも速く強くなるにはこれが一番なんだよ小南」

「くうううううー!!!もうっ!!!」

なら!!私はコイツをもらおうよ!!」

「おお。お目が高い」

迅の言い分に言い返せない小南。

確かに最も速く強くなるには誰かに教えてもらうのが一番。

だからこそイヤイヤと言いたいが無理だと分かった小南は最低限この4人の中で強い遊真を選んだ。

「なら千佳ちゃんはレイジさんだね。」

スナイパーの経験があるのはレイジさんだけだから」

「よ、よろしくお願いします」

「よろしくな」

宇佐見が言ったとおりに千佳には木崎が。

そして余った修とハジメは

「……………となると、俺は必然的に…………」

「……………よろしくお願いします」

「お願いします」

二人を鳥丸が見るようになる。

しかしそこで迅がハジメの首根っこを引つ張って

「いや。ハジメは俺が持つていく」??

「えっ!!?迅さんが弟子を取るのツツ!!!」

「いやいや。弟子つてほどじゃないけどな。」

ハジメには俺の側にいたほうがいい未来に向かう確率が高くなる

からな。だからついでに色々教えるよ。

流石にスナイパーとかガンナーは誰かに任せろけどな」

「本気でハジメを”オールラウンダー”にするんですか?!”

「ハジメのトリオンは色んなスタイルに適応出来る。」

なら一つに深く追求よりも、浅くても広く知識を増やしたほうがいいと思っつてな」

なんていいながらハジメの頭に上に手をポンつと乗せる迅。

特に嫌がる様子もなくハジメはいつも通り無表情のまま

「よろしくお願ひします」

と、返事をする。そう特にハジメも不満はなかった。

むしろ自分の力が一体どんな風に使えるのかワクワクしているぐらいである。

.....

「それで、どこに向かっているんですか?!”

「ちよつとな。援軍をしてくれそうな奴らに話をしようと思っつてな」

何処に行くか教えて貰えずに本部に来た迅とハジメ。

実際には周りからしたら迅だけが本部に来ている状況である。

「援軍ですか.....つまりそこに僕かU・M・Aが関わっているんですね。」

「まあな。正直にいうと両方だな。狙われているのは遊真で、参加するのがお前な」

「.....それって、話していいんですか?!”

「普通はダメだろうな。だけどお前、俺が見えている未来、そのどの未来でも全部参加してるんだよな。偶然だったり付いてきたりとかで.....」

つまりは迅自体が余計な心労をかけたくないから連れてきた。という理由がデカいみたいである。

「でも僕、ボーダーにも入ってませんよ」

「だからな.....それでも付いてきてるんだよお前は!!!」

.....なあ、なら今ここで付いてこないって約束してくれるか?!”
「うーん.....きつと付いていききたい理由があるからやっていること

だと思うので嫌ですね」

「だろうな……だから、今は理由は聞くな。

どのみちこれから協力してもらおう奴らに話すからな」

……

「どうもー!!実力派エリートの迅ですー」

「ようこそ、迅」

迅とハジメが来たのは嵐山隊の作戦室だった。

そこにいたのは嵐山、木虎、時枝、佐鳥、綾辻のフルメンバーだった。そして近くに迅がいることで

「あ、あなた!あの時のツ!!」

「どうも。時崎一です」

この前はマトモに話が出来なかったがここでこうしてまた会えるとは思わなかったハジメ。嵐山は「この前はどうも」と。木虎は少し頬を赤くして睨んでいる。やっぱりこの前の接近を気にしているようだ。時枝は「ああ、あの時の」と軽く、綾辻は「この子がアレを……と手紙のことを思い出している。そして……」

「ああー!!!お前だな!!僕の名前を間違えたのは!!」

「………あつ。小鳥先輩」

「佐鳥だあああああッツ!!!」

「そうなんですネ。すみません」

まるで忘れていた。かのような振る舞いからの名前違い。

それで怒っている佐鳥を時枝が抑えて宥めている。それに対してハジメは無表情で頭を下げて謝っているが謝罪している。という感じには見えなかったようで

「すみませんじゃないだろう!!なんで僕だけ一通しかないんだよおお!!!」

「………出しました?」

「時崎いいいいいいいいッツ!!!」

「ちよっ、ちよつと落ち着いて下さい!!」

流石にヤバいと思えば木虎も佐鳥を抑えに向かう。

そんな様子をみてもなお表情が変わらないハジメは

「あつ。綾辻先輩ですよね。初めまして」

「は、初めまして……」

「小南先輩から聞いてます。すみません、皆さんには怖い思いをさせてしまいました」

「それはいいんだけど……」

こつちで謝るより謝る人がいるんじゃないかと視線を佐鳥のほうに誘導する綾辻。ハジメも釣られて佐鳥のほうに視線をやるが

「今度お詫びになるか分かりませんが有名所のどら焼きを持ってきますので」

「ああ!!あそのどら焼き美味しいのよねー」

「いいですよ。僕は粒あんの食感と甘さが好きなんです」

「分かるわ!それであの生地が優しく包んでいてお互いがお互いを高めあっている。って感じで本当に美味しいのよね」

「綾辻先輩は分かる方ですね」

「時崎君もなかなかね」

と、意気投合したのかガシツと握手し合う二人。

完全ののけ者にされた迅と嵐山は

「と、とにかく、事情を聞こうか……」

「あ、ああ……」

……………

「なるほどな。事情は分かった」

嵐山隊に要請したのは遊真のブラックトリガーを狙うボーダー達からの阻止を目的とした援軍だった。

遊真はボーダーに入る決意をしたが書類上まだボーダー入隊ではないらしい。

つまりはいまボーダーに入られる前に遊真のブラックトリガーを奪取するのがボーダー本部の目的と言える。

「つまり、その空閑遊真って子のブラックトリガーが玉狛支部にあると力のバランスが崩れるから奪取を狙っているというわけか……」

「そう。それも遠征部隊が帰ってきたその日に」

「それも、見えてるんですか?」

「ああ。3日後だ」

つまり3日後にボーダー本部から帰ってきた遠征部隊をそのまま玉狛支部に向けて遊真からブラックトリガーを奪取する。

それを阻止するために嵐山隊に援軍を頼みにきたという話。

「……………悪いが迅。俺の一存でボーダー本部と真つ向から敵対は出来ない」

そして嵐山もまた本部の人間。

もちろんそんな強硬手段に出る人達を止めたいという気持ちはあるが、それで嵐山隊を巻き込むわけにはいかないと判断したのだ。

「ああ。それは分かってるよ。」

当日までに忍田さんに話を通しておく。命令が下ったら頼む」

「なら、仕方ないな」

そうキチンとした建前があれば動ける。

無謀に突撃するだけでは不利な状況しかならないということとは分かっている。

だからこうして嵐山隊には前もって情報を与えて少しでも勝つ確率をあげようとしてここに来たのだ。

「それで迅。そんなことを言うためだけに来たわけじゃないんだろ
う」

「流石だな。一番はもちろんハジメに関してだ」

……………

「長々と悪かった嵐山」

「いや。貴重な経験をさせてもらったよ」

「それじゃキーちゃん」

「まさか……………それ、私じゃないでしょうね??」

長い間嵐山隊の作戦室で色々やったあと、時間的に遅くなり帰ろうとした時の話。

「そうですよ」

「ふざけないで!!!」

怒り心頭で言ってくる木虎に無表情のハジメはズイツと近づいてきて

「でも、殴りましたよね?」

と、あの時のことを持ち出してきた。

修やハジメ達の学校にネイバーが出てきた時のこと。

いくら不可抗力とはいえ、トリオン体で一般人を殴ったのだ。

それはボーダーにおいて禁則事項である。

もちろん木虎も分かっている。自分がやらかしたことに。

だから修にも強くは言えなかった。違反したでしょう!とは…

だってボーダートップであるはずの木虎がやったのだ。

「ぐつ!?そ、それは……」

だから思わず一步後退した。

それを持ち出されたら正義感の強い木虎は何も言えなくなる。

しかし木虎のプライド的に”キーちゃん”なんてマヌケなアダ名はありえないのだ。しかしハジメはそこを攻めてくる。

「殴り、ましたよね?」

このままだと押し切られる。

しかしやったのは自分であり、ハジメにはそれだけの……

「……だ、……ダメなものはダメよツツ!!!」

と、自分のプライドというか羞恥心が自分の中の正義感より勝ってしまった。

それをいつも通り無表情でジツと見ているハジメは一言。

「ならオツサムの件はとやかく言わないでくださいね。木虎さん?」

「……………わ、分かったわよ!!!」

完全にやられた。

最初からそのためだけにワザとあだ名を付けて、殴ったという罪悪感と罪だと分かっている正義感に、あだ名という羞恥心をぶつけて、ハジメや修達が言わなければ広まることのない事件より、様々な場所でハジメから呼ばれるあだ名に対する羞恥心を切り捨てる道を選ばせるように仕組んだのだ。

(……………へえ。あの木虎がいい負けたなんて…………)

そして時枝のなかでハジメの評価が上がっていた。

うまく木虎を誘導して絶対には選ばない道を提示させて、三雲修の件

をうまく消化させるなんて……

「い、言っておくけど！あんなことした時崎にも原因があるってことは理解しておきなさいよ!!!」

「それはもちろん。木虎さんには申し訳なかったと……」

「その”さん”付けは止めてツツ!!!!
!!!!!!
!!!!!!
!!!!!!
!!!!!!
!!!!!!」

V S 遠征部隊

「おまえも当然知ってるだろうが、遠征部隊に選ばれるのはブラックトリガーに対抗できると判断された部隊だけだ。他の連中相手ならともかく、俺たちの部隊を相手におまえ一人で勝てるつもりか？」

迅の予知通り3日後に遠征部隊は帰還しその足で玉狛支部に向けて部隊が向かっていた。そして迅もそれを阻止するために今回指揮をしている太刀川の前に立っているが、複数の人間対迅一人では分が悪すぎる。

そしてそれは迅もよく分かっている。分かっているからこそか、余裕な表情で

「おれはそこまで自惚れてないよ。遠征部隊の強さはよく知ってる。それに加えてA級の三輪隊、俺がブラックトリガーを使ったとしてもいいところ五分だろ」

そう、全く諦めていない。むしろ…

「おれ一人だったら」

と、言い放つと同時に朽ちた民家の屋根に複数の影が舞い降りてきた。

「嵐山隊。現着した」

あの日援軍をお願いしていた嵐山隊が到着したのだ。

忍田本部長の指令で玉狛支部に加勢すると。

「いいタイミングだ嵐山」

「忍田さんからの要請もあったが、やっぱり三雲君には借りがあるからね」

「私はどっちでもいいですけど、後々アイツにどうこう言われるのは面白くないので」

「へえ。気にはしてたんだね」

「深い意味はないですよ!!!」

何のやり取りなのかは知らないがここに来るまでに玉狛支部に援軍として参加する理由となった何かがあったことだけは分かった。

それを見て気に食わない三輪は

「どうして邪魔をする嵐山隊!!! 相手はネイバーだぞ!!!」
「全てのネイバーが敵。とは限らないじゃないのか」
「ネイバーがどれだけのことをしたか忘れたか…ツツ!!!」
「ネイバー全てが敵ならこの恩恵も敵からのものになるとい話になるが」

睨み合う両者。

三輪はネイバー全ては敵。嵐山は敵対しないのならば様子を見ようというすでに意見が食い違っている。

「邪魔をするなら排除する!!!」

「こつちにも都合があるんだ。邪魔させてもらうよ」

「止めるなら今だよ太刀川さん。このままだと俺達が勝つ。

俺のサイドエフェクトがそう言っている」

「…………その未来、打ち崩したくなった!!!」

「まあ、そういうと思っていただけ…………!!!」

……

「残念、移動したのはワイヤーを張りたかったからよ。暗くて全然見えなかったでしょ?」

戦いが始まって木虎は米屋と一対一の戦いをしていた。

場所は廃墟となったビルの一室。

そこで木虎は槍を使う米屋から有利をとりために狭い一室にはいりこんだが、それは対策されており柄を短くすることで動き回れるようにしていたのだ。

だが、さらに木虎はその先を読んでワイヤーを張り僅かな隙をついて米屋のトリオン供給機関を破壊した。

「トリオン供給機関は破壊したわ、終わりね」

「と、思うじゃん?」

すると米屋は木虎ごと部屋から外へと飛び出した。

トリオン供給機関が破損してもすぐにベイルアウトするわけではない。僅かな時間を使って木虎を外へ押し出した。

「弾バカ、出番だぞ」

米屋がと言うと、そのビルの屋上で出水は待ち構えていた。

「誰が弾バカだ、ハチの巢にするぞ。アステロイド」と言いながらアステロイドを放っていく。

木虎はシールドを展開しようとするが「避けきれない」と考えていたが、時枝が駆けつけシールドを展開していく。

が、その隙に当真が時枝にヘッドショットを決めようと放った。

その時、

「ここから落ちててもダメージとかないんですか??」
「時崎君ツツ!!」

突然現れた!ハジメに驚く木虎。

もちろん時枝も米屋も出水も、そして時枝のヘッドショットを撃つた当真も驚いている。

なぜなら時枝に撃つた玉がその少年に当たったのだが全くダメージが通っていないのだ。

そんなものを見せられたのにも関わらず冷静な当真はもう一発、今度は木虎に向けて狙撃した。が、飛んでくる玉を見極めた時枝が木虎の腕を引つ張り躲させた。

そのまま地面に着地をした木虎と時枝。

一緒に落ちてきたハジメは近くの木々に落ち、そのままぐるぐると身体を回転させながら木虎達の所へ。

「何をやっているのよ貴方はツツ!!!」

「応援です」

「そんなことしてる場合なのツツ!!!」

「まあまあ、おちついて木虎。助がったよ時崎」

「いえいえ」

そこへ嵐山も合流。

向こうはいま米屋がバイルアウトとして残ったのは出水と離れた所で狙撃しようとする狙う当真。そしてここに合流してきた

「……お前は……!!!」

「この間はごつも」

つい最近一悶着あった三輪とハジメが再び出会った。

「おいおい。なんだアイツ……確かに当たったよな……」

間違いないと当真の放った玉は当たっていた。

なのにそれでも平然としているハジメに寒気がしてきた当真。

そんな中で無線から米屋の声

「さっきの少年には狙撃は無意味ですよ。至近距離で三輪が撃ちました
がピンピンしてましたんで」

「あれが例のネイバーか??」

「一般人、と言いたいですけど……こつちもハッキリとは分からない
んですよ……」

「そうか……当たってもダメージがないなら狙う理由はねえな……」

……

「三輪。なんだ、そいつと知り合いか??」

「……例のネイバーと一緒にいたやつです」

「ネイバーが二人いたとは聞いてねえぞ」

「僕は一般人なので」

と、いいながら両手を上げるハジメ。

確かに見た限りでは何の武器もない。それどころか……

「……おいおい。まさか、お前生身なのか!?!?」

「そうですよ。正式入隊してませんから」

だからさらに驚いている。

ボーダーのトリガーは一般人に当たっても強い痛みと衝撃によつ
て気絶するまでに抑えてあるために、当たっても死ぬことはない。

なので出水は驚いているのだ。

当たったのはハジメの胸。そうなれば全身に衝撃と痛みが伴って
気絶するはずなのだ。なのに全く痛みを感じていない。

いや、それよりも……

「お前……さっき何階から落ちたと思っっているんだ!?!?」

「「ツツ!!?!?」」

「数えてませんけど……10階以上ですよ」

そう。一番の驚きは生身なのに10階以上の場所から転落したの

にも関わらずに、まるでトリオン体のように平然としていられるところなのだ。

いくら下に木があつてクッション代わりになつたとは言つても全くダメージがないなどありえない。

「本当に不思議な身体してるよね」

「……だからって無茶しすぎよ」

「無事だつたんだからいいじゃないか」

戦いの最中だというのにのんびりとした空気が流れる。

それにイラツときた三輪は銃に手を伸ばすが

「また、撃つんですか??」

「ツツ!!!」

「いくら死なないからって撃つて撃つて撃つて」

もしかしたら撃ちまくつていたらシヨック死するかもしれないのにそれでも撃つんですか??」

無表情で近づくハジメ。

それに本能的に三輪の足が一步後退した。

「まだ感情で動いてるんですね。悪いとは言いませんよ。」

それが原動力となり力になるならそれは立派な自分の武器ですから。

……だけど、その武器を理不尽に使うとするならそれは兇器。

復讐をするために貴方は殺人マシンにでもなるつもりなんですか??」

その言葉が決め手となつたのだろう。

銃に手をかけようとしていたのがピタツと止まつた。

そしてその瞬間に三輪の胸に穴が……

『トリオン供給機関破損。ベイルアウト』

同時に出水にも玉が飛んできたが間一髪急所はそれ腕一本ですんだ。

離れた場所からの佐鳥のツインスナイプ。

それが見事に二人にダメージを与えたのだ。

そして出水の無線から届いてきたのは

『……出水。引き上げだ』

「おいおい。いいのか?? ネイバーを倒すじゃねえのかよ」

『……引き上げてくれ』

「そうか。なら仕方ねえな」

三輪の意思を汲んだのか出水と当真も離脱。

そして同じタイミングで離れた場所で2つのトリオン体が本部へと帰還していた。

『どうやら、そっちも終わったみたいだな』

その連絡は迅。どうやら太刀川と風間との勝負が終わったようだ。

「おい迅。時崎が来るって分かっていただろう??」

『五分五分でこっち来る可能性もあったけど、良い未来のほうに行ってくれたようだ』

どうもこれ以上は話す気はないと悟った嵐山はこれ以上は聞かないことにした。いまはこうして無事に遠征部隊を撤退させることができた事を喜ぶことにした。

本部と風刃とハジメ

遠征部隊と迅、嵐山隊の攻防戦を見ていたボーダー上層部の会議室では

「一体どうなつとるんだ!!」

迅の妨害、トップチームの潰走。だが問題は何よりも、忍田本部長!!なぜ嵐山隊が玉狛側についた!?なぜネイバーを守ろうとする!?ボーダーを裏切るつもりか!?!」

と声を荒げている鬼怒田に忍田は

「裏切る??!論議を差し置いて強奪を強行したのはどちらだ?」

低い声が会議室に響く。

「もう一度はつきりと言っておくが、私はブラックトリガーの強奪には反対だ。ましてや、相手は有吾さんの子。これ以上、刺客を差し向けるつもりなら……次は嵐山隊ではなく、この私が相手になるぞ。城戸派一党」

と静かに怒りをあらわにしていく忍田。

城戸司令の言うとおりボーダー内のバランスが悪くなるというのは分かる。だがそれでも強奪してまでやることではない。

そうハッキリという忍田に鬼怒田や根津はどうするかと頭を悩ませた。忍田は現役から離れていても”ノーマルトリガー”に置いて最強。そしてあの太刀川の師匠でもある忍田を敵に回すのは……

「ならばこっちは天羽も出す」

「ツッ!!」

その城戸の言葉に全員が衝撃を受けた。

迅と同じS級でありながらコントロールの難しい天羽。

それを知っているからこそ根付が

「い、いや、しかしですねえ、彼を表に出すとボーダーのイメージが

……

………なんと言いますか、天羽くんの戦う姿は、少々人間離れしておりますからねえ。万が一市民に目撃されると非常にまずい」

と、遠回しにそれはダメだといっているが城戸は

「A級トップを一人で倒す迅の”風刃”に忍田くんが加わるとなればこちらも手段は選んでおれまい」

「城戸さん、街を破壊するつもりか?」

と、どっちも引かない状況の中、会議室に現れたのは

「どうもみなさんお揃いで。会議中にすみませんね」

「何の要件だ、迅」

この議題の中心にいる迅本人だった。

「宣戦布告でもしに来たか」

「ちがうよ城戸さん、交渉しに来たんだ」

「交渉だ?!裏切っておきながら」

「いや、本部の精鋭を撃破して本部長派とも手を組んだ。戦力で優位に立った今が交渉のタイミングでしょう」

と、城戸、迅、鬼怒田、根津がそれぞれ言葉を言ったところで迅が本題に入った。

「こちらの要求はふたつ。

まずうちの後輩空閑遊真のボーダー入隊を認めて頂きたい。

太刀川さんが言うには、本部が認めないと入隊したことにならないらしいんだよね」

「なるほど。」模擬戦を除くボーダー隊員同士の戦闘を固く禁ずるか……」

「ボーダーの規則を盾にとってネイバーを庇うつもりかね!」

「私がそんな要求を飲むと思うか?」

唐沢、根津、城戸の順で思ったことを言っている中で迅は

「もちろん、タダでは言わないよ。

かわりにこっちは”風刃”を出す」

.....

結果を言えば遊真のボーダーへの正式入隊は認められた。

そして代わりに迅が風刃をボーダーへ差し出した。

それだけ遊真のこれからの活躍があるという判断と、ブラックトリガーである風刃の適応者の多さから城戸司令がOKを出した。

「そしてあと一つあるんだけど……」

「まだ要求するつもりかね!？」

「こっちは要求というよりお願いって感じかな?？」

「……………言うだけ言ってみろ」

不機嫌そうなのか、元々なのか、険しい表情で見えてくる城戸に苦笑
いする迅。

「時崎一にボーダー本部の精鋭達からの指導をお願いしたい」

「は、はぁーッ!!!」

「自分が何を言っているのか分かっているのかッッ!!!」

当然の反応にまあまあと落ち着いてと言ってくる迅。

「もちろん本人達の了承が前提。ただそこでこっちからとやかく言っ
てほしくないってところかな?？」

「……………なにが、目的だ?？」

「ハジメの思考は柔軟というか、突拍子もないというか、色んな経験を
させたほうがこれからの未来にいい影響がある」

しかしそれでは他のボーダー隊員に示しがつかない。

もちろん個人が強くなることはいいいことであり、それがボーダー全
体の強さとなる。だが、たった一人に固執して強くさせようとする行
為は他のボーダー隊員から特にC級隊員から反感を食らう可能性が
高い。

それは迅も分かっているだろう。そこを押し通してまでハジメを
強くするのは…………

「……………攻めてくるのか、迅?？」

「二ッッ!!!」

「大規模侵攻。来るよ城戸さん。だからその為の切り札が必要なん
だ」

……………

「はあああああああッッッ!!!」

玉狛支部に響き渡る声はこれまでの中で一番の大声を出す小南
だった。近くにいた宇佐見は両耳を塞ぐほどに五月蠅かったみたい
だ。

「なんで迅が風刃を差し出さないといけないのよッッ!!!」

「だから遊真の入隊とハジメの指導を有利にするためだよ」

「良かったのか迅さん??」

「いいんだよ。気にするな」

頭をポンポンとさされる遊真。

平気そうな表情をするがそのブラックトリガーは迅の師匠の形見。同じように大切な人がブラックトリガーになっていく遊真にとつてはどんな心境か、分かっているからこそこれ以上何も言わなかった。「それでだ。遊真と千佳ちゃん、そしてハジメは入隊までにある程度強くなつてもらう必要があるんだが……ハジメに関しては明日から別メニューだ」

「それって迅が言っていた色んなパターンの経験をさせる。みたいなやつですか??」

「ちよつと待ちなさいよ!!!」

小南が何か言いたそうだが

「じゃ、明日本部へ行かないと行けないのでそこで誰が見つけてきます」

「いや、見つけるって……どうする気だ??」

「僕を知ってもらうために大量の履歴書を……」

「やめろッ!!!軽いテロみたいになるからやめろッ!!!」

「ちよつ、ちよつと!!!私の話を……」

誰も気づかない。という感じで話を進める。

「じゃ、どうするんですか??」

「……なら、木虎とかに頼んだらどうだ??」

「うわあ。結局他人任せですよそれ」

「だ、だって僕にも訓練があるんだよ」

「わ、私も、ムリ……」

「オレも無理だな」

「俺も用事があるからな」

「……ねえ、聞いている??」

あつ。弱つてきた。

「そういえばちよつと遊真と修との連携を試しておきたいだった」

「なら、千佳ちゃんも参加させてみようか」

「それがいいな。千佳は俺が見て鳥丸が修と遊真だな」

「…………ちよつ、ちよつと…………」

半べそかきそうになつてゐるのでもうやめたほうがいいな。

「じゃ、小南先輩。よかつたら明日付いてきて下さい」

「…………へえ??私??」

「他に誰もいないので頼りになる小南先輩にお願いしたいのですが」

すると一気に表情が変わり嬉しくてニヤニヤしたい気持ちを必死に抑えながら先輩としての威厳を保とうと

「し、しようがないわね!そこまでいうなら付いてあげてもいいわよ」

「では、お願いします」

ということとで余計なことを言わせないように皆で回避することが出来て良かった……小南はきつと特別メニューというのが気に入らなかつたんだろう。

一番はこの前思うようにもて遊ばれたのが気に入らなかつたというのが強いだろうが忘れてくれて助かつた。

しかしまだハジメの小南イジリは続く。

「あつ。でも訓練のトリガーを貸してただけなら換装して状態がいけば周りから見てももらえますよね」

「ああ!!確かに…………」

「林道支部長に貸し出せるか聞いてみます」

「えつ。ちよつと…………」

そしてここで鳥丸がもちろん乗ってくる。残りのメンバーもその提案に乗っており、小南だけが乗り遅れる。

「それならハジメ君の意思でON—OFF出来るね」

「いいですね。オッサムを驚かすのにも使えます」

「頼むから使わないでくれ…………」

「他にも色々出来そうだな」

「わ、悪いことに使ったらダメだよ……」

「しませんよ。なんなら使った時の記録を残せばいいじゃないですか??」

「念のためにしたほうがいいかもね。」

あとで言いがかり言われても証拠になるしね」

「……………」

今度はわざとではなく完全に取り残された小南。

このままだと自分はハジメに付いていく必要性が……

「でも小南先輩、明日はお願いしますね」

「わ、分かっているわよ!!!」

(ちよつと行けないかもって、凹んでいたよな……)

加古隊①

「な、なんだこれはツツ!!!?」

「……うわぁ……」

驚いている鬼怒田とドン引きしている小南。

いまは本部でハジメのトリオンを調べようと来ていた。

検査機器をハジメに繋げて調べようとしたのだが、発動と同時に検査室にある機器全てがストップ、停止してしまった。

「ああ……やっぱりダメでしたか」

「こうなると分かっておったのか!？」

「もしかして、程度ですけど。」

初めて触る機械とか、いつも止まるんですよね」

「それを早く言わんか!!!」

いやいや。ハジメが来た途端に「調べるぞ!!」と強制的に引っ張ったのは鬼怒田なのに……

「あれ??でもトリガー使用したときはなんとも無かったわよね??」

「それはオツサムや小南先輩が持っている”トリガー”なら安全だ。というのが作用していると思います」

「……よくわからないトリオンね……」

要はハジメが安心出来るものなら問題ないということなの??」

「恐らくは」

「ともかくだ!!これでは調べようがないぞ……」

せつかく来たというのに何もなしでは来た意味がない。

それならとハジメは

「僕が使っているトリガーにどんな作用があるか確認しますか??」

「……そうだな。資料だけでは分からんこともある。」

よし、今すぐに訓練室に入れ!!」

息を吹き返したように元気が戻った鬼怒田。

そして小南も「つたく……」とため息をついていた。

……

「よしー今日はここまででいいぞ!!」

「やっと終わったー!!!」

それから4時間ぶつ続けでハジメのトリオンがトリガーにどんな作用を及ぼすか確認を行った。疲れているのはハジメの方なのに背伸びしているのは何故か小南だった。

「明後日も同じ時間だからな！」

「ええー!!」

「お前には行つとらん!!大体もう一人で来れるだろうが!!!」

小南の反応は確かにおかしい。

これだと次回もついてくる気満々だろうが、すでにトリオン体なら周りの人に確認出来ると分かったので武装しなければいいだろうと鬼怒田からお墨付きをもらった。

「分かりました」

「では帰っていいぞ」

ということと部屋から出た二人だったがどうも小南が不機嫌な様子であり

「どうかしましたか??」

「なんでもないわよ」

「でも、なんかむくれてませんか??」

「気のせいよ!!!」

やっぱり不機嫌である。

なんでなのかわからないが、わからないからこれ以上は言わないほうがいいだろうとハジメも黙ってしまった。

(……………なによ……………)

小南もなんで不機嫌になっているのかよく分かっていなかった。ただなんとなくムカついたのだ。

そんな感じで会話もなく、なんとなく総合訓練室へ向かっている途中、自動販売機に一人の女性が飲み物を買っており、その女性がこちらを見ると

「あら、こんなところにいるなんて珍しいじゃない」

「加古さんッ!!」

どうやら知り合いらしいくちよつと不機嫌だった小南がスイッチ

を入れ替えたかのように明るさを取り戻して加古に近づいていく。

「加古さんも珍しいんじゃない。あんまりこっちに来なかつたわよね」

「そうね。たまには有望な”K”を探そうかと思つてね」

「まだやつていたんだ……」

「私的には桐絵ちゃんが欲しいところなんだけどね」

「だから私は玉狛支部から離れる気はないって」

「ふふふ。そうね。でも欲しいのよね……うん??」

そんな会話をしている小南と一緒にいたハジメがそこにいなかった。どこに行つたのかと周りを見渡すが見当たらず

「ねえ桐絵ちゃん。さつきまで一緒にいた男の子は……」

「えっ??あれ、ハジメのやつどこに……」

「ここですけど」

「きゃあああああッッ!!!」

背後から話しかけられた小南は思わず飛び上がり加古にしがみつく。いつの間にかハジメは小南の背後に回つていたので。

「脅かすんじゃないわよ!!!」

「いや、さつきから声かけていたんですけど……」

どうやら小南先輩が僕を意識しないと見えなくなるみたいですね……」

「いや、だとしても背後に回る普通……」

「ったく、とさつきまで話せていなかった二人はいつの間にか元に戻つていた。そしてハジメを見た加古は

「新人さん??」

「え、ええ……まだ正式に入隊してないけど、今度玉狛支部に入る」

「時崎 一です」

「そう。私は加古 望よ。小南と同じA級隊員よ」

……

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

加古からジューズをご馳走になる二人。

入隊もしていないハジメがどうして小南と一緒に本部に来ているのか気になりそこを話すことになった。

すでにA級チームの隊長にはハジメの存在とトリオンについて話が回っている。誰もその話をすぐに信じられずにいたが

「私は信じていたわよ。そんな面白いトリオンがあるなんていいじゃない」

「加古さんはそういうの好きですよね……」

「それに目の前で突然消えるのを見せられたら疑いようがないじゃない」

信じてはいたが納得いかない。という感じな加古に目の前で霧が晴れたかのように消える所を見せたハジメ。それで一気にハジメに興味を持ったようだ。

「それで戦闘のほうはどうなの??」

「それが私もよく分からなくて……」

「まだ訓練していないの??」

「じゃなくて、迅が隠れて訓練してるから……まだ私もよく分からないくて……」

今のところ基本的なことだけを教えてもらっているハジメ。

それでもどう動く、どうトリガーを扱う。程度だとハジメは思っているのだが

「なら、私とやりましょあか??」

「ええ!?か、加古さんツ!!!」

「迅くんにはナイショよ!!さあ、付いてきて」

いきなりのことで小南がどうしようかとパニックっているのに対してハジメは分かりました。と加古の後をついて行きだした。

そして着いたのは加古隊の作戦室。

作戦室にはその隊専用の訓練室があるのでそこでやろうという話なんだろうが、その作戦室に入るやいなやそこにいた女の子に加古がこう話しかける。

「双葉。これから訓練室を使うから用意してもらって」

「は、はい!!」

突然のことで何が起きているか分からない黒江双葉。

しかし隊長からの命令に素直に聞く双葉が入ってきた小南と見たことのない少年が一体何の用なのか聞くことも出来ずに部屋の奥にいるだろうオペレーターに話に向かった。

「そういえばトリガーは何が使えるの?」

「入れているのは弧月とスコープオンですね」

「そう。なら私はハウンドしか使わないわ」

「あ、あの加古さん……」

「大丈夫よ桐絵ちゃん。どれだけやれるか試すだけだから」

そういつて微笑む加古はハジメを連れて訓練室に入る。

しかし小南が心配しているのはそういうことではなかった。

(ち、ちよつと……これ、大丈夫なの……)

むしろ心配なのは加古のほうだったりするのだが、もう何も言えなくなった小南はとにかく訓練室の内部を見るために作戦室へ向かうことにした。

……

「これはテストみたいなものだけど、そうね……私に一撃入れたら貴方の勝ちね」

「僕の敗北条件は?」

「そんなものないわよ。ボーダーに入っていない坊やとA級の私。考えなくても分かるでしょう?」

その言葉に何故か小南がムスツとしてしまっている。

代わりにハジメは「なるほどですね」と煽り言葉に反応せずに準備運動を始めた。

(……冷静な判断はあるみたいね……)

少しでも突っかかるかと思っていたが意外に冷静なハジメに感心した。全く相手にされていらないと言われれば、なんだ!と反応する人が多い。

もしかしたら内心そう思っているかもしれないが、

「二分間。私は攻撃しないわ。来なさい」

「ここですさらに煽ってみる。」

男としてプライドが、少しでも揺さぶられたなら……

「分かりました。お願いします」

と、弧月を出した程度で終わったハジメに対して加古は

(うーん……やる気のないタイプ、だったみたいね……)

少しは好戦的になるかと思っただが変わらないハジメに少しガツカリする加古。しかし次の瞬間に

「行きますね」

と、ハジメが言った後にまるで霧が晴れたようにハジメの姿が消えたのだ。

「えっ??」

カメレオンならまだ分かるが、その消え方がそのカメレオンとは異なる。不意をつかれた加古はすぐさま後退をし距離を空けたのだが

「はい。籠手、です」

反応が遅れたせいですでにハジメは加古に接近しており、そして弧月で加古の手首に弧月を当てていた。

しかし、弧月を振っているのにも関わらずにカメレオンが解かれな。そして弧月が当たっているのに手首が斬られていない。

「僕の勝ち。でいいんでしょっか??」

次の言葉が出たあとにハジメは姿を現した。

振られた弧月はまだ手首に当たっているがやはり斬れていない。

「これが、時崎君のトリオン……」

「弧月が”斬れない”という作用が出るんですが、当たれば、一撃ならいいんですよ?」

「……そうね。でもあと一本いいかしら??」

「分かりました」

「次は、全力でいかせてもらおうわ」

「えっ??」

加古は面白いことは好きだが負けず嫌いである。

その後ハウンドで滅多打ちされたハジメ。

隠れても周囲を壊され、当たったと確信された場所に徹底的に撃た

れる。ダメージは無い、身体の損害も、トリオン漏れもないが、まるで的のように撃たれていく中でハジメは「……怒らせないようにしよう……」と割と本気で考えてしまう出来事だった。

.....

「悪かったわね。ちよつとやり過ぎたわ」

「……………いえ。すみませんでした……………」

(あのハジメが、素直に謝ったツ!!?)

初手からあんなものを出したハジメも悪いとは思っていた小南だが、その後の加古無双は流石にハジメが可哀想だとは思っていた。結局小南と黒江が止めに入るまで続いたのだから…………

「でも面白いわね。途中からハウンドを弧月で撃ち落とし出したわよね」

「もうヤケクソみたいなものでしたが……………」

「それ。武器になるわよ。また来なさい。その技術は高めたほうがいいわ」

「……………ストレス発散の的代わり。ではないんですよね」

「そう考えてくれていいわよ」

ふふふ。と笑う加古に、絶対に的だ。と悟ったハジメ。

しかしハウンドを撃ち落とす技術は欲しいとは思ったので頑張ってみようと考えて加古との連絡先を交換した。

「双葉。貴方も交換しておきなさい」

「私ですか??」

「もしかしたら時崎君を通していい刺激になるかもでしょう」

「……………そうですね」

渋々だったが双葉とも連絡先を交換し加古隊の作戦室を後にしたハジメと小南。

「どうだったの。加古さんとやってみて??」

「……………女の人は怒らせないようにします……………」

「それがいいわ。だから私もしないように」

「…………………………」

「なんで返事しないのよツツ!!!!??」

木虎 藍①

「……げっ」

「そこまでハッキリと言われるとむしろ清々しいくらいですね」

小南と本部に行き加古と出会ってから二日目。

鬼怒田に言われたとおり本部に訪れまた色々実験されたハジメ。相変わらず計測機器に接続したら止めるという現象は続くので直接ハジメのトリオンの性質を知ろうという実験である。

そして色々疲れたのだろう。一日費やす予定が午前で終わり食堂があるから食っていけと進められて訪れた食堂で木虎と出会い一発の言葉がコレである。

「なんでここにいるのよ?！」

「検査というなの実験が終わったところで鬼怒田さんから食堂で食べてくと食券の割引券を貰ったので」

「そう。だったら早く食べて帰りなさい」

「どうしてそんなに冷たいんですか木虎さん??」

「それを言われるのが嫌だからよツ!!」

控えめで抑えているがそれでも近くの者になるなんだ!?!と思われるほどの声をあげる木虎。悪気がなかるうともこんなにも”さん”付けされて気持ち悪い相手といたくないという本能的判断らしい。

「では、下の名前で…」

「言ってみなさい。規則だろうがその喉をかつ切るわよ」

「……………やめておきます」

本気の殺意を目の当たりにしたハジメは流石にここで下の名前をいう判断はしなかった。言った瞬間にやられる。これも本能的判断といえる。

「じゃ普通に”木虎”といいますので、僕のごとは”ハジメ”と…………」

「嫌よ」

「そこは別に…………」

「嫌よ」

どうもこの手は全く乗らないらしい。

これ以上いうとこれだけでも制裁が来そうだと判断したハジメは
いうのを止めた。

これ以上は火に油を注ぐかもしれないと割引券を使って”うどん
”を注文しようと販売機のスイッチに手を伸ばそうとすると

「ちよつと待つて」

「はい??なんでしようか??」

スイッチに届くギリギリで止められたハジメ。

さつきよりも険しい表情をする木虎に、なんだろうと考えていたと
ころで

「あなた、割引券で”うどん”を買うつもりなの??」

「そうですけど…」

「なんで一番安いメニューに割引券を使うのよツツ!!!」

……これには本気で何を言っているのか理解出来なかったハジメ
しかし木虎は本気でハジメを糾弾していることから冗談ではない
ということは分かったのだが

「それはいま”うどん”が食べたいからです」

「ありえないでしょう!割引券よ!普通は高いメニューに使って少し
でも安くするために使うでしょう!!」

言いたいことは分かる。分かるが……

「ええーと、でも、これ僕の割引券ですから別に木虎がどうこう言わな
くても……」

「私は効率よくやらないものを見るとイライラするのよ」

……つまりは、割引券というなんでも割引てくれるものがあるな
ら高いものに使い効率よくイイモノを食べなさい。と言いたいらし
い。

「……見なかったことにすればいいのでは??」

「そんな無責任なこと許せるわけがないわ」

「いや、無責任って……」

「いいから高いメニューを選びなさい」

まさか、たったこれだけでこんなにも高圧的に言われるとは思わな
かった。確かにボーダーに入れば変わった人と出会い友達が出来る

とは思っていた。

いたけど、こんなにもちよつとしたことで高圧的になる友達は何も……

「それはそれでアリですね」

「分かったらさっさと選びなさい」

と、二重の意味で納得したハジメだった。

……

「それで、僕はどこに拉致られるですか??」

「人聞きの悪いことはいわないで」

お昼も食べて帰ろうとしたら、別の席で食べ終わっていた木虎が現れて「付いてきなさい」と強制的に連行されたのだ。

「でも何処に行くかだけでも教えてくれないのではないかと」

「この道は前にも歩いたでしょう」

と、言われて何処だったか思い出そうとするハジメ。

すると「あつ」と思い出したタイミングと目の前に見える扉。

そしてその扉が開き現れた人物が

「やあ時崎君」

「嵐山先輩」

そう木虎に連れてこられたのは嵐山隊の作戦室だった。

しかしどうして連れてこられたかと考えながら部屋に入ると

「時崎君。この前はありがとうね」

「時枝先輩??ええーと……何のことですか??」

いきなりお礼を言われて戸惑うハジメ。

それに対して木虎はハアとため息をつき

「だから言ったじゃないですか。絶対に覚えてないって」

「それでもこつちには恩があるんだ。どうあれあのとき時枝がベイルアウトしなかったのは時崎君のおかげだろう」

そう言われて思い出した。

遠征部隊との衝突の際に放たれた弾が時枝に当たらずにハジメに当たりベイルアウトせずに済んだ話である。

「あれはあのとき言葉をもらってましたけど??」

「そうかもしれないが、やっぱりちゃんお礼がしたくてね」

「木虎には時崎君を見つけたら連れてきてもらおうように行っておいたんだ」

「……………なら、そう言ってくれませんか??」

「嫌よ。私は連れてくるだけなの」

そつぽを向く木虎に嵐山は苦笑いをし時枝はハアとため息をつく。

どうも木虎のこの態度は日常的なものだろう。

それでもハジメもこれ以上木虎にどうこういうのは止めた。

いうならマウントを取れるときにしようと思った。

「はぁーい。お茶の用意も出来ましたのでいいところの大福を食べましょう!」

部屋の奥からお盆にお茶を乗せて現れた綾辻。

お茶と一緒に美味しそうな大福も一緒に乗ってある。

……………

「うーん!美味しい!」

パクパク食べ進める綾辻の様子は見てて気持ちいいなーと思いなから大福を食べていると嵐山から

「そういえば一昨日加古さんと模擬戦したらしいな」

「ゴホッ!ゴホッゴホッ!」

突然のカミングアウトに大福を食べていた木虎がむせてしまった。

隣にいた綾辻が背中を擦りながらお茶を差し出してなんとか喉に詰まらせることはなかったが

「ちよ、ちよつと!なによそれは!!?」

「いや、ちよつと実力を見たいからと言われたので」

「で、一本取ったんだよな」

「まあ隠れての一本ですけど」

確かにあのカメレオンのような消え方をされればビックリはするだろう。そして斬れない弧月で攻撃されればなおさら。

「そのあとハウンド?ですか。あれで本当に身体に穴が空くかと思うぐらいに撃たれました」

「私だってそんなことされたらするわよ」

「ですよ。知ってます」

軽いなされたハジメにムカツときた木虎。

しかしそこはあえて何も言わずにスルー。

「それで加古さんには修行つけさせてもらえるのかい??」

「そうですね。僕をおもちやみたいに見ながらまた来るようにとは言われましたね」

「良かったわね。一度その態度を改めるためにもいい機会じゃないかしら」

「ですよ。知ってます」

「さつきから何よそれはツ!!」

と、とうとう我慢が出来ずに切れだした木虎。

「いや。もう面倒くさいと思ひまして」

「は、はあツ!」

「いいんですよ木虎は木虎のまま。変わるの僕でいいんですから」

「貴方ね……ツ」

「お嬢様学校ですからそういうのも必要なんですよ。」

「じゃなかったら隊の皆さんにご迷惑をかけてまでやらないですよ」

「なっ!」

その言葉に言葉を詰まらせる木虎。

本当なのかと嵐山、時枝、綾辻に視線を向けるがそのたびに視線を外させられる。

ということも少なくともそういう場面もあるということ……

「せめて、人のご迷惑にならないようにしたほうが。いいかと」

「……………」

「木虎、さん??」

「分かったわよ! 気をつけるわよツ!!」

納得してもらい周りの表情も若干安堵しているように見えて悔しい気持ちでいっぱいな木虎だった。

お好み焼きと友達

「お腹、減ったな……………」

休日。今日は玉狛支部での訓練が無くなった。

迅が急用。小南達も遊真達を教えているので相手できない。

嵐山隊は広報の仕事。最近あった加古隊も遠征。

まさか一気に会う人が、見つけてくれる人がいなくなりやるのが本格的になくなったなつたハジメ。

こういうときは街に繰り出して小南のように偶然でもいいから触れてほしいものだ。と街に出てきたが…………

「お腹減った……………」

それどころではなくなつた。

今日はいつも使っていたスーパーのおばちゃんがお休み。

そのために誰もハジメを見てくれないために買い物が出来ない。いつも自炊しているために食事処に言っても見えてくれないために注文も出来ない。

こういうときは公園にある水飲み場で水を飲んで飢えを凌ぐしかないな―とその公園を目指していたのだが

「またお好み焼きなの…」

「ああ!?文句あるのか!!」

「でも最近多いよねお好み焼き」

喧嘩しているのになんか仲のいい3人組だな―と思いつつ通り過ぎようとしたところで

「うっせえ!奢ってやるんだ。文句は言わせねえ!」

「今日はポイント多く取ったみたいだもんね―」

「その分。視線が痛かったけどね」

「こっちはチクチクと…………ああーうぜえ!!!」

「大変だよねその”サイドエフェクト”」

聞き覚えのある言葉に反応したハジメ。

その三人組は”かげうら”と描かれたお好み焼き屋に入っていた。

「ほら焼けたぞ」

「自分で焼けるよ…」

「いちいち口答えをー」

「ほらほら。早く食べないと」

やたら好戦的で表情の怖い人と、年下で文句をいいながら食べる人と、身体が大きく仲裁をする人。

バランスの取れてる三人組だなーと思いながら、美味しそうに食べるお好み焼きをジッと見つめるハジメ。

こんなにも間近にあるのに食べれないという拷問のような仕打ちにお腹が鳴り止まない。もちろん見えてない、というか存在に気づいていないので、その音さえも聞こえない。

「でもカゲももう少し我慢というものを覚えないとねー」

「ああ!?!」

「いや。今回は仕方ないとしてもこんなのが続くと”影浦隊”としてもヤバイよ」

「だね。本当にどうにかしてほしい」

「お前らな……ッ!!」

うぜえ”視線”を送ってくるやつがワリイんだよ!!!」

よく分からないが何かをやらかしたようだ。

どうもボーダーには我慢出来ない人が多いようだ。

「でも戦闘には使えるんでしよう??」

「いらねえよこんな”サイドエフェクト”は」

どうやらなんか辛いタイプのサイドエフェクトのようだ。

そんなものあるんだなーと頭の片隅で考えながらいま集中してるのは目の前のお好み焼き。

「……………食べたいな…………」

「あん??なんだ!?!」

「どうしたのカゲ」

「なんか声がしなかったか??」

……………あれ??聞こえた??

「……カゲが疲れて幻聴を……」

「まあストレス抱えてるだろうとは思っていたけど……」

「可哀想な目で見えるんじゃないやねえ!!」

聞こえていたよね……

というか、そういうえば僕トリガー持っていたっけ……

いつものクセで見えない前提でやっていたんだ。

「気の所為か……なんださっきのは……」

目つきの悪い人がお好み焼きを食べようとしたタイミングでハジメが「トリガー起動」といい、それも同じテーブルでトリオン体になつたものだから

「なっ!!!」

「えっ!!!」

「はあッ!!!」

突然現れたハジメに驚き口運ぼうとしたお好み焼きを鉄板の上
に落としてしまった。

「いきなりですみませんが、僕もお好み焼きを食べさせてください」

……

「玉狛支部に入隊予定の時崎 一君かあ。」

本当にビックリしたんだよ〜いきなり現れるんだから」

「すみません。お好み焼きが美味しそうで」

(……なんか、不思議な人だな……)

あつという間に影浦隊のメンバーの中に入り込みお好み焼きを食べるハジメ。もちろん初めはいきなり現れた不審者に敵意を見せていたが、途中から影浦が「……もういい。食べていけ」と言い出したのでこうして同じテーブルでお好み焼きを食べている。

「でも大変だね。見えている人が少ないと食事も出来ないなんて……」

「今回は冷蔵庫に何も入っていなかったタイミングで誰もいませんでしたから。早くトリオン体になればよかったですけど慣れてなくて忘れてました」

「……結構重要なことなのに、忘れるかな普通……」

「普通じゃねえんだろうコイツはよ」

黙ってハジメの食べる好み焼きを焼いていた影浦。

すでに3枚も焼き上がっているが、これも全てハジメが食べるよう
だ。

「おいテメエ。なんで俺のサイドエフェクトに引つかからねえ」

「ツ!!?」

その言葉にゾエもユズルもハジメの方を見た。

口に含んでいるお好み焼きを食べきったハジメは

「僕のトリオンのせいじゃないんですか。」

結構なんでも止めちゃうみたいなんで」

「それが本当ならカゲに向けられる感情は……」

「ああ。全くねえ。元々感情が薄そうなやつだが……」

「失礼ですよ。プンプンです」

「全くこねえな。ってかなんだその怒り方はよ……」

どうやら本当のようだ。

影浦にそういう視線を送らないのは東隊の東ぐらいだったのだが

……

「良かったねえカゲ。ゾエさんはカゲに友達が増えてくれて嬉しいよ
」

「ああ!!? 誰が友達だ!! いま会ったばかりだろうが!!!」

「でも時崎君はなっってくるよね??」

「はい。ボーダーに入った理由が友達作りなので」

「ほら時崎君もそう言ってくれるんだから!!」

「いらねえんだよクソガツツ!!!」

そっぽを向く影浦に「あれ?」と首を傾げるハジメ。

なにが悪かったのかと考えていると

「気にしないでいいよ。アレ、照れ隠しだから」

「なるほど」

「ユズルテメエ!! 変なことを言ってるんじゃないぞ!!!!」

「ゾエさん、本当にカゲに友達が出来て嬉しいよ」

「どうも。改めまして、影浦さんのお友達の時崎一です」
「ふざけんじゃねえぞおおおおお!!!」
その叫び声は近くの作戦室の方にも届いたという。

遊真とハジメ

「ねえハジメ。オレと勝負しない」

「UMAとですか??」

最近はどうも迅が修行の相手をしてくれない。

だから最近はおどろきにいつてウロウロしたり、個人で練習をしたりしていたハジメ。そこへ修、遊真、千佳が現れて遊真からの誘いがあつたのだが、こうして遊真達と訓練するのは初めてである。

「そうですね。やったこともありませし、やりましょうか」

「よし。なら五本勝負だ」

「でも僕、UMAの攻撃当たりませんよ。当たってはいますけどダメージがないですよ」

「確かに。さて、どうするか……」

弧月でもアステロイドでも、なんでも攻撃を止めてしまえばダメージを与えられない。これでは全く勝負にならない。

これをどうしようかと考えていると

「そんなこともあるかと思つていいのを作つておいたよ」

と、宇佐見がハジメを手招きする。

そしてハジメにあるトリガーを渡して起動するように促す。

トリオン体になつたハジメの首元と胴体には黒い輪つかのようなものが付いていた。

「なにこれ??」

「ふふふッ。名付けてダメージ計測器!!」

攻撃が当たらないというわけじゃないならその攻撃がハジメ君に当たった時の威力をダメージという数字に置き換えてしまえばいいかと考えたのだよ」

「おおー」

「そいつはスゴイ」

「宇佐見先輩が作ったんですか??」

「流石にそれは無理だよ。」

考えたのは私だけど作ったのは本部。迅に掛け合つてもらつたん

だ」

これがゲームみたいにダメージ表示されたら面白いのではないか!!というアイデアから生まれたもの。なんて口が裂けても言えない宇佐見だった。

「ダメージがトリオン体喪失、もしくはトリオン切れになるようなダメージを負ったら警報音が鳴るから。これで他の人達とある程度対等に戦えるよ」

「ある程度??」

「そう。結局はダメージというか身体への損害がないからね。例えば弧月で片腕を切られたとか、アステロイドで身体に穴が空いて動きが鈍くなるとか…そういった身体への損害のダメージについては流石にね」

「つまりは普通は身体に損害あるダメージもなくそのまま戦えるというわけか。なるほど、まだまだハジメには有利だな」

「それでもダメージが表示されるならどの程度当たればダメなのかも分かるんですね」

「そこがミソなんだよ諸君！」

もしもいつかハジメ君のトリオンがコントロール出来たらみんなと一緒にダメージを負うかもしれない。そういつたときにダメージを受けないという感覚のままだといつか危険な目にあうかもしれないからね」

ダメージ表示があればどんな攻撃が危ないという目安が分かる。全くダメージを喰らわないということはどれだけの攻撃が危険なのかが分からないということに比例する。

「でもこれなら勝負が出来る。」

「迅さんと特訓したハジメがどれくらいか……楽しみだ」

「じゃやりましょうか」

.....

「.....」

「.....」

「こ、これは.....」

蓋を開けてみれば。というやつである。

もう5回戦からはただの消化試合みたいなものになっていた。というのは5：0で遊真の勝ち。というか話にならないぐらいにハジメはボロ負けしたのだ。

まあ、あのトリオンがあるからもしかしたら、とか。

あんな自信満々に言っているからいい勝負、とか。

迅に教えてもらっているんだからそれなりに、とか。

ある程度の”強い”と予想していたが、まさかのまさかだった。

「……ハジメ……」

「いや。僕強いなんて言ってませんよ」

「確かに言っていないな。いや、本当悪かった」

「いえいえ。やりたかったといったのは僕もですのぞ」

あれだけボロ負けしたのに全然堪えていない様子。

修は自分がこの立場なら大分心にきただろうなーと考えていた。

「でも、やってて面白いものは見つけたぞ」

「面白いもの?」

「しおりちゃん。4回戦のやつ見られる?」

「見られるよー」

キーボードをタツタツタツと打ち込むと画面にさつき戦った4回戦の映像が流れる。

4回戦はお互いにビルの中。

一回戦二回戦ともに正面から遊真に向かったハジメは簡単にやられて三回戦は距離を開けて隙をつこうとしたが返り討ち。

なのでこの4回戦はハジメのトリオンによる”カメレオン”になって背後からと考えて消えたのだ。

このままだと遊真もマズイと考えた。

なにせこのカメレオンは本部のカメレオンとはワケが違う。

攻撃する寸前に解けるカメレオンではなく”攻撃可能なカメレオン”のために遊真でも避けられない可能性がある。

もちろん殺気とか”当てる”というのがあれば分かるが、ハジメはそれさえもあのトリオンによって止められているのか、全然読めずに

いたのだ。

向こうの世界ではそういう奴らはいたので対応も出来るが、それにプラス姿が見えないとなると……

なので遊真が考えた手がビルを倒壊させることだった。

ビルの支柱を壊したことにより建物が傾く。

それにより壁や天井が壊れ始めて瓦礫が落ちる。

その瓦礫が潜っていたハジメに当たり、そこにいることが分かったので一撃を食らわせて4回戦は終了。

という流れをみたのだが

「で、これの何処が面白かったんだ?」

「オレがハジメに攻撃する前に戻れる??」

「オツケー」

映像を戻すと遊真がハジメに突撃する前に戻った。

そしてハジメの方をズームアップすると

「ほらここ。姿が消えてて見えにくいけど落ちてきていた瓦礫を避けているんだよ」

「ううーん。透明だから分からないんだよね……」

「どうなんだハジメ??」

「まあ、避けようとはしましたけど……何個か当たりましたよ」

「空閑、結局何が言いたいんだ??」

確かに何が言いたいのかよく分からなかった。

しかし遊真には何か確信があるようで

「オレが言いたいのはもしかしたらハジメは”シューターかガンナー”がいいんじゃないかと思ったんだ」

「シューター、ガンナー……」

「あるとき落ちてくる瓦礫の軌道を読んで避けているんじゃないのか??じゃないとあんな動きは出来ないしな」

「姿が見えてないのによく分かったね……」

「瓦礫の細かいやつとかホコリとか、それがハジメに当たっていたからな。どう動くか見えていたって感じだな」

全身が見えていないのによく分かるな……ときつきから大人しく

聞いていた千佳が手を上げて

「で、でもなんでアタッカーからそっちになるの??」

「例えば瓦礫が玉だったらそれを避けられるとか、玉を撃って打ち消すとか、軌道を読めるやつはそういった芸当が出来るんだ。もちろんスナイパーでもいいけどそれは千佳がいるからな。いまいるのはアタッカーかガンナー、シューターと考えた」

遊真のいうことは分かるが、それはハジメが決めることで

「もちろんハジメがやりたくないならしなくていいぞ」

「空閑……」

「あくまでもどうかという提案だ。」

修とハジメのシューターコンビとかも面白そうだしな」

「それなら遊真君とハジメ君のアタッカーもいいよね」

「UMAほど動けません、隠密ならいけます」

「それじゃそれで考えてみるか……」

……

「なるほどねー。いいんじゃない、ガンナーかシューターで」

「そんなあつさり……」

今日の非番は小南と木崎。

さつきまでの話をしてみるとあつさりと小南から了承を得た。

「考えても見なさいよ。ハジメの弧月。当たっても切れないのよ。ならまだ玉を撃ったほうがいいわ」

「そういえば……なんか、当たってもダメージがない。というのがインパクト強すぎて忘れてた……」

「しっかりしなさいよ。修、あんた隊長になるんでしょう??」

「は、はい……」

痛いところをつかれた修。

でも確かにアタッカーになりたいといったのはハジメ本人ではあるけど、その時から弧月がマトモじゃないというのも知っていたな……と後悔する修だった。

「で、ハジメはそれでいいのか??」

「剣の道は諦めてませんが、いまのところはそれで」

「あんだ……何目指してるのよ……」

なんか中2つぽいセリフに軽く引く小南。

それでもハジメがガンナーがシューターを選んだだけ進展はあった。

「それでどっちを選ぶわけ。ガンナーなの、シューターなの??」

「さあ??」

「アンタね……自分のことでしょうがツ!!!」

結局小南に怒られてしまうハジメ。

近くにあつたクツションを投げつけられてしまった。

それをパツと左側に躲したあとに右手でキャッチ、反動を利用して時計回りに回転してまた小南のほうへリリース。

もちろんそんなもの小南が効くわけもないが

「……いい度胸ね……来なさい!!」

いまから十本よ!先輩という壁を教えてあげるわツ!!!」

訓練室を指していまから指導というなの制裁を食らわせてやる。
と意気込む小南だが

「いえ。結構です」

「やりなさいよツ!!!」

「どうやらシューターが向いてそうなので本部にいつて稽古つけてくれそうな人を探してきますので」

というと周りも「い、行ってらっしゃい……」と背中を押してくれた。

一方納得のいかない小南はハジメに詰め寄ろうとするが木崎に抑えられてしまい

「行って来い。自分がやりたいと思うならやってこい」

「ありがとうございます。行ってきます」

「いくなー!!!」

加古隊②

「ええーと……どうしたんですかコレ…」

「どうやらハズレみたいなのよね」

よく分からないが加古隊作戦室の中で知らない男性が二人倒れていた。そしてその近くのテーブルには二人分の食べかけの炒飯があった。

「そうですか??美味しいと思いますけど…」

「流石双葉ね」

同じものを食べている双葉はなんともないようだ。

見た目は問題なさそうなんだが……

「どんな炒飯を作ったんですか??」

「ゲソピー炒飯よ」

「……………えっ??」

「炙りイカゲソとピーナツバター和えの炒飯よ」

つまりそれを食べてここに二人は倒れていると……

……………そんな……

「最低ですね」

「あら。嬉しいことを言ってくれるわね」

ハジメの意外な発言にかなり嬉しそうな表情をする加古。

近くにあった食べかけの炒飯を手に取り食べるハジメは、しっかりと噛んで飲み込んだあと

「女性から作ってもらった物を残す。ましてや気絶なんて……最低な行為です。今すぐに出て行ってください」

炒飯を一旦おいてそこに転がっている死体2体分を加古隊作戦室からポイツと追い出したハジメだった。

「これは僕が食べますね」

「私も食べます」

「ありがとう二人共」

微笑ましい空気が流れる中、それをまるで邪魔するかのようには作戦室の扉が開き

「扱いが酷すぎるだろうがッ!!」

「追い出されるとは思わなかったな……」

そこにいたのはさつきまで倒れていた男二人。

それを見たハジメはこう一言言ってやった。

「女性から出された料理に対して失礼なことをするやつは扱いなんてゴミ以下で十分。とウチの母からの教えですの」

「あら。素敵なお母さんね」

「はい」

「だからってな! あんな扱いしなくても!!」

「はあ?? 普通だったら磔にしてチェーンで鞭のように叩きつけた後に、傷口に粗塩を塗りこむ作業をるところなんですけど」

「……お、おお……」

文句を言ってくる男はその言葉を想像したのだろう。

冷や汗をかいて無意識に一步引いていた。

「やめましょう太刀川さん。あの子が言ってるのは正論ですよ」

「明らかに可笑しい炒飯を食わせるやつはどうなんだよ!?!」

「自分は被害者。と言っているようですけど作った人の、加古先輩の心を全く考えてない人に被害者というカテゴリーは必要ありません」

「マズいもんを食わされるこっちの人権はどうなるんだよッ!?!」

その言葉にハジメの耳と頬がピクリと動いた。

持っていた炒飯を置いたハジメはゆっくりと太刀川と言われている男の前に立ち

「人権?! ああ、そうですねか人権ですか……」

「な、なんだ……おい……」

下を向いていて表情が見えないハジメ。

太刀川はそんなハジメが不気味で……

「ちよつと来てください。OHANASHIをしましょうか」

太刀川さんの手首を握るとそのまま作戦室から出ていこうとする。もちろんそれを太刀川は嫌がると思いきや、まるで操り人形が引っ張られているかのように太刀川の身体から力が抜けて自由が効かなくなっていた。

「な、なんだ！コレはッ!？」

「僕のトリオンです。貴方の手足の筋肉を止めてます。

さあ、いきましよう。人権とは何か。女性とは何か。その足りない頭に徹底的に教えてあげます」

「ま、待て!!話せば分かるから!!その拷問のようなことをするなー!!」
「加古先輩。二時間後に戻ってきますのですみませんが一度失礼します」

「ふふふ。行ってらっしゃい」

「離せー!!」と叫ぶ声が聞こえるがそんな言葉はハジメに届くわけがない。そして太刀川の叫び声が消えるまで残されたもうひとりの男は立ち尽くしていたようだ。

.....

「ただ今戻りました」

「おかえりなさい。太刀川さんはどうなったの??」

「途中で”風間さん”という方にお会いしまして、そしたらあのクズを忍田本部長に引き渡したらいいというアイデアを頂いたので連れて行って忍田本部長と一緒に説教してました。その後は忍田本部長の一方的な訓練をするということで別れてきました」

「いい薬になるわね」

(……太刀川さん……死んだんじゃ……)

なんとも居心地悪そうな表情でお茶をすすする堤。

あの後加古に引き止められていた堤はハジメが帰ってくるまで女性だけの部屋で一人いたのだ。

「ええーと時崎一だったかな?？」

「はい。そうです」

「オレは堤大地。加古ちゃんとは同じ歳なんだけど、だからなのかこうしてよく炒飯を試食させられているんだけど……時崎が言ったようにあのあとに加古ちゃんには謝ったよ」

その言葉が真実なのかと加古の方に視線をやると頷く。

どうやらちゃんと謝ったと確認できたハジメは

「そうですか。ちゃんと謝られる方は良い人です」

「それはどうも。で、ちよつと聞きたいことがあつて…」

「じゃ帰つていいわよ」

と、いきなり堤の腕をとつて無理やり立たせる加古。

そして背中を押しして作戦室からだそうとする。

「ちよつ、ちよつとまつて加古ちゃん!!」

さっきの太刀川に何をやったのか話を……」

「それは今度私から話すわ。だから帰つて。」

今日はこれからやることがあるの。時間もかかるから堤君を相手する余裕がないわ」

そういつて無理やりに作戦室から堤を追い出した加古。

良かったのかなーと、一瞬頭に過ぎつたがすぐに消え去つた。

「それで連絡が来てるから知つてるけど」シューター」の練習を私にお願いしにきたのね」

「はい。加古先輩にお願いしにきました。」

僕に”シューター”としての訓練をしてください」

そういつて頭を下げるハジメ。

いきなりA級隊員にそんなことは普通は無理だが

「いいわよ。”K”ならすぐに勧誘するぐらいに貴方を気に入っているから。どんなシューターになるか、楽しみね」

「ありがとうございます」

事前に上層部からのお達しと、この前のハジメとの手合わせ。

そしてヤケクソだったが加古の攻撃を弧月ではたき落としたハジメを加古はすでに気に入っていたのだ。

しかし、そう簡単にいかないようで

「ちよつと待つてください」

「どうしたの双葉?」

「時崎先輩。私に勝つてからです。それまでは私は認めません」

その双葉の熱意ある瞳に「あら?双葉が燃えてるわ」となんか楽しそうにいう加古。ハジメはなんでそうなるの??と不思議そうな表情をしていた。

「悪いわね時崎君。そういうことだから頑張って」

「はあ……そういうことになるんですね……」

……………

「で、一勝出来たわけ??」

「出来ませんでした」

「まあ、そうなるわよね」

そのあと双葉と50戦。その全てを負けてきたハジメ。

一戦から”韋駄天”を使ってくる双葉に為すすべもなく全敗してきたハジメも流石に落ち込んでいる……

「でも、一勝するまで頑張ります」

「……ポジティブよねアンタ……」

わけもなくからかうつもりだった小南の攻めも簡単にあしらった。それでも普段通りの姿にホツとしていたことを小南本人も気づいていない。

Xmasパーティー

「プレゼント交換したいです」

「……………何言ってるの、いきなり??」

今日は珍しくハジメが玉狛支部にいて遊真達と訓練していた日の夕ご飯を食べたあとのこと。

突然何かを思い出したかのようにハジメが言い出したのだ。

その言葉に小南が呆れ顔で言っていると宇佐見が

「もしかしてXmasのプレゼント交換をしたいの」

「はい。いつか友達が出来たらやってみたかったんです」

「お、重い、重いぞハジメ……………」

楽しいはずのXmasなのにハジメがいうといきなり雰囲気が重たくなる。その友達がいままでいませんでしたというのは、周りからしたらある意味テロ攻撃に似ていた。

そんなことを言われたらやってあげないと可哀想過ぎてこっちの心が痛む。的なテロ行為である。だからか千佳が気を使ってか、

「でもいいんじゃないのかな??」

私もみんなとXmasパーティーしたいー!」

「チカリン……………」

「ところでXmas、ってなんだ??」

「そうか。空閑は知らないんだよな…Xmasってのはな……………」

と、改めてXmasについて話をする修。

その間に小南がハジメに

「ほらハジメ。やりたいならボスに許可をもらいにいくわよ」

「小南先輩はいいんですか??」

「いいに決まってるじゃない。やるなら思いっきり楽しむわよー!」

……………

「いや。ダメだな」

「なんでダメなのよ!!!」

まさかの林藤支部長からの駄目だしがきた。

これには小南も林藤の机を叩いて説明を要求すると

「だって小南。お前その日嵐山隊と防衛任務だぞ」

「あつ」

「……小南先輩……」

「そ、そうだったわ……すっかり忘れていたわ……」

おつちよこちよいな小南。さらに林藤から

「それにな、とりまるもバイトだしレイジも別で防衛任務。

おれも用事があるから子供だけでXmasパーティーはちよつとな……」

「う、宇佐見がいるじゃない！」

「いやいや。一人で遊真、修、千佳、ハジメ、陽太郎、雷神丸を見るんだぞ。負担がでか過ぎるだろう」

ぐうの音も言えない小南。

しかし小南も引けないのだ。Xmasを楽しみにしているハジメがいるのだ。どうにかしてやってあげたい。

「あと一人いればいいのよね！」

「まあ、そうだが…難しいぞ」

「ギリギリまで待ってて！絶対にどうにかするわ!!」

……………

と、いったのはいいものすでに12/23日。明日がイブである。

「なんで誰も変わってくれないのよツツ!!」

「いや、みんなもXmasを楽しむためですよ」

鳥丸がいうのが正解である。

小南の知り合いに声をかけたがみんな予定がある。

というか、ほとんどの隊が玉狛支部と同じように作戦室でXmasを過ごすみたいな感じである。違う人たちも外で食事したりなどしてXmasを過ごすために小南と変わるものはいなかった。

「諦める小南。ハジメもいいといってるだろう」

「そんなの強がりじゃ決まってるじゃない」

「しかし、どうしようもありませんよ」

ううう……と唸る小南。

そんなところに雷神丸に乗ってきた陽太郎が

「任せておけ。俺が完璧なパーティーにしてやる」

「お子様は黙ってなさい」

「他のところが良くて玉狛支部が出来ないなんて横暴だ!!」

と、雷神丸から降りて床で横になって手と足をバタバタして駄々をこね始めた陽太郎。

ハジメもそうだが陽太郎もそれは楽しみにしていたようだ。

「……はあ。仕方ない。ちよつとバイトに早く上がれないか確認してみます」

「と、とりまる……」

「期待はするなよ。Xmasは物凄く忙しいんだからな」

と携帯を取り出してバイト先に電話をかける。

それを見た小南も「私ももう一度頼んでくる!」と玉狛支部を飛び出した。

「お、おまえら…俺のために……」

「陽太郎だけのためじゃないからな」

と、いいつつもレイジもどうやって防衛任務を早く上がれるか考え始めていた。

……………

そして12/24Xmasイブ

「で、結局こうなったわけね…」

「仕方ないだろう」

「そうですよ」

「Xmasパーティーだー!!」

やたらテンションの高い陽太郎とほとんど表情を変えないハジメが両手を上げてテンションが上がっているようだ。

そして時刻は朝の9時である。

やはり鳥丸もレイジも小南も無理だった。

ならばと出した提案が「その日にすればいいなら時間帯は関係ないのではないか??」というものだった。

さすがに無理があるかと思っただが思いの外ハジメも陽太郎も簡単

にOKを出したのだった。

「わたし、朝からXmasパーティーをするの初めて……」

「いや、普通はしないからな……」

「文句ばかりいってはいかんよ諸君。出来ることに威儀があるんだからな」

と、千佳と修にいいながら遊真もテンションが上がってハジメ達と一緒に両手を上げて喜んでいた。

「とうるか……よく考えたら迅。アンタいたら夜でも良かったじゃないのよツツ!!!」

「いやーそれをしてたら小南達参加できなかつただろう。

だからあえて俺から言わないようにしていたんだよ」

「だいたいこの未来見えていたら教えなさいよ

そしたらあんなにも苦労しなくても良かったのよ」

「苦労するのも若い者の特権だぞ」

「アンタ……実際年齢偽ってないわよね……」

と、またしても暗躍してこの状況を作った迅。

しかし小南がそれで納得するわけもなく罰として今日は雑用をやらせることにしたようだ。

「みんなー!ケーキ出来たよー!!!」

「おおおお!!!」

「クリスマスケーキ……初めて見ます……」

「近い近い」

「そういえば家ではやらなかったのか??」

「うちはケーキじゃなくてすき焼きだったので」

「いや、それは家庭で色々かもしれないけど……」

「まあ、これから毎年見るんだ。そんなに凝視しなくていいぞ」

宇佐見が持ってきたクリスマスケーキにテンションがマックスな陽太郎と遊真。ハジメは初めてのケーキに鼻がクリームにつきそうな勢いで近づいて凝視していた。すぐに烏丸に引き戻されたがそれでもまだ凝視している。

「ははは……こりや来年もやらないといけないな……」

「な、なによコレ!!!??」

「トナカイコスです。宇佐見先輩と一緒に買いました」

「いいね〜千佳ちゃんがサンタでこなみがトナカイかあ〜」

「おお！似合ってるぞちかちゃん!!」

すでに千佳はサンタに着替えている。

そんな姿をみてはしゃぐ陽太郎をよそに小南はまだ抵抗を続けていた。

「い、いやよ!!絶対に着ないわよ!!!」

「こういうときは着ないと来年からサンタがプレゼントを持ってきませんよ!!!」

「そんな見え見えな嘘ぐらい分かるわよ!!!」

どうしても着ないと言う小南だったが、そこで陽太郎が動いた。

「いや。着ないとダメだこなみ」

「なんでよ?」

「サンタが来ないんだぞ。プレゼント無いなんて…そんなの、そんなの、クリスマスじゃない!!!」

「いや、あんたね…そんなのし…ツツ!!!?」

そう、そこで気づいたのだ。

陽太郎はまだ子供。そしてサンタを信じている。

ここで小南がサンタはいない。なんて言えば…

つまりは陽太郎のためには、小南はコスをしなないといけない。

今回は鳥丸は嘘は言わずにハメたのだ。

気づいたときにはもう遅い。

いまこの状況でコスをしなないなんて選択肢が出来るわけもなく

……

「……………わ、分かったわよ!!やればいいんでしよう!やればツ!!!」

そのあとトナカイコスを着た小南を含めて記念写真を撮り、その後は千佳と小南の写真撮影会があったとかなかったか……

風間隊①

「やっと見つけたぞ」

「えーと……あつ。この前の」

いつもの通りに鬼怒田に呼ばれた午前、ネイバーのトリオン兵に触れたらどうなるとかの実験。前に中学校でトリオン兵を止めたという報告を受けた鬼怒田がどんな仕組みなのかと興味を持ったようだ。

結局はわからないまま。どんな原理で止めているのか全く分からないようだ。触れただけで相手を止める。戦力として申し分もないのだが……と、渋られながら今日は終わりだとまた割引券を貰って今日はうどんを食べていた所に

「風間だ」

「どうも。時崎です」

そう。この前失礼なやつをお仕置きするときにはアドバイスを貰った人だ。

「この前はありがとうございました」

お陰様であるの人を泣かす事が出来ました」

「そ、そうか……アイツが太刀川というのは知ってるんだよな??」

「そうですね。忍田本部長が言っていましたから」

「……………まあいい。ちよつと付いてこい」

なんか含みがあるようだったけど気にするのを止めた。

ちようどうどんも食べ終わったので後片付けをして風間のあとについていった。

そこはハジメが食べていたスペースから離れた複数人が座るスペース。そこに風間と同じ隊服を着た人達が集まっていた。

「風間さん。そいつですか」

「どうも。時崎ハジメです」

しかしどうしてここに呼ばれたのか。

まったく見覚えのないハジメ。風間は空いていた席に座り、隣に座れとジェスチャーをしてきた。

向かい合わせの席。右側の奥から女の子、風間、ハジメ。向かい側

に男の子が二人いる。

「早速だが前置きもなく言わせてもらう。俺達の隊に入れ」

「はい?？」

いや、いきなり何を言ってくるのだと思っていると風間がさらに説明をしてきた。

「上層部から話を聞いている。時崎の特殊トリオンは俺達の戦闘スタイルと合っている。だから入隊前のお前をスカウトしたいと考えた」ここに呼ばれた理由は分かったのだが本当にいきなり過ぎる。

そんなことを考えていると向かい側のなんか優しそうな人が

「歌川遼だ。実はな、お前の所の宇佐見からちよつと話を聞いて。といつても今日は時崎がここにくるというぐらいだからな」

つまりはずつと探していたのかな??

だから宇佐見先輩に話を聞いてみたと……

「だって君全然存在感なさ過ぎなんだよ」

と、その隣の人がいきなり言ってきた。

「おい、菊地原!」

「風間さん。こんなやついりませんよ。まだ入隊もしてないし実力もないんでしよう。そんなやつ入れたら隊が弱くなりますよ」

「菊地原。俺がお前を勧誘したときも同じだったはずだが」

「同じじゃないですよ。コイツは弱い。違いますよ」

と、言ってくる菊地原にハジメは真正面から。

そう。同じようにハツキリと言ってやった。

「言われなくても入りませんよ。貴方がいる隊なんて」

「お、おい!？」

歌川という人が慌てているがいまはそれどころではない。

いまはこの失礼な奴に対して文句の一つでも言わないと気がすまない。

「なんですか貴方は。いきなり人を呼びつけたと思ったら罵倒なんて。貴方こそ団体行動しないほうがいいですよ。他の人に迷惑をかけますから」

「呼び出したのは風間さんだよ。こっちは元々反対なんだ。」

君みたいなチートな力を持っていると自分が強くなったと勘違いして真っ先に死ぬんだよ」

「どうしてそう決めつけるんですかね。僕のこれはそんなに便利じゃないですよ。人と会えないし見てもくれない。こうやってトリオン体にならないと見えないんですよ。それをチート??よつぽどひがみ体質なんですよ」

「いうね。こっちだって好きでこんなサイドエフェクトを持ってないんだよ。ただの耳のいいなんて嫌なものだし聞きたくないものだって聞くんだよ。そんなもん毎日聞いていたら性格もこうなるよ」

「なりませんよ。それ、単なる貴方の素ですよ」

「そうだったとしても君には関係ないよね」

「ありませんね。だからさつき言った言葉取り消してください」

「やなこと」

「子供ですね」

「あんたもね」

と、睨み合う両者に痺れを切らした風間がテーブルにあった水の入っているコップを二人にめがけて水をかけた。

「いい加減にしろお前らッ!!頭を冷やせ!!」

「……………物理的にされるのは初めてです」

相当頭にきていたのだろう風間は隣の女の子に「お、落ち着いて下さい!!」と言われている。ハジメも流石にやりすぎたと思ひ

「菊地原先輩でしたね。言い過ぎました。すみません。」

皆さんもご迷惑をおかけしました」

と、素直に頭を下げ謝るハジメに風間も

「いや。こっちも悪かった。おい菊地原」

「……………嫌ですよ」

「菊地原」

「……………悪かったね……………」

頭は下げずとも手を首の後ろにやり気まずそうに謝っている菊地原。本当に捻くれているのかと思っていると

「ゴメンね時崎君。菊地原君口が悪くて…」

「いえ。そういう人は組織に一人はいますから」

「君みたいなやつもいるよね」

「なんですか菊地原先輩?」

「なにか言ったかい、後輩??」

「……お前ら……」

再び風間に怒られる前に二人共黙ったそうさ。

……

「それで、どうかな??ウチの隊に入るのは……」

水をかけたお詫びにとデザートを御馳走になるハジメ。

トリオン体なので風邪を引くことはないだろうが風間も感情的に
してしまっただと感じていたそうさ。

そして改めてハジメを勧誘しているのは三上、オペレーターであ
る。さつきよりも詳しく話を聞いてハジメは

「すみませんが入れません。先約があるので」

「というと、やはり玉狛支部で新たに隊を作るというわけか」

「はい。でも僕としては皆さんの訓練には参加してみたいですね。ど
んな風に”カメレオン”を使うか興味があります」

そうすると目の前の菊地原がまた嫌な表情をして

「隊は入らずに戦術だけを盗むつもりかい」

「おい、菊地原」

「だってそうじゃないですか。まあ、戦術を知ったところで活かせる
とは限りませんがね」

「風間先輩。この人はいちいち悪口を言わないと死んじゃう的なサイ
ドエフェクトでも持つてるんですか?」

「………悪いが許してやってくれ。コイツも色々あったんだ」

まったく反省の色を見せない菊地原に本当に苦手意識をするハジ
メ。友達が欲しいと思うのは変わらないがこのひとだけはいらな
いと思っただ。

「俺達としてもそれは構わないと思っっている。

時崎に関しては色んな戦術パターンを教えるようにと上から通達
があったからな。だが教えられるのは基本的なものと前に使った戦

術だ」

「はい。分かっています」

いくら教えるにしても新しい戦術を教えるなんてありえない。

それはハジメも風間も分かっている。

だから妥協できる範囲の戦術をと提案しそれを飲んだ。

「なら歓迎する。こちらも三人組以外のフォーメーションを試したい
と思っていたところだ」

「あれをやるんですか!?!」

「えええーいりませんよ……」

「そんなこと言わないの。いざとなったときの戦術もあつたほうがい
いんだから」

なんか、これがメインだったような気がする……

そううまくハメられたようなと考えていると

「覚えておけ。遂行したい目的は隠しておくに限るとな」

「……覚えておきます……」

……

「……っ、つかれた……」

「だ、大丈夫か、ハジメ??」

玉狛支部に戻った時にはクタクタになっていたハジメ。

一体何があつたのかと他の者たちも集まり説明すると

「それはハジメ。アンタがマヌケだからよ」

「……ですよね……」

「ゴメンねハジメ君。風間さんから口止めされて……」

「いえ。見抜けなかった僕が悪いので……」

「しかし。やつぱり羨ましいな」

ハジメだけ強いやつとやれるなんて……」

「いや。あれもうイジメですよイジメ」

新フォーメーションとは名だけだとハジメは言った。

確かに四人によるフォーメーションはやったがそれまでに至るま
でハジメが最低限の動きをしないといけないということ徹底
に指導された。

風間が厳しく教え、菊地原が横から嫌味をいい、歌川がそれを止めて、三上が全体をまとめる。という流れをずっと聞かされ体験しながら、動けるようになってからもそんな感じで指導され終わった時にはクタクタになっていた。

それでも最後までついてきたハジメに風間は少なくとも好感をを持ったようで「また来い」と言ってくれた。それには歌川も三上も歓迎をしていたが菊地原だけが「もう来なくていいよ」と言ってきた。

なので、歌川先輩に教えてくれた方法を

「宇佐見先輩」

「なにかねハジメ君」

「菊地原先輩が、かまってほしいそうです」

「ほほう。それはいいことを聞いた！」

これで、やり返し完了である。

影浦 雅人①

「えっ？陽太郎、風邪なんですか??」

「うん。お腹出したまま寝ちゃったみたいで……」

「風邪か……この身体になってからは引いてないな」

お正月が終わり遊真、千佳、ハジメの入隊試験が近づくある日。どうやらお正月で楽しんだ陽太郎が油断して寝ている時にはお腹を出したまま寝てしまい風邪を引いたようだ。

そしてその話の流れで遊真が風邪を引かないという話になった。

「そっか。遊真君は常にトリオン体だからか」

「でも風邪がキツイことは知ってるぞ。大丈夫なのか陽太郎のやつ」

「熱はあるけどそんなに高くないみたい。

薬を飲んだら早くは治るよ」

それを聞いてホツとする一同。

そんな中ハジメが手を上げて

「僕も風邪を引いたことがないですね」

「それって、そのトリオンのおかげなの??」

「さあ??病気も怪我もないので」

「それは……俺よりもスゴいな……」

まさかのカミングアウトに遊真も驚く。

トリオン体でもないがハジメのトリオンはあらゆるものを止める
となると病原菌さえも止めるということになるようだ。

「……………ねえ、それ鬼怒田さんに言ったほうがいいかも」

「そうですか??」

「うん。結構重要だと思っよ」

「なら行ってきます」

……………

「何故それを早く言わなかったんだお前はツツ!!!!
聞かれてないので」

「ホウ・レン・ソウを知らんのかツ!!!」

「ほうれん草ですか。知ってますよ。おひたしが好きです」

「そつちじゃないわい!!」

今日も今日とて鬼怒田に怒られるハジメ。

もう開発部では見慣れた光景である。

「……………つたく。そのトリオンの重要性をまるで分かつたらん……………」

「そうですかね」

「その言葉を言ってる時点でダメだと気付け。

……………とにかく、検査を始めるぞ」

検査と言ってもハジメからすれば実験体のようなもの。

流星に身体に影響が及ぶような危ないことはしないが、例えば本当にハジメのトリオンが危険なものを止めるのか??という疑問には針を使ってチクツと刺してみる。といったもの。

それももちろん刺さらなかったのだが、それを今度はトリオンで作ったものでやったりなど、何がダメで何が有効なのか、そういったことはやはり実際に行わないと掴めないもの。

それはハジメも分かっているが、最近はなんだか大雑把になってきたような気がする。

「まずは……………そうだな。インフルエンザの菌を持ってこい」

「いや。あの…それはいきなり過ぎませんか??」

「どうせ止めるんだ。いいだろう」

「万が一の場合はどうするんですか??」

「だからインフルエンザなんだろうが。」

これが天然痘とかなら流星に不味い。儂らも危ないからな」

一応は考えてはくれているようだが、もしかして本当に天然痘とか持っていないよね?!

そんな真相は聞かされることなく隔離した部屋に入れられたハジメ。そこにインフルエンザの菌をばら撒き、しばらく観察する。

「……………どうだ変わりはないか??」

「ないですね」

「……………チイツ」

「鬼怒田さん??なんで残念そうなんですか??」

「いままで散々止められたんだ。一つくらい当たれ」

「んな無茶なことを言わないでください……」

そして一番は鬼怒田がハジメに対して完全に遠慮しなくなったことである。一応気を使っているように見えるが絶対に口が悪くなった。

……

「結果としてはお前さんが”危険”と感じる、直感的危機するものはすべて影響することが分かった」

「なるほど」

と、言っているがいまいち理解してないハジメ。

もちろん鬼怒田もそれはわかっているがあえて説明するよりもこのまま話を続けることにしたようだ。

「怪我はもちろん、病気にならんのもハジメの無意識な防衛本能がトリオンに作用しているようだ。あと家族も病気になったことがないらしいな」

「はい。僕がこのサイドエフェクトを持ってからだと思います」

「つまりだ。縁の強い者にも多少の影響はあるようだ。」

身体の周りに薄い膜があるようなものが病原菌から守つとる。と
考えていいだろう」

「なるほど」

今度のなるほどは大体分かった。の、なるほどである。

しかしいままで気にしていなかったのがトリオンの影響なんて考えたことがなかった。ただ人より病気になりにくいな―程度だったのだ。

そこで何かを思いつたハジメは綺麗に手を垂直に上げて

「はい」

「……なんだ？」

「じゃ風邪を引いている人に僕が触れたら治りますか？」

「ふむ……いや、多分治らんだろう。あくまでも病原菌を身体にいれないようにするだけ……いや、ちよつとまっておれ……」

なんか余計なことをいったかな―と考えながらパソコンをイジる
鬼怒田を待つこと数十分

「病気の進行を一時的に止められるだろう。その間に体調を戻したりすれば病気を治せるかもしれない」

「じゃ一度触れたら病気は止まるんですね」

「簡単にいうが止めたあと、その止めたのをどう戻すつもりだ？」

「また触れて止めたものを止めて元に戻します」

「……………出来たならまた報告するように。いいな？」

さも当たり前前のようにいうハジメに頭が痛くなったのか、会話を強制的に終わらせてしまった鬼怒田だった。

……………

「ということでした試させてください」

「帰りやがれええ!!」

影浦隊の作戦室に入りキッチンと説明をしたあとに言ったのに、友達である影浦に断れたハジメ。

ゾエさんはお茶を入れてくれたようでハジメの前に「どうぞ」と湯呑を置いたあと

「そんなこと言わないでやってあげたら」

「そうだよ。口癖みたいに」こんなサイドエフェクトいらね」って言うてるじゃん」

「だよな。やってあげろカゲ」

「テメエは他人事だから言えるんだよ!」

ゾエ、ユズル、ヒカリはお茶をみかんなどを手に取りながら和気あいあいと言葉を発していたが、カゲに突き刺さるサイドエフェクトの感じだと”面白そう”であった。

「だいたいお待ちこの状況を楽しんでるだろうか!」

「そんなことねえよ」

「そうだよ」

「うんうん。頑張れカゲ」

「ということでもやりましょう」

「やらねえって言うてるだろうか!」

今度は温かい感じのものが突き刺さってくる。

どうもこの3人はハジメと影浦はもう友達として認識しているよ

うで、影浦が友達との距離感が測れずに戸惑っている。だからそんな影浦を温かく見守ろうという感じのようだ。

そうこの作戦室には影浦の味方はいない。

「チイツ。勝手にしやがれ」

ハジメの相手が面倒になったのか作戦室から出ていこうとする影浦。

「待ってください」

「来るんじゃないええ！」

呼び止めようと差し出した手を振り払う影浦。そしてそのまま作戦室から出ていってしまっただけ。

「あのバカ……ッ！」

……ごめんな、カゲには後で言っておくからよ」

「いえ。いいですよ」

「でもカゲにして珍しく怒ってたね」

「いや。あれは怒っているというより戸惑っている感じだね」

「そうなの？というユズルにゾエが頷きながら」

「サイドエフェクトのせいでマトモに友達なんていなかったからね。ハジメみたいにグイグイ来る人、どうすればいいか分からないんじゃないかな」

そんなふうには分析しているゾエを他所に、ハジメは「ちよつと様子を見てきます」と作戦室を出ようとしていた。

「いま追いかけたらきつと怒るよカゲ」

「そうそう。いまはそのままに……」

「いえ。僕に触れた際になにか止めた感じがしたので……」

もしかしたら「サイドエフェクト」を止めたんじゃないかと思うので見てきます」

「おい！マジか!?そいつは面白そうだな！」

見に行くぞお前ら！と張り切るヒカリを中心に全員が影浦を追いかけることにした。そう。どんな反応するか。面白そうだからである。

.....

「くそッ!!……………どうなってやがる……」

居心地悪いと感じた影浦は作戦室から出ていき総合訓練室に向かった。そこで村上鋼と出会いソロ戦を申し込んだ。

いまはとにかくこのイライラをどうにかしたいと考えてのソロ戦だったのだが

『どうしたカゲ?今日は調子が悪いのか??』

「うるせえー……………こっちの問題だ……………」

どうにも戦いに集中出来ていない。

いつもは分かる視線もほとんど分からずにいる。

こんなのは初めてであり戸惑う影浦。

(クソッ!!……………アイツのせいで集中出来ねえ……………!!)

戦っている時もずっと頭に浮かんでくるのはハジメ。

あのとき手を振り払った場面が繰り返し繰り返し頭に流れてくるのだ。罪悪感。そう割り切ればいいがいまの影浦はそれさえも分らずに頭を悩ませている。

(クソがッ!!出てくるんじゃない!!)

とにかくこうも負けっぱなしでは性に合わない。

特に影浦とマトモに戦ってくれる鋼にこんなことで負けているなんて認められなかった。

「鋼!もう一本だ!!」

『俺は構わないが……………大丈夫か??』

「誰に言っただけ……………やるぞ!!」

……………

「うわあ……………派手にやられるなカゲのヤツ……………」

「サイドエフェクト無しじゃ鋼くんにはキツイよね……………」

影浦を追いかけてみれば案の定。鋼に負け越している影浦。

それでも完全に負けている訳ではないがそれでもサイドエフェクト無しである村上鋼に勝ち越すなんて難しいとしか言えない。

「……………どうするのコレ?早くカゲに言ったほうが良くない?」

「そうだね。まだそこまだ周りに見られてないけどそれも時間の問題だろうし……………」

「ワタシ、ちよつと止めてくるわ。ハジメも一緒に……って、ハジメは??」

いつの間にかいなくなっているハジメに3人は周りを見渡す。

しかしどこにも見当たらないと一度影浦と鋼の戦いを映した画面に目をやると

「な、何やってるだアイツ!!!??」

そこに、影浦と鋼がやり合っている画面の奥でハジメが立っていた。

実は二人が戦っているのを見たハジメはどうか影浦の元へ行けないかなーと考え、影浦の所についても通してくれないだろうと踏んだので、初めてではあるが鋼に事情を話して入れてもらったのだ。

で、もちろんすぐに二人は気づき

「何してやがるテメエ!!」

「友達に会いに来ました」

「カゲに友達なんて、初めて聞いたな」

「誰が友達だ!!帰りやがれッ!!」

そういつて影浦はスコープピオンでハジメのトリオン供給機関を破壊しようと刃を伸ばした。ハジメの実力ではどうあがいても簡単にやられる。

しかしそれは実力であり、そこにハジメのトリオンがあれば。

スコープピオンの刃はハジメの胸に当たりはしたが突き刺さらずにその場に止まってしまった。

「チイツ!!厄介なトリオンだぜ」

「それが話に聞いていたトリオンか……」

もちろん当たったのでハジメが付いている装置が鳴り、ベイルアウトと声が鳴り響いた。もちろんハジメが自主的にベイルアウトしないといけないのだが、ハジメはそのまま影浦に近づき

「すみません」

「はあ!?!」

「いや。わざとではないんですけど、どうやら僕が触れてしまったことでサイドエフェクトが使えなくなつたみたいです」

「……ッ!!?あのとときか……!!」

「どうりで動きが悪いわけだ……」

納得する二人をよそにハジメはさり気なく影浦に触れて止めていたサイドエフェクトを止めた。これで通常通りにサイドエフェクトを使える。

「これで大丈夫です。どうもすみませんでした。」

僕は戻りますね。ベイルア……」

「待ちやがれ!!!」

用も終わったので立ち去ろうとするハジメを止めた影浦。

「いくら攻撃が当たってもベイルアウトしないんだよな?」

「そうですね。自分からじゃないとしません」

「だったらそこで見てる!」

……動く障害物なんてシユチエーション、なかなかないから……なッ!!!

と、いきなり鋼に斬りかかる影浦。

しつかりとスラストで受け止める鋼。弾いた影浦に攻撃を仕掛けようとするがハジメの後ろに下がり

「おいカゲ!」

「こいつはいい盾だ。おい、ハジメ!!自由に動きやがれ。」

テメエを使った戦術なんて面白そうだからな!!!」

「これ、戦術というよりサンドバッグに近くないですか?」

「つたく……悪いけど協力してもらおうよ」

「えええ……まあ、なにもしなくてもいいから、いいですけど……」

そのあと十本。ハジメという動く盾を両者が使いながらの対戦は5対5で決着はつかなかった。

しかし鋼も影浦も何かを掴んだようで

「次も来いハジメ!」

「出来ればカゲ以外の戦闘でもやってみたいな」

「………気が向いたらで」

「明日も来い!!!」

「………えええ………」

友達と仲良くなったかもしれないが、しばらく影浦には、総合訓練室には来ないようにしようと考えたハジメだった。

那須隊①

今日はお休み。

間近に迫った入隊試験。問題はないだろうと烏丸先輩からお墨付
きをもらったのでゆつくりと休日を満喫する。

「ということ遊びに行ってもいいですか?」

『ふざけんなッ!!』

と、大声を貰って電話が切れた。

再び電話をかけたが繋がらない。しようがないと諦めたハジメは
「ゾエ先輩ですか?カゲ先輩をお願いします」

『カゲー!ハジメ君から電話だよー!!!』

『何出てんだテメエはッ!!!』

やっぱり近くにゾエ先輩がいた。

ダメだった場合はユズルとヒカリ、そして綱に連絡するつもりだっ
たが一発で引き当ててよかった。

『こつちはテメエと遊んでる暇はねえんだよ!!!』

『いまから防衛戦だから……ね?』

「それを早く言ってください。今日は諦めます」

『……チイツ!!』

『ゴメンねーまたカゲを誘ってあげて』

「了解です」

『勝手にきめ…、』

最後まで言わせないようにゾエ先輩が電話を切ったようだ。

しかし、これからどうしようか。と考えるハジメ。

完全に影浦と遊ぶつもり満々だったためにそれ以外のことを考え
ていなかった。

いまから玉狛支部に行っても追い返されそうであり、加古先輩の所
に行っても黒江にコテンパンにやられる。それは強くなるために
やってもらっているのだが、やはり負けが続くと心にくるものがある。

そうになると風間隊だがあその口うるさい先輩には会いたくない

ので初めから却下である。

「…………あれ??友達そんなに増えてない…」

あつという間に遊んでくれる相手がいなくなった。
本格的にこれからどうしようかと悩んでいると

「……………はあ…はあ……………」

胸を抑えて苦しんでいる女性が座り込んでいる所に出くわした。
それもどこかで見たことある人。多分ボーダー関係者だと思う。
しかしそんなことを考えている暇はない。さらに苦しそうな表情をす
るのでとにかく駆け寄ることにした。

「大丈夫ですか??」

「…………す、すこし、このままにしていたら…大丈夫です……………」

どう見ても大丈夫そうではない。

救急車を呼ぼう。とも思ったが大げさにしてしまうのはダメなよ
うな気がした。それにこの人は…………

「トリオン体には、なれませんか?」

「もしかして、ボーダーの…………でも、今日は持つてないの……………」

それは困った。何かしてあげたいがどうすることも出来ない。

このままにして何処かに行くなんてこともありえないし…………

と、考えていたところでちよつとした思いつきがあった。

でも、これ、下手したらセクハラで、痴漢と言われるかも…………

だからハジメは慎重に聞いてみることにした。

「あ、あの…………ちよつとしたおまじない、みたいなことをしたいんです
けど…………その時ちよつとだけ背中に触れてもいいですか??」

「……………えっ??」

「もし嫌なら断ってください。もしかしたらこの苦しいのが和らぐと
いいですか、一時的にも消えると思いますので……………」

ここで断れたら仕方ない。

諦めて苦しみが無くなるまで付きそう。と決めたハジメ。

そして少し考えた女性は

「お願いします……………」

「…………いいんですか??」

「悪い人じゃない。それだけで十分です」

随分と信用してくれるな……と少し嬉しかったがそれどころでもない。「では、失礼します……」と一応断りを入れてから割れやすいガラスに触れるかのようにゆつくりと女性の背中に触れた。

「……………ウ、ン……………」

何も、何も聞かなかったことにして、ハジメは集中した。

きつと胸が苦しいはずだから、内臓系や血管、筋肉など必要なものは止めずに、違和感があるもの。身体に必要なものだけを見つけ出す……………あつた。

その箇所にゆつくりとハジメのトリオンを注ぎ込んでみる。

少量で、最低限の量に留めるように、ゆつくりと……………

「う、うそ……………痛みが……………無くなった……………」

「……………ふうく。良かった……………」

なんとか成功した。

医者のような真似事だからまだ安心は出来ないけど一応応急処置ぐらいにはなつたはず。

「動けるとは思いますけどあくまでも応急処置なので」

「え、えっ……………」

「とにかく移動しませんか??」

「わ、分かったわ……………」

……………

近くの喫茶店に入ることになった二人。

そしてこの女性はやっぱりボーダーの人であり那須 玲さんという。

そしてここに誰か向かいにしてもらうまで那須先輩のお話相手として遺ることになったのだが

「それじゃ…治ったわけじゃないのね」

「そうですね。症状を止めたに過ぎないので」

「そのままには出来ないの?」

「オススメは出来ません。いつ僕のトリオン効果が切れるか分かりませんから」

「……そう……」

そんなに落ち込まれても困るのだが……

それはまあ、どうにかしたい気持ちはあるけど……

すると喫茶店のドアが開きカランカランと店内に鳴り響く。

「玲ッ!!」

「くまちゃん……」

どうやら同じ部隊の人らしい。

すぐに駆け寄り那須先輩の身体を一通り見たあとに問題ないと判断して那須先輩を抱きしめた。

「もう……バカー……心配したんだから……」

「ゴメンね。くまちゃん……」

那須先輩を迎えに来られたし僕はお暇しようと思おうと立ち上がろうとしたところで

「貴方ね。玲を助けてくれたのは」

「大したことはしてませんので」

「そんなことないわ。本当にありがとう」

「いえいえ」

礼儀正しい人だなー本当に大したことはしてないのに。

治ったわけじゃないからなー

「あたしは熊谷友子よ」

「時崎 一です」

「時崎って、あの??」

「そう。桐絵ちゃんが話していた子」

「えっ。……ちなみになんて言ってたんですか?」

「私がいないとダメな子、だったかな?」

あの人……周りにどんな説明をしているのか……

まあ周りにどう思われても関係はないけど。

「あとは、奇想天外なことをするけど優しい子って言っていたわ」

……いや、ちよつと、それは……

「あら?照れちゃった?」

「良かったじゃない。褒められて」

「……からかわないでください……」

恥ずかしいがるハジメを見てクスクスと笑う二人。

走ってきた熊谷の為に少し落ち着こうということで再び座り、改めてこれまでのことを話した。

「……じゃ、その止めているのは解除しないといけないのね」

「僕もずっと止めれるのか分からないので……」

でもちゃんと体調のいい日に解除すれば少しは抑えられると思いますので」

そこで考える熊谷。

理屈は分かるが、それでもまた那須の苦しむ姿を見たくないというのがどうしても脳裏に浮かぶのだ。

「……他に方法は、ないの??」

「ちよつとくまちゃん……」

「ただ身体が弱いだけでこんなに玲が苦しむなんて…私は見たくないのよー」

「……ありがとうくまちゃん。でもそれはボーダーに入って大分改善されたからいいのよ」

「それでもあたしは……」

身体の弱い那須先輩がボーダーに入って少しでも体調が改善するために、と。

つまりは僕と似たような境遇なのかもしれないな

「それでしたら試して見ますか??」

……

「あつ！那須先輩ー熊谷先輩ー!!」

「茜ちゃんー!」

「来たわね」

今日は那須隊待望のお出掛け。

那須の家の前で待ち合せをして少しでも体調が悪くならないようにと配慮、なのだが……

「ゴメンね。わざわざ来てもらって……」

「いいんですよ！もう那須先輩の家が定番ですから!!」

「そうよ。気にしなくていいのよ」

『ですね。まあ、私はここからですが』

と、日浦 茜が持っているタブレットから映るのはオペレーターの志岐 小夜子だった。今日も今日とて家から出ない。というか男性と合う確率があるだけで出ないという。

「でも本当に時崎には感謝ね」

「本当に。こうして体調を気にせずに出掛けられるなんて…」

「今日はどこに行くんですか!?!」

『はいはい。落ち着きなさい』

あのあとハジメから提案されたのは定期的にハジメが那須に触れることだった。触れるといっても身体の何処でもいいので手の甲に軽く触れるだけでもいい。

それにより那須の身体には体調がいい状態で停止がかかるので悪くなることなく。

それがどんな理屈か分からないが、何日か試しながら今日のお出かけまでこぎつけたのだ。

もちろん鬼怒田さんにキチンと話して、身体にダメージがないように細心の注意を払いながら行った。

「でも時崎君にはお礼したかったのに…」

「玲。あんたこの中に男一人って…軽くイジメよ」

「そうかしら?」

「お土産買っていったらいいじゃないんですか!?!」

『ですね。そこにいなくても男の人在るのはちよつと…』

そして今日のお出かけにハジメを誘った那須。

来てくれるかと思っただが「流石にそれは…辞退させてもらいます」と断れたのだ。

こうして熊谷達に理由を教えてもらったが未だに納得していない。

「じゃ、個人的にお礼したほうがいいわね」

「…………ちよつと玲。あんたまさか…………」

「え、えっ!?!そうなんですか!?!」

『これは意外』

「シユーターの事を知りたいみたいだから私が教えてみようかなーって思うんだけど」

「……………そっちなね」

「なーんだ」

『だろーうと思いました』

「??」

1月8日①

「よし。確認するぞ。」

C級隊員の遊真と千佳、ハジメがB級をまず目指す」

「そしてチームを組んでA級を目指す」

「A級になったら遠征部隊の選抜試験を受けて」

「ネイバーの世界にさらわれた兄さんと友達を捜しに行く」

試験会場で修、ハジメ、遊真、千佳がそれぞれの思いを確認していた。今日はボーダー隊員正式入隊日。

やることはやった。

あとはここで如何にして早くB級に上がるかだが、まあ、とにかくは頑張るしかない。

ボーダー本部長の忍田からの挨拶のあと、これからの進行を進めるために現れたのが

「あつ、嵐山先輩」

ハジメや修達が大変お世話になった嵐山隊だった。

どうやらメディアで多く取り上げられている嵐山隊が進行するほうがスムーズにいくと踏んでのことだろう。

「さて、これからオリエンテーションを始めるが、まずはポジションごとに分かれてもらう。アタッカーとガンナーを志望する者はここに残り、スナイパーを志望する者はうちの佐鳥について訓練場に移動してくれ」

ということとで早速千佳と分かれるようだったので

「チカリン。里折先輩さとおりのいうことはキチンと聞いてね」

「……えっ??里折……えっ??」

困惑している千佳。

そしてキチンとハジメの言葉が聞こえたようでズンズンと足音を

鳴らして

「お前ワザとだろう!!!僕の名前は佐鳥だあ!!!」

「だそうなので、頑張ってね」

「う、うん……」

「軽く流すなッ!!」

と、いつものやり取りを終えて満足したハジメだった。

それを見ていた修と遊真は

「……本当に、よくやるな……」

「流石にオレでも、あそこまではしない……」

佐鳥に同情する二人だった。

……

それからアタッカーとガンナーを担当する嵐山からC級からB級へ上がるための説明を受け、まずは「訓練」から説明を受けることになり訓練室へ移動することになった。

そしてその道中で

「どうして貴方がここにいるの三雲君？」

「木虎……」

全体のバランス。何かあったときの対処するために離れていた木虎がB級である三雲に話しかけてきた。

「僕は転属の手続きと空閑とハジメの付き添いだよ」

「………いるのね……」

「えっ。それってどういう……」

なんのことかと聞こうとしたときゆっくりと木虎の背後に回ったハジメが

「お久しぶりです」

「ひゃあッ!!!」

と、なんとも可愛らしい悲鳴を上げる木虎。

そしてすぐさま振り向きざまにハジメの胴体へ蹴りをお見舞いした。

「ダメですよ木虎。戦闘行為は禁止されています」

「これは正当防衛よ!!というか毎回背後から声をかけないで！」

「正面で話しかけたらパンチを顔面にしてみましたよね。」

だから背後にしたんですが……」

「ステルス状態で話しかけてこないでって言ってるのッ!!!」

「今回は使ってませんか?」

「背後もダメだつて分からないの貴方はツツ!!!!!!」

もう周りから注目されていることなんて気にしていない。

というか頭から抜け落ちたように怒っている木虎。

どうやら毎回会うたびに大変な思いをしているようだ。

「……ハジメ。お前何してるんだ……??」

「挨拶ですよ。基本ですよね」

「三雲君！ちゃんとコレを教育しなさいツ
!!!!!!」

「どうとうコレ扱いですか」

「間違いなくハジメが悪い」

そしてハジメに言っても無駄だと分かっている木虎は矛先を修に変えてこれまでのことをこれでもかと言いだめた。

その間に移動しようとハジメは「じゃオッサム頑張つて」と言い残して遊真と二人で訓練室へ向かった。

すでに集まっていたので急いで輪の中に入ると一瞬ハジメの方を見たあとに

「まず最初の訓練は、対ネイバー戦闘訓練だ。仮装戦闘モードでも部屋の中で、ボーダーの集積データから再現されたネイバーと戦ってもらう」

これは玉狛支部でもやった訓練だ。と思っていると更に嵐山が更に

「仮入隊の間に体験した者もいると思うが、仮戦闘モードではトリオン切れはない。ケガもしないから思いっきり戦ってくれ」

「今回戦ってもらうのは”初心者”^{ビギナーレベル}の相手。君たちも見たことのある大型ネイバーだ。訓練用に少し小型化してある。攻撃力はないが、その分装甲が分厚いぞ」

「制限時間は一人5分、早く倒すほど評価点は高くなる。自信のある者は高得点を狙ってほしい。説明は以上、各部屋始めてくれ」

そう言い終わったあと誰もが訓練へ足を運びだした。

さて、どうしようかなーと考えていると嵐山がこちらに近づいてきて

「正式入隊おめでとう時崎君」

「ありがとうございますございます嵐山先輩」

丁寧な挨拶に丁寧とお辞儀をするハジメ。

そしてその隣から時枝先輩も挨拶してくれた。

「本当に随分と木虎と仲良くなったね。」

さつきも声がここまで聞こえていたよ」

「挨拶しただけですけど、怒られました」

「そういえば佐鳥も挨拶してたな」

「佐鳥先輩はワザとです。定番です」

「アハハ……」

やめてやってくれ。と言っても聞かないだろうなーと嵐山は諦めて苦笑いだけに留めた。辺りはどんどん訓練室へ入りモニターでどんな様子が見れてとれる。

嵐山達と一緒にそのモニターを見ると今回初めて1分台をきるものが出た。

「これって何秒ぐらいがいいんですか？」

「決まりはないよ。でも速ければ速いほどいい」

「確かうちの木虎は9秒だったかな……」

「なるほど。なら僕はその倍で決めます」

「自信满满だね」

「はい。18秒ピッタリに決めてみせます」

「……そっちの倍かあ……」

本当に何を考えているか分からないなーと嵐山も時枝も思った。思ったが口にはしなかった。

すると今度訓練室に入ってきたのは遊真。

「おっ。UMA」

「同じ玉狛支部だったね」

「はい。期待の新人です」

「それ、時崎君がいうセリフではないな……」

なんかすでに嵐山隊と同等みたいな雰囲気語っている風に見えるハジメ。しかしもちろんそんなことはなくハジメの服装はちゃんとC級のものである。

そしてモニターでは訓練開始の合図がなった。瞬間。

『……………0.6秒ッ!!?』

これには誰もが驚いた。

記録を読み上げた人も、ここにいるC級も、そして隣にいる嵐山も時枝も、そのタイムに正直に驚いていた。

「……………確か今まで一番速くても4秒でしたね……………」

「これは、驚いた……………本当に期待の新人だな……………」

「やっぱり速いなーUMAは」

誰もがざわめく中のみびりと感想をいうハジメ。

むしろアレがUMAです。といい広めたい気分にもなった。

しかしあまり目立ちたくないのいま騒がれているいま終わらせようと訓練室に入った。

訓練室に入ると目の前に大型ネイバーが現れてカウントが始まる。

そしてビィー!と鳴り響くと同時に大型ネイバーがハジメに向かって襲いかかる。

「いーち、にー、さーん……………」

秒数を数えながら振り下ろされる大型ネイバーの前足を右手で受け止めようとする。もちろんそんなことすればペしゃんこになり訓練自体も終わってしまう可能性がある。

しかしその前足がハジメに触れた途端に大型ネイバーは動きを止めた。まるで再生する映像を一時停止させたように前足を浮かした状態で止まっている。

「……………なーな、はーち、きゅーう……………」

止まっている大型ネイバーをよじ登るハジメ。

その間も秒数を数えながらやっとの所で弱点である口までたどり着いた。

右手からスコープオンを出して、すぐに供給機関を破壊せずに秒数を数えながら構える。

「……………16、17……………」

そして次の秒数を数えと同時にハジメは大型ネイバーのトリオン供給機関を

「……18ツツ!!」

破壊し、止めていた大型ネイバーを倒してみせた。

……

よし。終わった。と訓練室から出てくると何かざわざわしている。そしてモニターを見てみると、

「オッサムに……風間先輩?」

何故か修と風間が訓練室で戦っている。それも修の一方的敗北で。どういふことなんだろう??と、嵐山達がいる所へ向かって話を聞くことにした。

「これ、何が起きてるんですか??」

「時崎君!?! 一体どこにいたんだ??」

「訓練室で訓練してました。タイムはジャスト18秒です」

「本当に、やったんだね……」

「それでこれは……」

「実は……」

と、そこでなんでこんな事になっているのか話を聞いた。

そしてハジメの感想は

「風間先輩はやると決めると徹底的ですからね。頑張りオッサム」

「……意外だね。友達があそこまでやられているから怒るかと思ったよ……」

「僕もこの前風間先輩に徹底指導されました」

「これで僕とオッサムは同じ苦しみを味わった同志です」

「……そういう見方になるんだ……」

それでも「頑張り」というハジメに時枝は本当に変わってるけど、いいやつだなーとちよつとだけ評価が上がったようだ。

……

「どうでした?うちの三雲は」

出てきた風間に話しかける鳥丸。どうやらハジメ達がどうなのか様子を見に来たらしい。そして近くにいたようだけどハジメも嵐山達と話していて気づいていなかった。

そして鳥丸の答えに風間は

「はつきり言って弱いな。」

トリオンも身体能力もギリギリのレベルだ。

迅が推すほどの素質は感じない」

「だが、自分の弱さをよく自覚していて、それゆえの発想と相手を読む頭がある。知恵と工夫を使う戦い方は、俺は嫌いじゃない」

と、意外に評価してくれたようだった。

そして「邪魔したな、三雲」と去ろうとしたので

「お疲れ様です風間先輩」

「時崎か。そうか。お前も今日だったな」

「訓練タイム18秒です」

「話にならない。また鍛え直すぞ」

「その時はオッサムも一緒でもいいですか??」

「……………時間があればな……………」

と、会話する姿に驚く嵐山隊。

確かにハジメはA級から指導を受けることを承認されていたが、まさかあの風間が……………という印象がとても強かった。

「あつ。ここに菊地原先輩はいるんですか??」

「あそこだ」

「……………チイツ」

「相性が合わないのは分かるが分かりやすい舌打ちはやめろ」

と、言われたのでさらにハッキリということにしたハジメは、明確に菊地原のほうを指さして聞こえるように

「嫌いです。あの人、本当に嫌いです」

「僕も君は嫌いだよ」

「こんな離れた所で言いあうなッ!!帰るぞ」

と、怒られてしまった。

風間もここにいるとさらに迷惑がかかると菊地原達を連れてきつさと訓練室から離れていった。

そしてハジメは修の所へ向かい

「いつか一緒に菊地原先輩をぶっ倒しましょう」

「……………頼むから僕を巻き込まないでくれ……………」

すると遊真や嵐山や時枝、さらに烏丸と木虎もハジメの所に集まってきた。

「ハジメ。先輩に対してあれはあんまりだぞ」

「そうですか。アレ、先輩でしたか」

「……嘘、ついてないな……」

「いや、100%嘘だろう。これ……」

「貴方にも苦手な人はいるのね」

「木虎は違いますから、もっと積極的に。ですか？」

「ここで……ぶった斬るわよッ!!!」

「本当に仲がいい木虎」

「やっぱりうちのチームに勧誘しようか」

「絶対にお断りです!!」

「こつちからもダメだというぞ。大事な戦力だからな」

「皆さん。仲がいいですねー」

「……それ、お前がいうのか……」

と、訓練のことを忘れて雑談が始まり、他の隊員から指摘されるまで話は尽きなかったという……

1月8日②

「本当にごめんなさい。」

壊した壁の弁償は一生かけても弁償しますので…」

千佳の見事なまでの土下座に佐鳥は慌てて土下座を仕返した。

「な、え!?、こ、こちらこそ!」

「何をしてるんだお前は…」

佐鳥の行動に少し頭が痛くなった東。

しかしいまはこっちより、

「頭を上げなよ。大丈夫、訓練による事故だ」

「で、でも…」

「それに君はまだ訓練生。責任というなら正隊員が取るべきだ」

「はい!!その責任はオレが取ります!!!」

土下座をやめて勢いよく宣言する佐鳥。

それは千佳の不安を取り除くためか、それともお調子よくやっているだけか…

「ということだ。責任はここにいる佐鳥が取る」

「え、ええ?」

「大丈夫だよ。それに君の所の玉狛支部にも影響はないからね」

それを聞いてホッとする千佳。

するとこの訓練室に「いったい何があったんだ!!」と怒鳴り込んでくる声を聞いた千佳はまたビクッと体を震わせ怖がりだした。

「な、何だこれは!?なぜ壁に穴が空いとるツツ!!!」

そこに現れたのは鬼怒田。

その姿を見た佐鳥は何だかカツコよく決めようとサッと鬼怒田の前に立ち

「鬼怒田開発室長。訓練中にちよつとした事故が起きました。」

責任は全て現場監督のボクにあります」

決まった。という表情をする佐鳥。

しかし鬼怒田は身体をフルフルと震わせたあとに片手を上げたあとに佐鳥の頭にめがけて振り落とした。

「その通りだあ!!」

「痛く…ないッ!!」

思いつきり頭上にチョップを喰らった佐鳥。

いまはトリオン体になってるので痛みは感じないが

「防衛隊員が基地を壊してどうするんじや!!」

「あ、あれ?ここは怒られないパターンじゃ…」

「んなもんはないわッッ!!」

普段よく鬼怒田を怒らせるものがいるので仕方ない。

ストレスはすぐに発散しないと大変なことになるのだ。

鬼怒田は佐鳥を身体を思いつきり揺らし「どうするつもりだ!!」と怒鳴っている。そんな様子を見た千佳は、どうしても罪悪感が拭えずに

「あ、あの!!すみません。私が壁を壊しました…」

「なに!?東くん本当かね」

「ええ。それは事実です。彼女が壁に穴をあけました。」

そして彼女は玉狛支部の雨取 千佳です」

「……玉狛支部…だど!」

険しい顔になった鬼怒田にさらにビクつとする千佳。

やっぱり怒られると覚悟をしていると

「そうかそうか。千佳ちゃんというか」

「……え、は、はい……」

突然見たことのないような笑顔で千佳の頭を撫でる鬼怒田。

絶対に怒られると思っていた千佳は面をくらい動揺している。

「すごいトリオンの才能だねえ。」

「ご両親に感謝しなきゃいかんよ。壁のことは気にせんでいい。」

あの壁もトリオンでできてるから簡単に直せる」

「は、はい……」

とりあえず怒られずに済んだのは良かったが、やっぱりさっきの鬼怒田と様子が違いすぎてギクシャクしてしまっている千佳。

そんな様子を痛くはないが頭を押さえながら東と会話をしている
佐鳥が

「鬼怒田さんはロリコンだった!？」

「お前：絶対に本人の前でいうなよ……」

確か分かれて暮らしている娘さんを思い出しているんだろう。今は確か中1だったはず」

「なるほど……」

本当に分かったのか?と思いつつもこの場が収まったことにホッとする東。そして鬼怒田が「玉狛支部」と聞いたときの反応について考え出した。

(そういえば、A級隊員に指導を受けれる隊員がいるって聞いたのが玉狛支部だったはず……)

もしかしてと思考を巡らせているとその張本人が

「あれ?どうしてここにあるんですか鬼怒田さん」

「全てお前が悪いんじゃない!？」

と、懐から何故かスリッパが出てきてハジメめがけて投げ飛ばした。それはもうアステロイドかと思うぐらい速く重たいものがハジメの顔面に当たった。

「痛くないですけど、酷くないですか?」

「五月蠅い!!玉狛支部のことは全てお前が悪い」

「いや。横暴にもほどがありますよ」

「だからお前だけにしか言つとらんわ」

あんなものを食らって平然と会話しているハジメと、下手したら虐待と取られる行為を平気にしている鬼怒田に、周りにいる新入隊員達は

(……こ、怖い……なにか、分からないのが怖い……!!)

どんな関係性だったらこんなふうになるのか考えたくもないほどにこの空気は異常だった。

「おお。派手にやったんですねチカリン」

「う、うん……」

「これを僕が責任負えばいいんですか??」

「……んなわけなからう。あの壁はトリオンで出来とる。すぐに修復出来るわい」

「なるほど。つまり僕のトリオンを吸い取るということですね」

「お前のわけわからないトリオンなんぞ使うかッ!!」

完全な漫才だと思っぐらいにまた懐からスリッパを取り出してハジメの頭を叩く鬼怒田。このやりとりが終わるまでは誰も口出し出来ない。

「それに責任はこの佐鳥に取らせる」

「ああ。佐藤先輩ですか」

「僕の名前は佐鳥だあ!!! さつき鬼怒田開発室長も言っただろうがッ!!!」

「いつものやつなので」

「やっぱりワザとかッッ!!!」

「当たり前ですよ。そんなに残念な頭ではありません」

「残念な頭をだろろうがッッ!!!」

「五月蠅いッ!!!」

「へボッ!!!」

散々ハジメにイジられた後に鬼怒田からの一撃。

いくらトリオン体といえども心にくるものがあるようで…

「な、何なんですか!? オレそこまで悪いことしましたかッ!!!」

「……話にならない。東! 後はしつかりと見とけ!!」

と、言いながら鬼怒田は佐鳥の首根つこを掴み引つ張る。

「お前はいまから始末書を書け」

「絶対にオレの扱い、間違ってますよッ!!」

佐鳥の訴えなど聞く耳持たず。

鬼怒田はもう一度佐鳥の頭にチョップを食らわせて黙らせて連れて行った。痛みはないのだろうが精神的にきたようで佐鳥は大人しくなったようだ。

「……………よし、訓練を続けよう」

(さつきのをなかつたことにした!?)

この中でも一番の大人である東の言葉。

しかしさつきの出来事を掘り返すことなど誰も望んでいない。

ということ、訓練生は一齐に訓練に戻った。

「ほほう。なかなかの統一ですな」

「……いや、これは誰も触れたくないだけだ……」

「何のことですかオッサム？」

そういうことだ。と一言言いたかったがグツと堪えた。

ここで蒸し返したらきつと大変な目にあうのが目に見えている

……

……………

「いい加減どうにかならんのか…お前らは……」

「仕方ないですよ。相性が悪いんですから」

「本当に、水と油ですよね……」

風間隊は訓練室を後にしたあと自身の作戦室へと帰っている途中だった。話題は先程のハジメと菊地原とのやり取り。

「だがな菊地原。お前は先輩なんだぞ。」

少なくともお前が改善すれば時崎は突っかかってこない筈だ」

「はず。ですよ。そんな曖昧じゃ変える気はないですよ」

これ以上は無駄だと分かった風間はハァーとため息をつく。

すると目の前から現れたのは女性二人組。

「あら風間さん。もしかして入隊式に??」

「まあな。ちよつと気になった奴もいたからな」

「もしかして、時崎君かしら??」

「そうか。お前のところにも来ていたか……」

現在時崎が何処にお世話になっているのか特に情報共有しているわけではないが、加古は前にハジメと風間が出会っていることを知っていた。

「時崎君が太刀川君を引きずっている時にアドバイスしたのでしよう。その時私達の作戦室からだったら」

「……なるほど。そういうわけだったか……」

「詳しく話を聞かなかったの??」

「あのバカに説教するんだ。詳しい話などいらん」

どうやら太刀川がよく説教されている。という普段の行いが悪いことを知っている風間は理由を聞かなくとも100%有罪と理解し

ている。

「しかしまさかお前に”シユーター”を習っていたとはな……」

「まだ教えてないわよ」

「なら、何をしに……」

「こつちも色々あるのよ。そつちも時崎君に手解きしたんじやないの??」

「”カメレオン”のようなものを使いこなせる奴がいるなら、いつか同じ現場に出たときに足を引つ張らないように前もって訓練したにすぎない」

「……そういうことにしておくわ」

必要以上の情報を出さない。

同じボーダーだとしても手の内を見せることはない。

すると、そこへもう一組現れたのが

「何やってるんだお前ら??」

「諏訪。訓練は終わったのか??」

そこにいたのは諏訪隊の諏訪と堤だった。

今回の訓練をモニターで監視していた二人。

「いまな。つたく、今回の新人は面白い奴が多いな」

「玉狛支部の新人は特にですよね」

「ねえ。時崎君の戦闘訓練の様子、見れないかしら??」

「時崎だあ??……ああアイツか……」

「あの子、本当に何者なんですか??」

……

訓練室の様子を見るモニター室に集まった一同。

堤がパソコンを扱いハジメの戦闘訓練を映した。

するとそこにはネイバーに襲われるハジメが片手で攻撃を止めて、そしてネイバー自体を止めてしまった。

それからネイバーをよじ登り、ハジメ自身が数字を数えながら18秒の所でトドメを指していた。

「……改めて見てもスゴいわね……」

「報告では受けていたが、これはネイバーの対抗策に使える」

「でもたかが一人じゃそこまで変わりませんよ」

「だけど、足止めに関して鉄壁といえる」

大した戦闘力はない。

しかしそれを大きく補うほどの力。

何もかも止めてしまう力と、姿を消せる力。

それがハジメの中にある特殊なトリオンが影響している。

「次の大規模侵攻。時崎の使い所によっては戦況が大きく変わるぞ」

その風間の言葉に誰もが頷いた。

C級隊員は原則戦闘行為は出来ない。しかしそれ以上に時崎の力はきつと今度の大規模侵攻で役に立つ。

「上層部はどう考えているんだ風間??」

「……まだ判断しかねると。迅の予知も時崎には反映しにくいようだからな」

「なんつうトリオンだ……」

「それでもC級隊員であり扱いとしては規定通り。」

何か起きたときは速やかに本部に帰還させるようにする」

「そいつが、うまくいかないんだよな」

その声に全員がモニター室の入口の方へ向いた。

そこには防衛任務を終えた迅がいたのだ。

風間は少し不機嫌そうな表情で

「どういうことだ迅。予知は見えないんじゃないのか??」

「まだハジメのことは見えない。」

「だけどハジメに関わった人間に関しての未来は見えるんだ」

「つまり、良くない未来が見えたのね??」

「全てがそうだとはい限らない。むしろいい未来が多いかな。割合としては7:3ぐらい良いほうだよ」

それを聞いてホツとするがそれでも3割も悪い未来がある。

そしてそれを少しでも減らすには

「もしかして、時崎が好き勝手にやったほうが未来が良くなるのか、ですか??」

「その通り。アイツの勘は当てになる」

「んな賭け事で街を、人を、時崎を守れるのか迅??」

「守るよ。俺は直接ハジメには関われないけど、少なくともここにいるメンバーはそれをやってくれる。そして時崎に関わった人達も守ったり守られたりして、結果上手くいくことが多い。未来を選ばずら、俺はそれに賭けてみたい」

迅の真剣な瞳で訴える言葉。

少しの沈黙の中風間がため息をついたあと

「やるならしっかりと上層部へアピールすることだ。」

それが通れば、その賭けもやってやらないことはない」

「私はいいわよ。みすみす私のお気に入りを無くすなんて嫌なもの」

「しゃーねえーな！カワイイ後輩の為だ！やってやるよ!!」

この決断がまた大きく未来を変える。

時崎が現れなかったあの未来よりもずっといい未来にへと変わっていく。

ある日の訓練中のお話（緑川 駿）①

「ふむ。これで訓練は一通りやったな」

「なかなか大変ですね。これは」

遊真とハジメは真面目に訓練に参加してポイントを貯めていた。今回やったのは探知追跡訓練。遊真が一位を取り満点。ハジメもそこそこ使えて順位としては上位に入っていた。

「しかし前回の隠密行動訓練は勝ちたかった」

「ズルいと言われてましたけどね」

隠密行動訓練。

敵に見つからずに移動する訓練なのだがこれはハジメが有利、というかカメレオンのように姿を隠すので見つかることがない。

そしてその時にハジメが遊真を見つけて声をかけてしまい、それに反応した遊真が見つかってしまい2位になってしまったのだ。

声をかけてごめんなさい。と謝ったハジメだが遊真は特に気にせず、むしろ声をかけられただけで反応した自分が悪いと今度の訓練は一位を取る！と意気込んでいた。

で、その訓練が終わったあと周りから「ズルい」「卑怯」と陰口を叩かれていたハジメだったが

「自分の力を使ったんだ。別にルール違反じゃないよ」

「昨日は助かりました」

そこに現れた時枝に助けられたハジメ。

周りのやつにキチンと説明をして納得してもらった上で今日も訓練に来れたハジメだった。

「気にしなくていいよ。二人共急いでB級を目指してるんだよね??」

「そうですね。だからこれからどうしようかと……」

「なら”ランク戦”をするしかないかな」

「やっぱりそうなるか……やり方を教えてくれない??」

ということの時枝に連れられてブースに入る二人。

「このパネルに表示されているのがいまランク戦に参加している人達。ここから対戦相手を選ばいいよ。止めたい時はブースを出れ

ばいい」

「この前強制的にやられたので知ってます。UMAに教えてあげてください」

「オツケー。それでポイントの高い人と戦えば貰えるポイントも高い。逆に低い人とやれば大したポイントは入らない」

「なるほど、なるほど」

あとは時枝先輩に任せよう。とブースから出ていくハジメ。さてどうしようかなーと考えていると、

「…………あれって…オツサムと…誰?！」

見たことのない小さな少年が修と一緒に歩いており、その後ろをハジメと同じC級隊員が付いてきている。

これはなにかあつたかなーと、近づいてみることにした。

「何してるんですかオツサム」

「ハジメ。いや、ちよつとな…………」

「いまからこの人と勝負するだ。」

…………もしかしてアンタも玉狛支部の人?！」

「ふーん。ならメガネくんの後にやろうよ」

その挑発的な言葉と視線にハジメは何かを感じ取った。

これは、間違いなくオツサムを陥れようとしていると…

そしてその次に自分をやるつもりだと。

理由は分からないけど”玉狛支部”になにか因縁でもあるのか?数少ない情報だけでこれ以上は推測出来ないと判断したハジメは

「僕、C級ですけどいいんですか?！」

「そっかー。まあ見れば分かるけど。B級に上がったらやろうよ」

「そうですね」

まあC級相手ならこんな感じの対応だろう。

しかし向こうはA級隊員。そして相手の修はB級。

この意味、オツサムは分かっているのか?！」

「オツサムオツサム。大丈夫なんですか?！」

「…………まあ、勝てるとは思ってないけど、頑張れるよ」

「いや。そういう意味ではなく」

「何話してるの??ほら、いくよ」

そういつて修の腕を取り強引に連れて行く。

これ、結構マズインじゃないかと思つたハジメはとにかくこれをU
MAに話さないときさっきいたブースに戻つたが

「え、ええ……いない……」

すでに空き部屋になつており、そこには遊真はいなかった。

……

「この前見たいに撃つてこないんだね」

遊真は自動販売機の前で三輪と遭遇していた。

そこで落とした小銭を三輪が拾い遊真に渡したところで疑問に
思つていた事を遊真が口にしたのだ。

「……………本部がお前を受け入れた。なら、倒すのは規定違反だ」

「なるほどなるほど」

いまは立場が違うから何もしない。

いいかえればまだボーダーに入っていなかったら撃つてきたとい
うことになる。

「それと、お前はもう倒す必要はない」

「おっ。心変わりしたのか??」

「ふざけるな。ネイバーは敵だ。」

ただお前は他のネイバーと違うというのが分かつただけだ」

以前の三輪は”全てのネイバーは敵”だった。

それが”ネイバーは敵”となりどんな奴でも倒す。という概念が
無くなったのは大きな進歩だと言える。

すると、そこに見覚えのあるお子様が

「がんばつとるかね、しょくん」

「陽太郎。それに、えーと”ヤリ”の人」

「米屋だ。そういえばボーダーに入ったんだな」

「そう。で、なんで一緒にいるの??」

「クソガキ様のお守りをしてるんだよ」

「陽介はしおりちゃんのイトコなのだ」

「ほう。しおりちゃんの」

すると米屋は遊真の隣にいる三輪を見つめ

「つーか、秀次。おまえなんか会議に呼ばれてなかったか？」

「…………今からいくところだ。体調も戻ったからな」

「体調悪かったのか??」

「…………まあ、コイツも色々あるんだよ」

特に別れの挨拶もせずはこの場から去ろうとする三輪。

しかし途中で歩きを止めた三輪は

「…………おい、ネイバー」

「俺の名前は空閑 遊真だよ」

「…………アイツに”悪かった”と言っておいてくれ…………」

遊真の指摘を無視したが、それよりもプライドの高そうなあの三輪が謝罪することに対して米屋がビツクリした表情をし

「…………アイツが謝るなんてな…………」

「なんかよく分からんが、いい方向にいってる感じだな」

「…………ああ」

……

こうして三輪は会議室に向かっていている途中、前方から見覚えのある。さつきまでは噂していた者が走ってくるのが分かった。

「あつ。どうもです。三輪先輩」

「……………………ああ」

「すみませんが、うちのUMAを見ませんでしたか??」

「……………………この先にいる」

「そうですね。ありがとうございます」

お辞儀をして遊真の所に向かおうとしたところで三輪が「…………待て」と呼び止めた。

「…………どうして、普通に接してくる??」

「どうして、と言われましても…………」

「あれだけのことをした。なら…………」

「でももう襲う気はないんですよね」

「ッ!?!」

「なんとなくですけど、そんな気がしたので
考えが変わった人にとやかく言いません。それだけです」
じゃ、失礼しますね。といい今度こそハジメは去っていった。
残された三輪は自分の手を見つめ、ギョツと握りこぶしをして開い
たあと、何かを決意したように会議室へと向かった。

.....

『勝者、緑川』

結局、修は緑川に一本も取れずに十本を終えた。

全く相手の動きも読めずにただ倒されただけ。いわばサンドバッ
グ状態になっていた。

それでも修のなかでは「いい経験が出来た」と前向きに捉えてはい
るが、それでも圧倒的な惨敗に少し堪えてもいた。

ブースから出るとそこには遊真、陽太郎、ハジメがおり

「こらーおさむ!!」

なにまけているんだ!!」

「なんか目立っているなオサム」

「全敗ですか。そうなりますよねー」

「陽太郎に、空閑、ハジメ……」

どうしてここに?と質問しようとしたところでブースから出てき
た緑川が

「おつかれメガネくん。もう実力も分かったし帰っていいよ」

と、簡単にあしらう緑川。

周りの野次馬であるC級隊員はそんな様子を見て「やっぱり噂じゃ
ないの」「そうだよ風間さんに勝てるわけねえーよ」「だよな。俺でも
勝てそうだけ」などと好き勝手に言っている。

それを見た遊真は緑川に

「この人達、アンタが集めたの?」

「違うよ。風間さんと引き分けたっていうウワサに寄って来たんだ
ろ。オレは何もしてないよ」

その言葉、遊真は真つすぐに緑川を見て、言い切った。

「おまえ、つまんないウソ、つくね」

「ツツ!!」

すると遊真は一步、緑川の前に出る。

そのタイミングで何故かハジメも隣に立ち

「UMA。付き合いますよ」

「俺一人でやるつもりなんだが…」

「C級同士でA級に立ち向かうほうが相手も傷がつきにくいですが…」

「優しいんだなハジメは」

何を言っているのか分からない緑川に遊真がハッキリと

「ねえ。俺達と勝負をしようぜミドリカワ。」

負けたら俺とハジメの点数を全部やるよ」

その言葉にここにいる者達がざわついた。

どうみても勝敗が分かりきっているのに勝負を挑むこの状態がおかしいということに対して

「なに？君達C級だよね。」

もしかして訓練用トリガーで勝つ気なの??」

「お前には丁度いいハンデだ」

その言葉に挑発されたのだろう。ムカツときた緑川は

「いいよ。やろう。」

そっちが勝ったらいくら欲しいの。3000、5000点??」

「いや。いらぬ。その代わり”先輩”と呼べ」

するとニヤリと笑った緑川は

「OK。万が一負けたらいくらでも”先輩”と呼んであげるよ」

「いや、俺達じゃない。先輩と呼ぶのはオサムだ」

「うちの隊長に対して”先輩”と呼んでもらいます」

「……………いいよ。その条件でやろう」

ある日の訓練中のお話（緑川 駿） ②

「それで何本勝負にする？一本、三本、十本??」

緑川、遊真、ハジメが入り仮想空間に転移される前。

話では緑川相手に遊真とハジメで挑むことになっているが

「その前に。ジャンケンで決めませんかUMA」

「いいね。恨みつこなしだ」

と、ジャンケンをし始める二人にあ然とする緑川。

そう。緑川は二人かがりで来ると思っていたのだ。

なのにここにきてソロで自分に挑んでくる。

「くっそッー!!……………負けた……」

「すみませんねUMA。お先です」

二度引き分けた後にハジメがジャンケンに勝った。

悔しそうにする遊真の横で準備運動を始めるハジメ。

それを見ていた緑川は

「なに。俺を油断させて二人かがりで来るの??」

「いえ。しませんけど」

「絶対に負けない。とは言わないけど実力の差、分かっている??」

「そうですね。嫌というほど」

これまでどれだけ相手にしてきたか……

まるでサンドバッグのように撃たれて斬られた加古隊。

イライラすると無謀に挑んで負け続けている風間隊のアイツ。

最近じゃ影浦先輩と他の人達に巻き込まれてやっている戦闘訓練。

「まあ、本命はUMAですので前座としてお相手してください」

「ふーん。いいよ。なら……やってあげるよ」

「ハジメ。五本だからな。ちゃんと代われよ」

「了解です」

そしてブースに入り、まずは緑川とハジメが対戦する。

『ランク外対戦、五本勝負。開始』

……………

「A級4位部隊!?!……………強いとは思ったけどそんなに上だったのか

……」

「陽介とどっちが強い?」

「さあな。ソロポイントだと覚えてねえが、まあ勝ったり負けたりだろうな。だけど緑川は中坊だし才能ならあつちが上なんじゃねーの」そんなやり取りを大画面で戦いの様子を見ながら話している3人。修が手も足も出ないというのは感嘆に領けるほどの実力者。

それが分かったいま、戦っているハジメと緑川の戦いは早くも決着がかった。

『ダメージ大。戦闘不可能』

胸に受けたスコープオン。もちろんハジメにダメージは無いがダメージを計測する機械がそのダメージ量を測り戦闘不可能と判断した。

もちろんそれを初めて見る陽介はその姿に改めて驚いている。

「しかし、マジで攻撃を受けねえんだな……」

「それでもこうして計測する機械があるので」

「それでもよ。実践じゃ攻撃を受けないイコール、バイルアウトもねえ。実質無敵じゃねえかよ……ッ!!」

「それでも、もろはのつるぎ。っていつていたぞ」

「……、なにかあるのか??」

……

『ダメージ大。戦闘不可能』

3回戦も簡単にやられたハジメ。

こうなると単なる消化試合みたいなものに見えるが

(……な、なんだ…コイツ……)

勝ち続けているのに、追い込まれているのは緑川。

一切ダメージを受けていない。それどころかダメージを負うことに対して躊躇いが一切ない。

もちろんこの仮想空間や、トリオン体なら死ぬことはない。

それを頭において無理な戦いをするものも多い。

逆にその”死なない”というのが克服出来ずにやめる隊員もいる。それを知っているからこそ、分かる。

ここまで圧倒的にやられれば心が折れる。

なのに、なにもなく平然と立ち向かってくる。

それが、緑川からしたらおかしい存在になる。

「やっぱりうまくいきませんね。なんであの動きが出来るのか理解できない……」

ハジメの中ではいま影浦の動きを真似ようとしていた。

だけでももちろんそんなこと出来るわけもなく簡単にやられている。

それでも少しは出来ないかなーとやっているに過ぎないが

「……………ねえ、まだやる??」

「やりますよ。あと2回ありますので」

「ここまで実力の差があるのに」

「あつても戦つてはいけない。ことにはなりませんよね」

ハジメは手からスコープオンを出してグネグネと動かして感覚を覚えようとしている。不通なら先輩に胸を借りている後輩のようにしか見えない光景なのに……

(……………早く、終わらせよう……………)

緑川は得体のしれない怖さに怯えていた。

……………

「きようふのたいしようはなにも、てきだけじゃない」

「……………!?!……………おいおい……………そんなこと…考えてるのか……………」

「……………ハジメ……………」

陽太郎の言葉を聞いてとてもツライ気持ちになった。

ハジメが言っているのはいつかボーダーが自分の敵になるんじゃないかという考えだ。

確かにハジメが実戦に出ればきつと大きな実績を得るだろう。

攻撃を喰らわない。攻撃を止められる。相手を止められる。

全てをハジメ一人で対処出来ればきつとそれは相手に恐怖の対象となりえるだろう。

しかし、何時のときも”強者”は”恐怖”の対象である。

それが相手だとは限らない。と考えているハジメ。

いつの日か、ネイバーの侵攻が無くなり、何もかも上手くいつて平

和になった日がくるとする。

その時、ハジメが恐怖の対象として、敵として扱われる日がくると考えているのだ。

人は強すぎるものに恐怖を抱く。

それがいくら味方の、平和へと導いた相手でも。

もし裏切ったら。もし暴走したら、もし対象が自分達に向けられたら……

そう考えてしまえばあとは落ちるだけ。

「なにも証拠もない妄想が」いつか起きるかも」というだけで人を残酷な道へと歩ませることになるのだ。

つまりハジメが懸念しているのは実力を見せすぎたあとにあるかもしれないボーダーの裏切りだ

「ありえねえだろう！んなもんボーダーがやるか!!」

「それはハジメもわかっている。だからともだちをつくっているようだぞ」

「……少しでも、味方を増やすため……か……」

「おれもおなじこときいたけど、ちがうぞオサム。

すこしでもおぼえてもらうため、だぞうだ」

「ハジメとともだちだったとおぼえてくれたらいいって、いったぞ」
その言葉に胸が締め付けられる思いになる修。

ハジメが必要以上に友達に拘っていたのは、もしもの時でも覚えてくれている友達が多くいるため。

そのためにこうしてやっている。なんて……

「なんかしみりになったが、これハジメがじょうだんっていったやつだからな」

「冗談かよッ!？」

……つたく、陽太郎もハジメも人が悪いぜ……」

「ふふふ。こうすればきつとノツてくれるとハジメとそうだんしたか
いがあった!？」

「……………」

ハジメの真意は分からないが、きつと全てが嘘だとは修には思えなかった。少なくとも、友達に覚えてもらうためというのはきつと……
……………

「あと、1回か…さて、どうしようかな?？」

さつきより上手くスコアピオンを動かせた。

緑川にスコアピオンでふさがれるまでには動かせた。

それでもあつさりと負けてしまっているハジメ。

「……………よし。最後はちゃんとやるか」

「……………なにそれ?手加減でもしていた。と言いたいのか?？」

「いや、これで勝つても文句言われそうだったので」

「……………ぶっ倒す!!」

ワザと挑発したわけではないがメンタル的に疲労していた緑川は簡単に乗ってしまった。

開始の合図と共に飛び出した緑川は一直線にハジメの首を切り落とそうと腕からブレードを出していた。

するとハジメはスコアピオンを引つ込めた。

そして出したのはアステロイド。

(誘導された!?)

それでも緑川にはそのアステロイドを避けるためのトリガーをセツトしてある。ギリギリまで引き付けて避ける。

と、考えていた緑川だがハジメはその予想を裏切る。

「アステロイド」

「なっ!?!」

そのアステロイドを地面に、自分の近くに向けて撃つたのだ。

放たれたアステロイドは地面をえぐり、土煙を辺り一帯に広げた。

とっさのことに反応が遅れた緑川は避けようとしていたトリガーを使うことが出来ずにそのまま土煙の中へ。

それでも大体の位置も分かっている緑川は勘を頼りに腕を振るう。

「なっ!?!」

しかしその瞬間全身が動けなくなった緑川。

金縛りにあったように動けなくなった緑川の目の前に、土煙の中からハジメが現れて

「すみません。こうしないと勝てないので」

と、謝りながら緑川の胸にスコープピオンを突き刺した。

どうしようもできない緑川の体はヒビが入り

『供給機関破損。ベイルアウト』

となり、緑川のトリオン体は破壊された。

.....

「くそー! 負けたー!!」

「とりあえず一本ですね」

そう言いながらブースから出てきた二人に

「おいおい。一本とはいえ緑川に勝つとはな…」

「よくやったハジメ!!」

「なかなか面白かったぞ」

と、陽介、陽太郎、遊真に声をかけられ、離れていた修もこちらに近づいてきて

「凄かったよ」

「まあ、最後はあんなふうに突撃されないと使えない手だったので」
「それでも、スゴイと思つたよ」

「ありがとうございます」

ハジメの言葉の通り、きつと同じでは使えないだろう。

それでもA級に対して一本取れたのはスゴいと素直に思った修。

「いやー最後は本当にビックリしたよー」

「すみません。なんか卑怯な手みたくしたので」

「全然。相手の裏をかいたり、駆け引きするのが面白いんだよツ!!むしろあの挑発に乗ったオレがバカみたいだ……」

「バカみたいじゃなく、バカだな」

「みなまで言わなくてもいいじゃんか!!」

さつきまで怖い顔していた緑川だが何か吹っ切れたような表情をしている。陽介に一通りイジられたあとに修の前に立ち

「すみませんでした!!」

「え、ええ……」

「本当は恥をかいてもらおうとやりました。本当にすみませんでした!!」

「やっぱりそうだったのか」

「い、いいよ……本当に弱かっただし……」

「そんなことないです!!ヒヤツとした場面が何度かありましたが自身持つてください三雲先輩ツ!!」

励まそうと言っているのか分からないが、緑川が遊真達との約束の前に修に対して先輩と言ってきた。

「ありや?これだとオレとはやつてくれない感じか??」

「遊真先輩が良かったらこのまま五本やろうよ」

「オレまで先輩と言わなくていいぞ」

「これは俺のけじめだから」

「そうか。なら五本と言わずに十本やるか」

「さすが遊真先輩ツ!!」

と、二人がブースへ向かおうとしたところで

「やらせたいところだが、それは中止だ遊真」

「迅さん??」

「ちよつとききてくれ。城戸さん達が呼んでいる」

大規模侵攻（始まりの前）

「よう秀次」

「……………何のようだ迅……………?」

ボーダーの屋上。

そこには三輪秀次と迅がいた。

今度の大規模侵攻についての話し合いも終わり、迅は三輪を探していたように

「ちよつとお前に話をな。

つてか、なんか随分と顔色が良くなつたなお前。何かいいことでも

あつたか??」

「……………、あつたとしてもお前には言わん」

「ちえつ。まあ、それはいいか。それよりだ……………」

迅は三輪の前に回り込みこう話しだした。

「秀次。お前にメガネ君を助けてもらいたい」

「……………どういうことだ。何故俺にいう??」

「今度の大規模侵攻。俺はそこにはいない。

他の所にいくとマズい展開が起きる可能性が高い。

そしてメガネ君を助けられるのは現状お前達だ」

その言葉にピクツと反応する三輪。

迅の言っていることは確かに分かる。しかし

「迅。お前はさつき」達」といったな。ならそいつにやらせろ」

「そういうわけにはいかない。というかハッキリ見えないからな」

「……………時崎か」

「正解」

つまりは未確定な未来の中で三輪が一番修を助けられる可能性があると
言いたいらしい。だが三輪は

「なら、簡単だ。三雲を玉狛支部に閉じこめておけ」

「そうしたいところだけど、その時はもうお前だけなんだよな」

「三雲も正隊員だ。自分の身は自分で守らせろ」

「まあ、最もな意見だ。だから秀次、取引しよう」

「お前がメガネ君を助けてくれるなら、お前に”風刃”が持てるように俺から交渉してやる」

.....

修達も大規模侵攻の話し合いが終わり帰る途中に忍田から呼び止められていた。内容は”遊真のB級昇格”だったのだが

「俺はいいよ。それよりハジメのほうがいいんじゃない??」

「時崎については意見が分かれている。」

時崎のトリオンはS級レベルだと全員が判断しているが、それでも戦闘となるとガラツと低くなる。それに対して幾つも候補があるためまだ判断出来ない」

まさかの話に修や遊真はビックリしている。

とうの本人は全然気にしていない様子だが……

「ちなみにどんな候補があるの??」

「ボーダー本部の防衛任務や、遠征における”船”の防衛や偵察任務。まだいくつもあるがそれだけ時崎のトリオンが有効なのかは分かるはずだ」

「まあ、そうだろうね……」

納得のいく話だと遊真は感じた。

特にボーダー本部の防衛は完璧だろう。

建物ごと一時停止出来れば敵の攻撃は効かないのだから

「ボーダー本部の防衛って、建物ごと守るといんですか??」

「そんなのトリオンが持つわけ……」

「えっ?? やっちゃったんですけど……まずかったですか??」

その声に誰もがハジメの方を向いた。

そこで見たのは片膝をついて片手を床に付けているハジメ。

つまりいまハジメがしたのは……ボーダー本部全施設の完全防衛

……

「なっ!?!」

「そうですね。5割ぐらいですかトリオンが減ったのは……」

んだようなもんだぜコレ……」

参ったよ本当に……と、言いながらも顔は驚きつつも喜んでいる表情をしていた。規格外だとは思っていた三輪だがそれでもさらに上のことをしたハジメに

(……………変わる、ということか……………)

それが何に対してなのか本人も知るよりもないが、それでも思わずフツと笑ってしまうほどにおかしかったようで

「……………いいだろう。迅。その話に乗ってやる」

「おっ。マジか!!」

「ただし条件付きだ。一番厄介なネイバーとやらせろ」

「そう来ると思っていたよ。メガネ君の所に来るよ」

「なるほど。最初から想定していたわけか」

まあな。という迅にムカついた三輪だったがそれでも

「やはり、俺はお前が嫌いだ」

「そんなことをハッキリいうかね……………」

言うことを言つてやろう。

それさえも想定済みだったとしてもムカつくことに変わりない。

そう判断した三輪は今度こそ屋上から去っていった。

……………

「凄かったなオッサムの人気は」

「あの光景は面白かった」

「止めてくれよ、二人とも……………」

修のB級昇格を知ったクラスメイト達が修の周りを取り囲み色々と話してきたのだ。普段では考えられないことに修は軽くパニックしていたが、そんな様子を遊真とハジメは温かく見守っていた。

「嫌です。結局しばらく防衛機能として使えると判断したというのにそれでも怒ってきたんですよ鬼怒田さんは。その傷を癒やすために犠牲になってください」

「要は腹いせ、か……………」

「俺としてはオッサムが人気なのは良いと思ったからだぞ」

「嘘でも遊真のような言葉が欲しかったよ……………」

無理ですね。とバツサリ切られた修はさらにガツクリときた。

あの状況で自分からこれ以上は止めてくれと言えなかつたのでハジメに対して強く言えないことが心労としてキテいる。

「おーい」

「やつとききたか」

「うん？そっちの子は」

ここで昼飯を食べるために屋上に来ていたハジメ達の所に千佳ともう一人の女のコが現れた。

どうやら同じスナイパー志願であり同期のようで

「夏目 出穂っす」

「ご丁寧にどうも。時崎 一です」

「いやーこれトリオン体なんですよね。」

それでも直接話すまでいるのにいない！って感じでした…」

「オッサムの人気度が上がったからですかね…」

「僕を引き合いに出さないでくれ…」

冗談です。と言ってみたが人によってはハッキリと認識出来ないんだなーと改めてトリオン体について考えた。

このトリオン体じゃなければ修や遊真達のような親しい人以外には見えない。見えるためには時間とハジメという存在を認識する必要がある。

そしてトリオン体でも全ての人がハジメを見れていても、認識する頻度が違うために話しかける必要がある。

昔に比べればずいぶん改善されたが

(……やっぱり、普通……ってわけにはいかないですね……)

普通に出会い、普通に話して、普通に遊ぶ。

そんな”普段”に憧れていたがそれが改めて簡単じゃないんだなーと再認識している

「……ッ!？」

「どうした千佳?」

「……どうやら、来たみたいですね……」

空に無数のゲートが発生。

近いうちとは聞いていたがこんなにも早く大規模侵攻が始まるとは誰も思わなかった。

そしてハジメは聞かされていた。

ハジメの行動一つで修の運命が変わるかもしれないと。

(……………本当に、好き勝手にやりますよ……………)

しかし迅からは好きに動けと言われている。

なら思うままにやろうと決めたハジメは

「避難誘導はC級でも良かったですよね」

「ああ。皆を避難させよう」

「了解！」

「了解す！」

いまやれることをやろうと、これから始まる大規模侵攻へ足を踏み入れた。